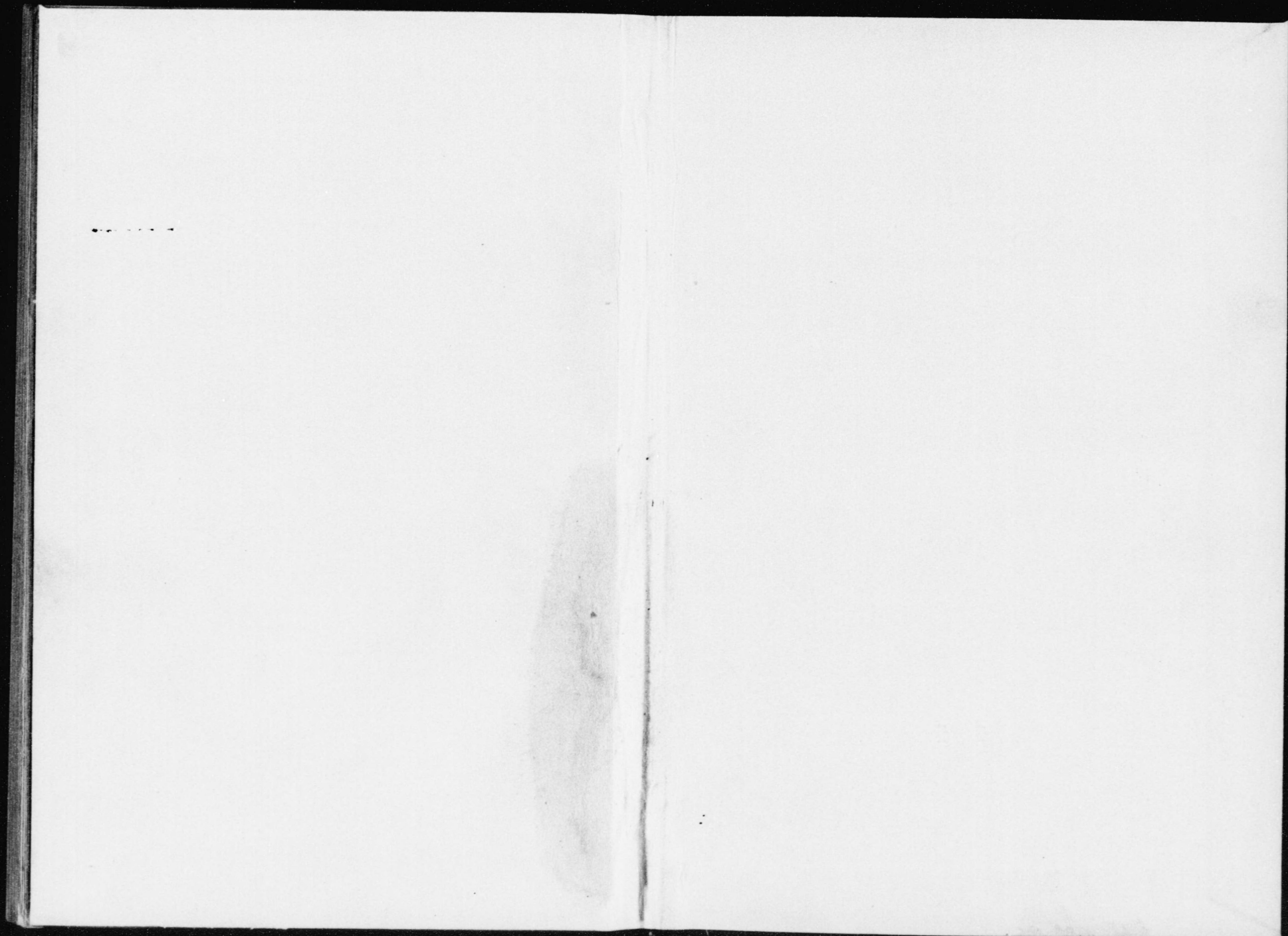


539

3/4





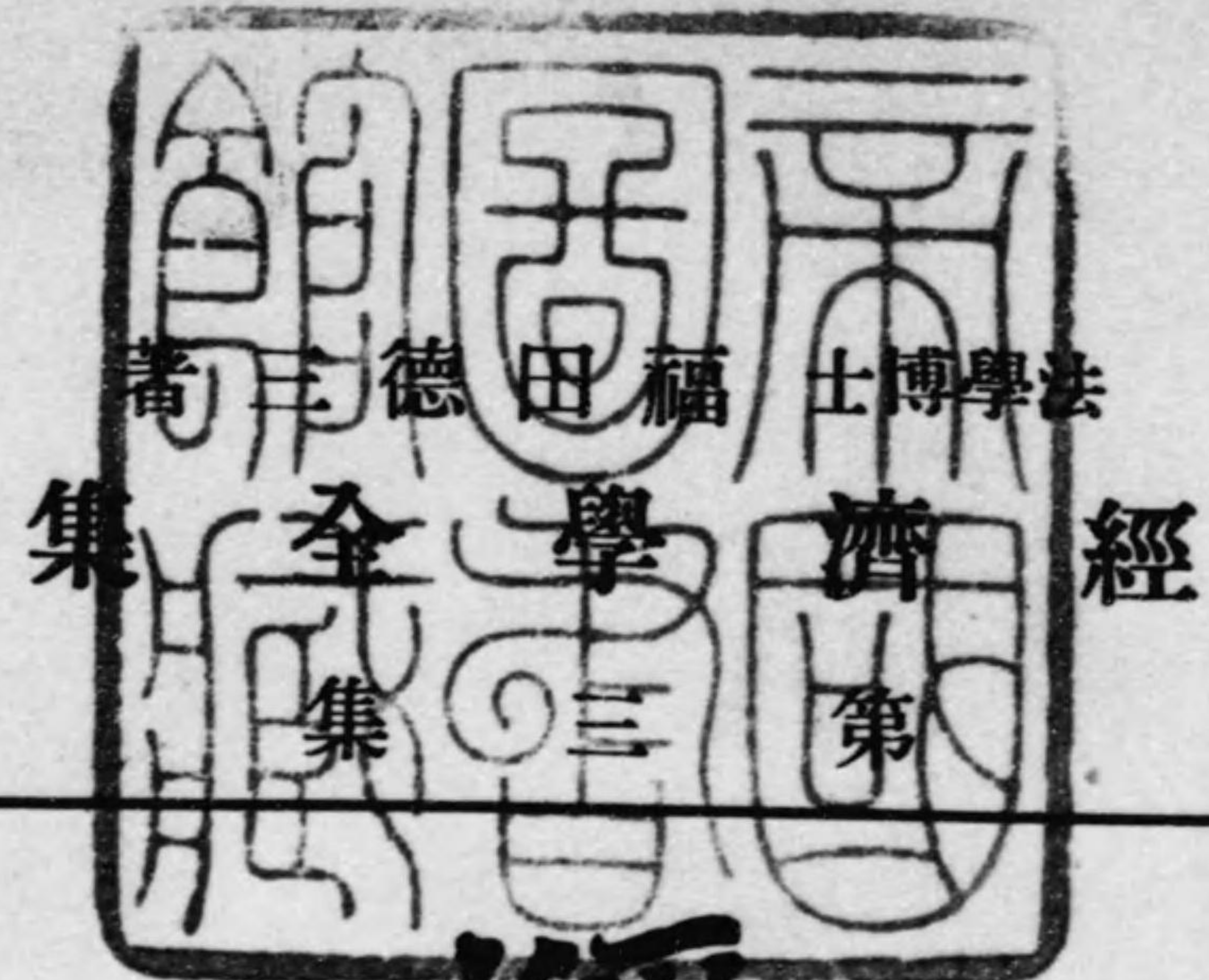


539  
3/4



539  
3/1





經濟史經濟學史研究

廉刷版



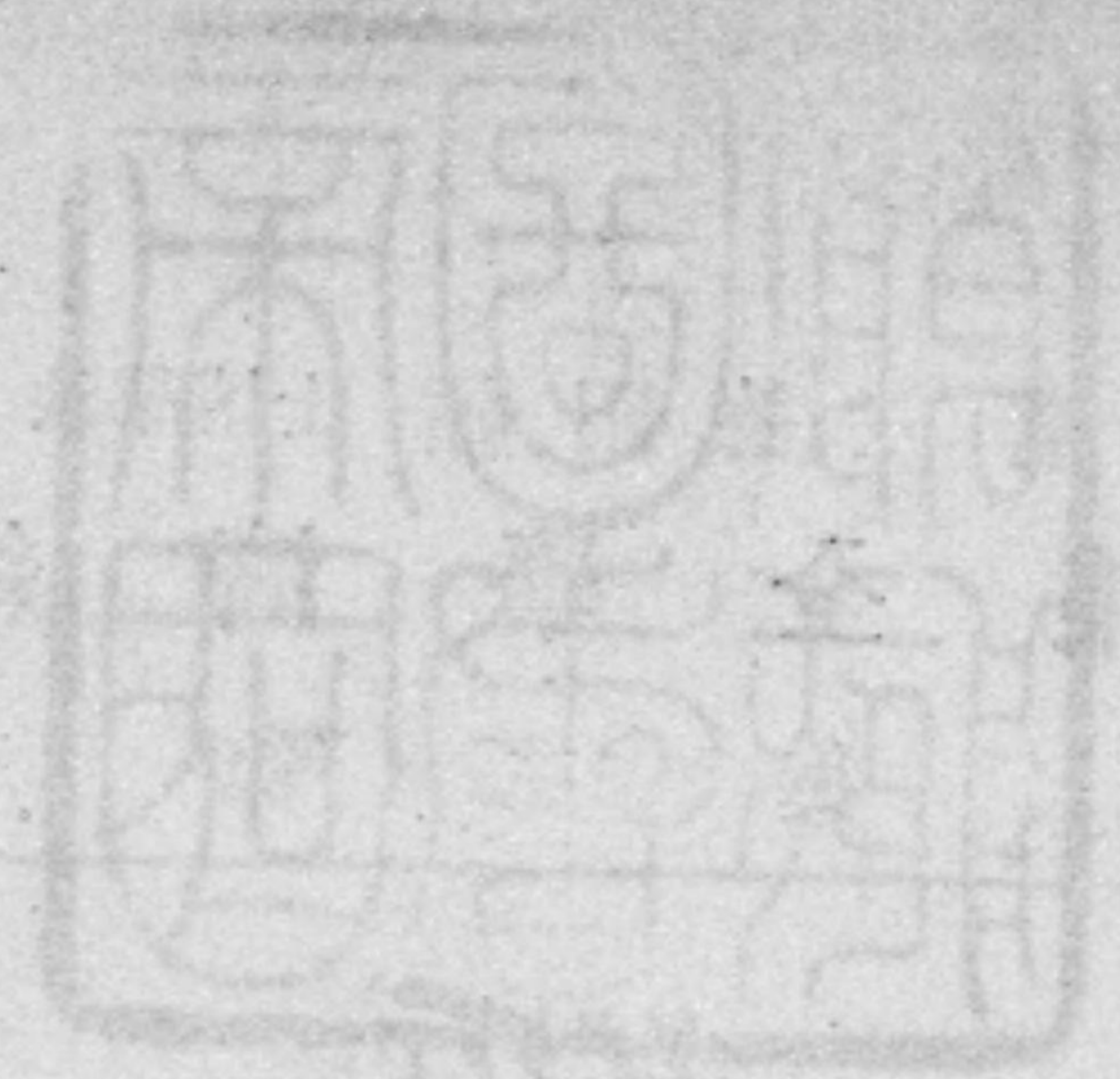
第三分冊



539-314

八 英國の學問としての經濟學  
殊に商國主義の始終

(改版經濟學考證 其八)



經濟學考證





目次

第一章 英國の學問としての經濟學と其決算期

第二章 『ヒュマニスト』よりバーボンに至る。英帝國勃興時代の經濟論

第三章 印度貿易と『メルカンチリズム』。世界商權成立時代の經濟學說

第四章 商國主義と確立。マンとチアイルド

第五章 商軍國主義と和蘭凌駕論

第六章 新商國主義。特にバーボンの學說

第七章 バーボンの價值論

第八章 バーボンの貨幣論

第九章 バーボンの信用及利子論

第十章 バーボンの貿易論

第十一章 バーボンの貿易均衡論

第十二章 ノースの經濟學說

第十三章 商國主義の終末。新趨勢起る

第一章 英國の學問としての經濟學と其決算期



經濟學は英國の學問にして英國は經濟學の祖國なることは誰人も否認し得ざる明瞭の事實なり。今日と雖も經濟學の研究者は其材料の大半を英國に仰がざる可からず、獨逸の歴史派境太利の利用派佛伊瑞の數理派、さては米國の所謂主觀派等は、畢竟英國の學問の闕を補ひ遺を拾ふ點に於て著しき功業を樹てたりと雖も、斯學の本流は依然として英國に存するの實あるは争ふ可からざるなり。而して斯く經濟學を英國に土著せしめを起したるロッシアは云へり。『英國經濟學の黄金時代は千七百四十二年より千八百二十三年、即ちヒュームの論集の創刊よりリカルドの死に至る時代に在り、ヒューム、スミス、マルサス、リカルドの四人は此時代の嚮導者にして英國經濟學の巨擘なり。予は近世



に於て此の時代の英國經濟學ほど比較的完全なる學統を成せるもの、何れの國民にも何れの時代にも存せしことを知らず』と。

Roscher, Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre im 16 u. 17 Jahrhundert, Leipzig, 1851, S. 3.

ヒュームは實に此の黄金時代を開始したる先達にして哲學の上に於て彼はカントの先驅者なるが如く經濟學の上に於て彼は其父と呼ぼるゝアダム・スミスの先驅者なり。獨り此れに止まらず、ヒュームはスミスに對しては或は師父の如く、或は長兄の如く、其の學問の上に最も深き感化を及ぼしたるものにして、ヒュームを離れてアダム・スミスを理解するの難きは、ペンタム及父ミルを離れてジョン・スチュアート・ミルを理解するの難きと相似たり。故に此點よりのみ云ふも、英國經濟學の研究に於てヒュームは甚だ重要な關係ある者と斷す可きなり。然るにヒュームの重要な此の點のみに止まらず、ロシアの云ふ如く『ヒューム、スミス、マルサス、リカルドの四人は相互に離す可からざる關係を有し、一人其研究を止めたる處即ち次の一人其研究を始めたる處にして、何れも新しく博く且つ獨創の研究法によりて學問の分野を擴張し、其研究法をより深くより鋭くしたる』<sup>同上</sup>ものにして『英國人が抽象的、系統的、思索の領分に於て近來成し遂げたる凡のも

の、中に就て、其經濟學は最も完全なるものなり。從て經濟學は英國に於て最も Populär なる學問にして、上は内閣首相より下は一工場職工に至る迄之に對して最大の興味を有し……嘗てピットが公言して憚らざりし如く、經濟學上の謬見は今日は國務大臣をして其名聲を失墜せしむる所以たらざるはなし』<sup>同上</sup> 第四百と云ふ誠に當れり。十八世紀の末葉より十九世紀の初に涉りて、旭日登天の勢を以て世界第一等の國となりたる英國は、又世界に對して最も誇り得る其經濟學を此期間に大成し、經濟學は英國ありて其の大を成し、英國は經濟學によりて大を成し、英國の經濟學か經濟學の英國かと言はしむるに至れり。予常に謂らく、英國なくして經濟學を考へ能はざる如く、經濟學なくして英國を考ふることも亦能はずと。國の運命と學問の發達とが斯くまで密接の因縁を有するとは寧ろ稀有の例にして、希臘と其哲學との關係を除いては之に比較し、得可きもの無きに似たり。其原因に種々あり、其事情亦た必ずしも單純ならざるは言ふまでもなき所なれども、其原因の最も重なるものは 一十六、十七、十八、三世紀に於ける英國哲學の發達と 二 同期間に於ける英國富強の増進、殊に外國貿易及植民地の隆盛との二者に在ること



粗ぼ學者間に異論なきが如し。而して此二の趨勢はヒュームに至りて漸く圓熟の域に入り、茲にロッシアをして英國抽象的思索の最完全なるものと評せしめたる英國經濟學を生み出すに至れるなり。哲學の方面に就てはハックスレー教授、其ヒューム評論に於て次の如く云へり。

『若し汝の志哲學的問題に關し博詞宏辯を陳するにあらんか、先づ希臘の哲學者より初めて最近時に至る迄の諸哲學書を博覽涉獵せよ。汝にして良き記憶力と希臘、佛、獨語の若干素養とを有せんか、三四年の勉強を以て優に目的を達するを得ん。之に反し汝若し眞正なる知識を得んとの世に稀なる志を懷き、人間の智能の前に横はる最深の問題に就て明瞭なる觀念を得んと欲するか、然らば汝は英語以外に出するを要せず、汝時間の餘裕なきものたらばバークレー、ヒューム及ホッブスの三英國學者を研究せば則ち足れり』

*Hurley, Collected Essays, VI. Hume with help's to the study of Berkeley, New York 1902. Preface XI-XII.*

教授の此の言稍々偏することは認めざる能はずと雖も、少くともヒュームの前ベークン、ホッブス、ロック、バークレー等の哲學ありて、英國の經濟學を起すに與つて重大の關係ある

こと否む可からず。此四人何れも其哲學論の外若干の經濟論を成して直接に寄與する所あり。此一事を以てしても英國哲學者は獨逸并佛國の哲學者よりも我邦に因縁深きものあり、況んや彼等の順次に建設し行きたる固有の哲學は、ヒュームあるありて之を完成し、直ちに之をアダム・スミスに傳へたるに於てをや。斯く觀察すれば『スコラ』哲學の經濟學に於ける、ルーテル、カルヴン等宗教家の經濟政策に於けるよりも、寧ろアリストテレスの經濟理論に於ける地位こそ、英國哲學の我邦に於ける關係に似たりと云ふ可きなり。他國他派の哲學は或は之を知らずとも、經濟學說の發達を究むるに大なる差支なしと言ひ得可きあり共、獨り英國の哲學に至りては決して之を知らざるを許さず。最も限局して觀察する場合に於ても、ヒュームの哲學なくしてアダム・スミスの經濟說を諒解することは甚だ困難なりと斷言せざる可らず。他方に於ては十六世紀より十八世紀に涉る英國商權發達の實際事情は、經濟學の發達に重大の關係あり、和蘭に於て東西印度貿易の發生が一方に株式會社の發生を促し、他方に其經濟學者の卓出せるウセリンクス并にピーター・ドラクールを生じたるものなる事、前掲『十七世紀に於ける和蘭經濟學



說一班殊に商國主義の學說』なる拙文に於て略述を試みたる所にして、英國に就ては其關係更に一層顯著なるものあり。殊に和蘭の東印度會社と中央銀行（アムステルダム銀行）を模倣して起れる英國の東印度會社と英蘭銀行とは株式會社の權輿にして、此兩機關に關連して起れる利害得失の講究、論難辯護の行論は、即ち經濟學の搖籃たるものなり。外に對しては外國殊に兩印度貿易と、各地に於ける植民地の獲得及其經營、内に在りては銀行、貨幣物價等の諸事實とは、英國に學問らしき經濟說を生れ出でしめたる所以のものなり。ヒュームは明かに此消息を道破したり。ポーナーの『哲學と經濟學』に言ふ所實に左の如し。

He (Hume) believes himself the founder of the science of human nature as an experimental science. He believes in the possibility of a science of ethics and a science of politics. He believes, lastly, in the possibility of a science of Economics. He does not indeed use the term, but he describes the study itself. Its scope is, he says, an inquiry into the nature of commerce and riches, and their effect on the greatness of the state and the happiness of individuals. Till England and Holland (he says) had shown what commerce could do to make a state prosperous, no one had thought the subject worthy of special study. Bonar, Philosophy and

Political Economy in some of their historical Relations. London 1893. p. 105.

ヒュームは自らを實驗科學としての人生の學問の建設者なりと信じたり。彼は倫理學と政治學との可能をも信じたり。彼は經濟學なる名稱を用ゐたることなしと雖も、其研究を如何になす可きやを記述し居れり。彼謂らく、經濟學の範圍は商業と富の性質并に其國家の大と個人の幸福とに及ぼす作用の研究なりと。而して曰く、英國と和蘭とが商業が國家を繁榮ならしむるに與つて如何に力あるかを示めすまでは、誰人も經濟學の問題とする所が特殊的研究に價するものなりと思惟したることなし。

予はヒュームに此の言あるを知らざりし前、眞正の意味に於ける經濟學は、和蘭と英國の盛大なる外國貿易なくしては起り得ざりしことを悟り屢々之れを公言したり。ヒュームの言を聞いて予が淺學寡聞の幸に謬りなきを喜び、同志を見出したるを感謝せざる能はず。元より此事實は一般的通則を打建て得可きにあらず、殊に將來に對して豫言の効力を有す可しと考ふ可からざるや勿論なり。唯だ今日までの經濟學說の發展に於て、此事實は顯著明白にして殆んど一點の疑を容れざるに似たり。此事實を更に一層鮮明ならしむるものば、輒近四十年に於ける我邦の狀態なり。英國の世界商權獨占に對して



漸く競争者の地位を占め始めたる國は、又經濟學の上に於て英國學派に對して別乾坤を開く可く始めたる國なり、獨逸歴史派社會政策學派の勃興は即ち是なり。今や世界に於ける英國の『プレスチツヂ』漸く失はれんとする時、自由主義英國經濟學のプレスチツヂも亦争はれつゝあるに非ずや。來る可き半世紀否四半世紀は、或は斯くして經濟學の上に於て再び新なる紀元を開くことなきを保す可からず。唯だ獨逸今日の經濟學其耆宿長老は漸くに或は死没し或は老衰するに、第二代の學者中之に代ふる可き天資雄材の認む可きもの甚だ尠きが如くなれば、這箇新紀元の來ること或は著しく晩るゝことあるやも計られずと雖も、大勢の趨く所雙手空拳の克く支ふ可きにあらず。少くとも第三階級の學問たる状態より漸く脱す可く始めたる我經濟學は、今に迫んで第三階級本位國たる英國の學問たるの實を漸く失はんとしつゝあることは誰人も之を拒む能はず。マーシアル教授或は英國經濟學 silver age の最後の一人たるの名を留むるに至るやも計られず。果して然らば英國經濟學研究の決算期は既に到來せりと云ふ可きにあらざるか。

## 第二章 『ヒュマニスト』よりベーコンに至る

### 英帝國勃興時代の經濟論

希臘羅馬の哲學を承けて一時盛なりし『スコラ』哲學は中古の去ると共に去れり。茲に啓けたるものは即ち『ヒュマニスト』の學問にして、我經濟學は此時代に於て二人の卓越せる代表學者を得たり、マキアヴェリとモーア是なり。

マキアヴェリは其君主論を以てのみ餘りに著聞し『マキアヴェリズム』の名は全く人の誤解し曲解し濫用する處となれりと雖も、近世經濟學史の第一頁は必ず彼を以て始めざる可からざること争を容れざるに似たり。元より彼の經濟論其ものは甚だ貧弱なること、クニース教授の深遠該博なる研究を以てしても、ロバート・フオン・モールが云へる如く、マキアヴェリを經濟學者として證明するに成効せず、却て經濟學者クニース其人の學力を證明するに終りたるを以て知る可きなり。ヴェラリ教授のマキアヴェリ傳に曰



く(原書を藏せず、英譯本に據る)

Herr Karl Knies brought out a careful work, entitled: "Niccolo Machiavelli als volkswirtschaftlicher Schriftsteller".....In this he endeavours to prove that Machiavelli had original ideas even upon political economy; but he only succeeds in extracting from that writer's works a series of phrases and remarks bearing more or less directly upon economical phenomena, and that are as easily to be found in many other historians and politicians of the time. And in praising this work, Mohl very justly observes, that it is a better proof of the acumen and diligence of Herr Knies, than of the economic value of Machiavelli's writings.—Villari, The Life and Times of Niccolo Machiavelli transl. by Madam Linda Villari. Popular edition, London 1898. Vol. II. p. 179—

モールの言は左の如し (慶應圖書館本に據る)

Das Hauptergebnis dürfte aber doch wohl mehr ein Beweis von dem Scharfsinne des Bearbeiters (Knies) als ein Nachweis von irgend bemerkenswerten Kenntnissen und Gedanken des Florentiners (Machiavelli) über die Wirtschaft der Völker und Staaten sein.—Robert von Mohl, Die Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften. Erlangen. 1858 II. Ed. S. 532 Anm. 1: "Machiavelli-Literatur."

マキアヴェリを以て我學史近世部の劈頭に置くべしと云ふは其經濟說を以ての故にあ

らずクニース教授はマキアヴェリ研究の翌年に公にしたる『歴史研究法による經濟學』千八百五十三年刊に於て明かに其要旨を道破せり。

予は右書千八百八十三年刊行の第二版を有するのみにて第一版を有せず此に掲ぐる一條は之をボーナーによりて知れり、仍てボーナーの言を引く

Machiavelli has been said (by Knies, Politische Oekonomie nach der geschichtlichen Methode 1853. p. 319) to have "thrown ethics out of politics as Spinoza threw ethics out of ethics."

政治學を『ザイン・ゾレン』の束縛より解放したること、是マキアヴェリ功業の最大なるものにして、而して近世の政治哲學は實に茲に發端するなり。

ヴィスケマンは其の『宗教改革時代獨逸に行れたる經濟學說の研究』に於いて、獨逸の『ヒュマニスト』と共に否な或點に於ては之に勝りて宗教改革時代の獨逸の政治經濟學說に影響したる者として、マキアヴェリとトマス・モーアとをあげたり。Wissemann, Darstellung der geschichtlichen Entwicklung der Reformationslehre, Leipzig 1861, S. 33-45. ボーナーは近世哲學自然法學派の代表者グロチウスの Precursors としてマキアヴェリ、モーア、及びボダンの三者を論ぜり。同上書



七五九頁 予は兩氏の説に従はざる可からざるを確信す。マキアヴェリは最も深く事實に即すること後の實證派學者に勝るものあり、モーアは之に反し、一般に空想學者の雄なるものと認めらるゝと雖も、根柢に於て此兩人は中世の思想より近世を啓き出したるものにして、其經濟學に於ける重要は同一性質に屬するものならずんばあらず。

ボーマー曰く *As Machiavelli is driven into political theory by the pressing political problems of Italy in his day, Sir Thomas More is driven into economics by the social problems of England in his day..... When he wrote his Utopia, he was distressed about the state of England as Plato, when he wrote his Republic, was distressed about the state of Athens; but in More's case the social questions bulk far more largely than the political, and the philosophy, such as it is, does not extend, as in Plato's case, to the deepest problem of metaphysics.* 同上書六十二頁。

予は此言の一半に賛同し一半に反對す。モーアが深き哲學の問題に入らざりしは、即ち經濟學に貢獻することプラトーンよりも遙に多き所以にして、マキアヴェリは政治學を道徳學より分け分け、モーアは更に其中より經濟學を分け分けたるものと云はざる可からずと信ず。而してモーアは實に英國に於ける近代の意味に於ける最初の經濟論者なりと云ふも大

過なし。現にロッシアは英國經濟學史略稱をに於てモーアを卷頭に置き、之れを『十六世紀初頭に於ける社會主義』と名けて曰く『英國經濟學の劈頭に來るものは、トマス・モーアの『ユートピア』なり』同上書 第六頁 英譯『ユートピア』の編纂者ラムビー曰く

*His book therefore has a living interest for the people of to-day, or the same desires and aims fill the minds of the best among men at the present time.*

『モーアの書は今の人に向つて活きたる興味を有せり、何となれば彼と同じき願望と目的は現在に於ける最善の人々の心を充し居ればなり』

『ユートピア』は拉丁語にて認め千五百十六年白耳義ルヴァン市に於て刊行せらる。書名は次の如し *Libellus vere aureus, nec minus salutaris quam festivus de optimo reipublice statu deque nova insula Utopia.* 英譯はラフロビンソン本を以て最良とす。其書題は *A fruitful pleasant, and witty worke of the best state of a publique weale, and of the new yle called Utopia written in Latin by the right worthe, and famous Syr Thomas More, Knight, and translated into English by Ruyhe Robynson &c.* 刊行年は其末文によれば千五百五十六年なり。其英語は今日の英語と同じからずして甚だ難解なるを近來ラムビーが詳密なる考證、附註を添へて重刻したり。 Pit Press Series



(Cambridge University Press) 中の Sir Thomas More, Utopia ..... edited, with Introduction Notes, Glossary and Index of Names. by J. Rawson Lumby, D.D. にして第一版千八百七十九年以降十三版を重ね。予の據る所は最終版千九百十三年印行の分なり。繙刻書の模範と稱するも差支なき篤實の書なり。讀者幸に他の惡譯によること勿れ。

モリアに續て來る者は僧正ラチマーとウキリアム・スタツフオードなりと傳へらるゝ匿名の一著者にして、ロツシアーは之を第二期『貴金屬價下落時代』と名けたり。

ラチマーの經濟説は其説教集中にあり、此書必ず他に良本ある可しと思へ共予の知る所は近來流布の *Everyman's Library* 第四十冊に收めたるもの是のみ。瀧本誠一博士徳川時代經濟學説に關する講演(國家學會所載)中にラチマーに論及せられしことありしと記憶する外、我邦學者の僧正を論じたるものあるを知らず。

ウキリアム・スタツフオード云々の書は甚だ著聞せり。此書は近來カンニンガム教授門下に銷々の名あり。故レーモンド女史の編集にかゝる重刷本あり。ラムビーの『ユートピア』に於るに均しく極めて篤實深切の書なり。題して *A discourse of the common weal of this realm of England. First printed in 1581 and commonly attributed to W. S. Edited from the MSS by the late Elizabeth Lamond. Cambridge at the University Press. 1893* と云ふ。異本、著作の時代事情及眞の

著者等に就て詳密なる考證を添ふ又、ブレンタノ、レーザー兩先生主幹の内外古今經濟學叢書第五冊に獨譯を收めあり。其の譯書の原本はレーモンド嬢の底本とは異なる當時(一五八一年)の刊本あり。題して *William Staffords' Drei Gesprache über die in der Bevölkerung verbeyteten Klagen.* と云ひ千八百九十五年ライプチヒに於て刊行す。其他の國語に譯本ありやなしや予は知らず。

概して之れを云へば、ラチマー僧正も W. S. と傳へらるゝ匿名の學者も、モリアによりて與へられたる問題を取扱たるものと云ふ可く、現に W. S. 書中の一人は或はラチマー其人ならずやとの説あるなり(問答中の『ドクトル』を僧正に擬し『ジエントル・マン』をジョン・ホールズに擬するはレーモンド嬢なり)。同上書 Introduction XXXIII 以下を見よ。而て此二人者の外猶當時英國に於て類似の論策の出づる其數尠からず、即ち Early English Text Society の刊行したる處文けにても

1. Certain cause gathered together wherein is shewed the decay of England only by the great multitude of shee: ..... and other notable discommodities 1500.
2. Henry Brinkley's complaint of Roderick More unto the Parliament house of England his natural Country



for the redress of certain wicked laws, evil customs, and cruel decrees.

3. Thomas Starkey's description of England in the reign of King Henry VIII., conveyed in a dialogue between Cardinal Pole and Thomas Lupset, Lecturer in Rhetoric at Oxford.

ありと云ふ。 Lumby, Utopia. Intro-  
duction IX に據る。

恰も瀧本誠一君編纂の我『日本經濟叢書』に於る本邦學者の諸書に於ける如く、此等の學者は時弊を憂へ社會經濟の方面に於ける改革の意見を陳べたるものにして、其彼は相異なる所は時代に於て彼の我に先つ一世紀なることは是なり。其主とする問題は彼にあつては物價の騰貴なり、耕地減じて牧羊地の増加することゝなれり、貨幣價値の變動なり、社會各階級間の乖離なり、租税の負擔重き事なり。斯くしてモリアによりて啓かれたる社會改革の思潮は滔々として奔流して止まる處を知らず、學者は不知不識の間に實際生活に接近し來り、其苦其樂を重ねる問題として取扱ふに至れり。而して我徳川時代に於けると共通の點は、彼等は皆先づ國內の經濟問題社會問題に全心を傾注したると是れ也。我徳川時代の學者は僅少の除外例の外は何れも唯だ國內の問題のみに没頭して明治の

際にまで及べり。英國の學者も若し我邦の學者に於ける如く眼を國內に注ぐのみならずならば、學問としての經濟學を大成するに及ばざりしこと、我徳川時代の如く又は獨逸の『カメラリスト』の如くなりしならんこと疑を容れざるに似たり。唯だ彼には外國貿易の勃興あり、植民地の獲得あり、茲に我になき學問としての經濟學を生み出すに至れるなり。即ちロツシアーが第三期と成す所是なり。彼は之を Die Gründung des Englischen Kolonialreichs 同上書二  
十二頁 と呼べり。

此時期は未だ世界帝國の初期に屬し、其經濟論は學問としての價値多からず。然れ共後年我學の起る要素は實に此時代に養成せられたり。此時代に屬する學者の重なる者は無論サーウオーターレー (Sir Walter Raleigh) なり、其外にギルバート (Sir Humphrey Gilbert) 'ユカム' (Sir George Peckham) カライル (Christopher Carlyle) 等あり、幸にして Backluyt は此等學者の著作を集大成して English Voyages の書を作り Purchas 更に其業を紹介して Pilgrims なる浩瀚の書を編纂したれば、吾人はロツシアーの教ふる所に追從して一々に之を點檢するを得るなり。



Hacknuyt Voyages, は Everyman's Library 第二百六十四、二百六十五、三百十三、三百十四、三百三十八、三百三十九、三百八十八、三百八十九冊の八巻に收む。但しロツシアアの引用と此版本とは内容收録の順著しく異り居れば、左に其重要なるものゝ所在を掲げてロツシアアを讀む人の參考に供す。

1. Sir Walter Raleigh, The discoverie of the large, rich and beautiful empire of Guiana. Hacknuyt, Voyages Everyman's Library. Vol. 7. P. 272.
2. Sir Humphrey Gilbert, A discourse written to prove a passage by the North-West to Cathua and the East Indies. Chap. X. 同上 Vol. 5. p. 115.
3. Sir George Peckham, A briefe and summary discourse upon the intended voynge to the hithermost parts of America. 同上 Vol. 6. p. 42.

以上の數人何れも學究者流にあらず、多くは冒險的なる實地植民經營者なり、然れども彼等の目に觸るゝところ必ずしも現前の事實に限らず、まさに世界の權を執らんとする英國の爲に慮る所尠しとせずして、後の外國貿易全盛期の前驅を成すものなり。然るに時恰も大哲學者ベーコン出でて、此の將來の大帝國に學問の光を添へたり。ベーコンの經

濟説は之れを他の學問に於ける貢獻に比するときは、極めて貧弱にして其論旨も必ずしも大哲學者を俟つまでもなきもの多し。

ベーコンの經濟説の見る可きは其 *Sermones fideles* 即ち *Essays* として知らるゝもの之れなり、此書は苟くも英語を知るもの之れを知らざるはなし、最良の刊本は言ふ迄もなく Ellis 及 Stedding 兩氏編集七冊物の刊本なり。千八百五十七年倫敦に於て刊行す。詳しくは藝文掲載内田博士『哲學と史學』に紹介ありしと記憶す。ロバートソン節約本あり、倫敦ロートレツヂの印行にかゝる者にして、右 *Essays* 及 *De Augmentis scientiarum* 即ち *Dignity & Advancement of Learning* 第二篇以下(帝國擴張論を載する爲め經濟學史上重要なり)共に之を收めあり。

唯だ其の帝國擴張論 *The doctrine concerning the extension of the Founds of Empire. (De Augmentis scientiarum 第八卷第三章、全集第五卷第七十八頁以下集約本第六百六頁『論説集』第二十九篇)* はラレー等の實地に經營する處と相並んで英國が漸くにして世界大を成さんとする時代を語るものとして最も注意に値す。斯くの如くにして初めて茲に英國の世界商權成立時代來り其代表者として、而して經濟學の上に一新紀元を開くものとして『メルカンチリズム』の學問上の權威として、甚だ重要な一學者出で來れり。是れを



トマス・マン其人とす。

### 第三章 印度貿易と『メルカンチリズム』。

#### 世界商權成立時代の經濟學說

經濟學が英國の學問たる端緒は實にトマス・マンを以て啓けたり。世界商權成立時代の經濟學而して具體特定の意義を有する『メルカンチリズム』も亦彼に創まれりマンの經濟學說は英國世界商權の最有力の機關たる東印度會社の重役たる經歷と、最も密接の關係を有す。東印度會社は一面英國が世界商權を獲得するに最重要の手段たりしと共に他面英國經濟學に其搖籃を供したる者なり。言を極めて之を云へば英國の經濟學は少く共重要なる部分に於て、東印度會社の『コントロール』より産れ出でたりと稱し得可し。

獨逸の學者シュモラー *Schmoller, Umriss und Untersuchungen zur Verfassung = Verwaltung = und Wirtschaftsgeschichte besonders des Preussischen Staates im 17. u. 18. Jahrhundert*

Leipzig 1898, SS. 1-6) 英譯 Ashley's Classics 中に在り

ブヒニア

*Bücher, Entstehung der Volkswirtschaftl. 3. A. 1901 S. 101 ff* 兩氏が『メルカンチリズム』

に關する從來の通解を以て淺薄迂遠なりとして斥け、全く新しき解釋を下して其の真相を發揮し得たりとなすは『メルカンチリズム』其物の解釋論としては必しも首肯し易からずとするも、獨逸歴史派經濟學其物の信仰告白として之を見る時は、却つて甚だ興味あり、所謂問ふに落ちず語るに落つものならずんば非ず。今の獨逸學者が争つてシ、ブ兩氏の所謂新見解に賛同唱和し、其論今や一部の通説たらんとする趣あるは、必竟兩氏の說が今の獨逸學者間に漲りつゝある一の思潮を代表するが爲のみ。兩氏謂らく『メルカンチリズム』とは單に外國貿易に於ける輸出入の權衡并に金銀を過重するの謂に非ず、必竟國民經濟成立を大主眼とする近世國家の經濟政策一切の謂なり。其外國貿易を重視し金銀の蓄積を尙ぶは、國家を經營すること猶商人が射利の業に於けるが如くなる可しと思惟するが爲にして、例へ他國を損するとも自國をだに益せば可也とするもの、必竟商人の心を以て國家の心とす可しと認むれば也と。是れ名は『メルカンチリズム』を解釋すると稱して、實は現時の獨逸の國家としての立場を自ら語るものに非ずして何ぞや。フリードリヒ・ヴヰルヘルムの政策に謳歌するシュモラーは、彼を藉り來りて新獨逸經濟



政策に活きたる教科書を與へんと欲する者なり。今『メルカンチリズム』の學說史的解釋として之を見れば、兩氏の説く所其一半は如何にも克く正鵠に中り、一半は全然牽強附會説たるの謗を免れず。其正鵠に中る一半とは十六十七兩世紀の『メルカンチリズム』の最も成効したる英國の其れが、世界商業國としての國權確立の爲めに主張せられ實行せられたる主義たることは是なり。當時の英國が其對外政策に於て全然商人の心を以て心とし、他國を損するは如何に莫大なるも辭する所にあらず、唯だ英國を利し英國の富を増し、英國の大を成せば以て能事終れりと爲したることは是なり。此點に於てトマス・マンは『メルカンチリズム』の絶好なる代表者にして、彼はシュモラー、ブユヒアー兩氏を得てまさに知己の感を地下に催すものなる可し。名は同じ『メルカンチリズム』なりと雖も、フリードリヒ・ヴヰルヘルムの其れ、ピーター大帝の其れの如きは、様に倚りて胡廬を描く類、英國の外國貿易なく英國の植民地なき普魯西又は露西亞が、英國と同じ意味に於ける『メルカンチリズム』政策を實行したりと考ふるは全然牽強附會の説たるは勿論、コルベールの佛國に於ける政策をも同じく『メルカンチリズム』の名の下に一括し、之をマン

の主張しマンの時代の英國が實行したるものと同一種のものとして看做すが如きは、獨逸學者自ら其好む所に偏するの謗は到底免る可くもあらず。Bieler 前掲書第 一五九頁以下

トマス・マンは千五百七十一年（我元龜二年將軍義昭の時）に生れ千六百四十一年（我寛永十八年將軍家光の時）に死す。其詳傳は Dictionary of national biography に載たる Hardy の文を以て最も信憑す可き者とす。考證の詳密蒐集の該博を以て我經濟學の第一人たるマカロツクは彼の傳を詳にする能はざりき。即ち曰く M. Thomas Mann, of whom we know nothing, except that he was an eminent merchant of London, and a Director of the East India Company. (A Select Collection of Early English Tracts on Commerce &c. London, 1876, p. 1100 V.) と。然れば今日の吾人はハーデーに對して大なる感謝を負ふべし。さてマンの著述は England's Treasury, by foreign trade, or, the Bullance of our foreign trade is the rule of our Treasury. を以て最重要なるものとす。此書編述の時代は明ならず、マカロツクは千六百三十五乃至千六百四十年頃起稿せられたるものなる可しと云ひ (Literature of Political Economy. London 1845. p. 38) アシユレーは千六百三十年頃なる可しと考ふ (Economic Classics: 同上書 Pt. two VI. 千六百二十四年以降の記事なく、最も晚き部分も千六百二十八年迄にせられたる可しと云ふ)。兎に角其初印本はマンの死後千六百六十四年其子 John Mann の刊行せるもの是なり。近頃アシユレー教授が其



Economic Classics に重刻せるものは實に此初印本なりとす。其他の重刷本には千六百六十九年本、九十八年本、千七百年本即ちルイス・ロバートツ *Mappe of Commerce* 收録本、千七百十三年本、五十五年本の五種あり。アダム・スミスは此五十五年版本を所藏し居たること明かなれば、彼は之に據りたるなる可し (*James Bonar, A Catalogue of the Library of Adam Smith, London, 1894 p. 71.*) スミスの文庫に於ては此書がパークレーの名著『クエリスト』と合綴しありと云ふ、又た興味深き偶然と云ふ可し。右の外マカロツクは其 *A select collection of early English Tracts on Commerce from the originals of Mun, Roberts, North, and others, London, 1856* 中右書を收録したり (自百十四頁至二百九頁)。但此書今や却て稀觀本なれば (予は幸に左右田氏の藏本を借覽し得たりと雖も、其他に藏本あることを知らず) 寧ろアシユレー本得易きに若かず。マンの手に成りしこと明なるもの此外に二種あり。一は千八百二十八年東印度會社より下院へ呈出したる請願書にして *The petition and remonstrance of the Governor and company of merchants of London trading to the East-Indies* と題す、千六百四十一年之を重刷したる者ありと云ふ。前掲書第四章乃至第八章は殆ど字句其儘此請願書と同一なりと云ふ。 (*Falgrave's Dictionary of Political Economy Vol. II p. 839.*) 但し予は此の請願書を見たることなければ其の詳細を考ふるに由なし。カンニンガムは其『英國商工發達史』近代の部第一卷二百六十一頁に此請願書を引照し、ケムブリッジ大學圖書館 *Bl. II. 39 (12)* なる番號を添記す。之に

よつて見れば、此印刷物は流布極めて尠きものにして、日本に在る予輩が之を見るの機會は終に到來することあらざる可きか。マンの筆に成る第三の著述は *A discourse of Trade, from England into the East-Indies; answering to diverse Objections which are usually made against the same.* にして千六百二十一年の初刊にかゝると云ふ。確實に知り得るは同年再版にして、マカロツク前掲の卷頭 (自一至四十七頁) に收めたるもの是のみ。添記して *The second impression corrected and mended* と云ふ。 *Purcell's pilgrims 1625* 中に收めたるものは此第二版なる可し。但予は未だ見ず。此の第一版は果して現存するや否や、マカロツクの如き博覽の學者と之を見たることなしと云へり、即ち曰く *We have not met with the 1st edition of this tract; but we have seen it stated, though we cannot vouch for the fact, that it was published in 1629* 前掲 *Literture p. 9.* (パルグレーヴ字書 (第二卷八二八頁) には千六百二十一年の初刊本を記しあり、マカロツク以後或は發見せられたるものあるにや、聊か疑はし。)  
 オンケン は其經濟學史 (*August Oncken, Geschichte der Nationalökonomie, Leipzig 1902, S. 407 f.*) 2  
 Das in der Folgezeit überschütete Buch ist im Grunde nur die weitere Ausführung einer 1621 veröffentlichten  
 Verteidigungsschrift der Ostindischen Compagnie "A discourse of trade from England into the East-Indies"  
 云々と云へり。オンケンはフキジオクラットの研究者としては甚だ信頼す可き學者なれども、其他の學說史の部分殊に英國學說史に就ては屢々不詮索なる記述を爲すことは、予之



を數多の場合に就て確めたりと雖も、其不詮索も此の一條に至ては殊に甚しと云ふ可し。『見て來た様なる嘘』と云ふことあるが、オンケンのは『讀だ様なる嘘』なり。第一彼は東印度會社の請願書と右書とを全然混同せり、第二に彼は右書も請願書も嘗て讀みたることなきなり。若し讀みたらば此の如き全然根據なき誤謬に陥らざる可き筈なり。何となれば『ヂスコース』云々の書は通篇全然別事を論じ、『フォーレントレード』の書と似たる所毫もなきなり。然るを口廣くも東印度會社の辯護文たる『ヂスコース』の布演に過ぎず等と云ふ。布演の部分は唯一部分にして而して其布演の底本は、千六百二十一年の『ヂスコース』にあらず千六百二十八年の請願書なるなり。其不詮索驚く可し。オンケンにして既に然り他の受賣學者をや。

コンラッド字典(六卷・八五四頁)は *England's Treasure* の初刊本を千六百四十一年とせり、是れ全然誤謬なり。筆者は *Edition and Remonstrance etc.* の再版を此書と混同せるなり。請願初刊千六百二十八年再刊千六百四十一年。然れども兩書は全くの別書にして、前者の初刊は千六百六十四年本なること疑を容れず。凡そ此くの如き不精密誤傳は必竟一々其書を見ず、耳食孫引によりて文を草するより起る、獨逸經濟學の大寶典必ずしも一々信ず可からざることに實に此くの如きあり。

マンの學說の主要部を爲すものは、言ふまでもなく外國貿易權衡論と金銀輸出入是非論

となり。然れども單に考證の爲にする考證、學說史の爲にする學說史の研究者に取りて最も重要な這箇の問題は、英國の學問としての經濟學の成立を概觀するに方りては第二位に在り。マンが終生の著作する所其最大最高の貢獻は、サトウウォーターレー以下の冒険家によりて實際上に經營せられ、フランシス・ベーコンによりて學問的に主張せられたる英國々權の伸張を外國貿易てふ名は簡單にして、實に極めて複雑なる對外的發動によりて可能ならしめ、之に若干の理論的基礎を與へたる一事にあるなり。而してマンに於て最も強き點は其理論の透徹が机上の思索に胚胎せずして、東印度會社の重役たる實地家の經驗より來るものなること是なり。アダム・スミスがマンの書を評し *The title of Mun's book, England's Treasure in foreign trade, became a fundamental maxim in the political economy, not of England only, but of all other commercial countries.* *Wealth of Nations, Book IV, Ch. I, Canning's edition, p. 401* と云ひ、ジョーンスが彼の書を *Gospel of finance and commercial policy.* *Ashley's Classics: Introduction VII.* と評せしもの決して溢美にあらず。彼が東印度會社辯護の爲めに建てたる議論は、反對論者を禦ぐに於て有力なると共に、我が經濟學に其第一期に於ける中心問題を與へたり。乃



ち東印度會社を極力非難し其極憎を憎んで袈裟に及び、東印度會社が代表する株式會社  
讀經濟學研究 なる者の一切に對し痛激なる攻撃を加へたるアダム・スミス Wealth of Nations  
五〇三頁以下 Ed. Vol. II. は、又た其商業政策論に於て當の論敵としてマンを拉し來れり。スミス曰く  
P. 232 f.

From one fruitless cure it was turned away to another: care much more intricate, much more embarrassing,  
and just equally fruitless.....The inland or home trade, the most important of all, the trade in which an  
equal capital affords the greatest revenue, and creates the greatest employment to the people of the country,  
was considered as subsidia-ry only to foreign trade.....It does not seem necessary, however, that the attention  
of Government should be more turned towards the one than towards the other object. 同上書第四〇一頁

外國貿易權衡論の骨子は金銀輸出入に在り、金銀輸出入論の眞諦は東印度貿易に在り、東  
印度貿易の最重の意義は英國商權の伸張に在り、而してまた逆まに英國商權伸張の意義  
は、結局に於て外國貿易權衡論に在るなり。此の連絡を切斷し箇々の議論を捉らへ來り  
て其の理論的功過を吟味するは、人體を解剖して人生觀を立てんと欲するが如き没分曉  
漢たりとの謗を免れず。マンは其著の結局に於て此意を最も明瞭に告白せり。曰く。

國を富ますに就いて、又外國人との貿易によりて國の財富を増加するに就て、以上縷述した  
る所の總括は是れなり。我が外國貿易に於て確實疑ふ可からざる原則は、我が商品を輸出  
する所に於て其國より我邦へ齎らす所の貨物の價值が超過するときは、其國に於ては貨幣  
は爲替關係にて價低かる可く、其反對なる所にては、我が貨幣は價高かる可きこと是なり。  
商人の爲替相場が高くとも、低くとも、外國の君主が其通貨の價值を高むるとも低くすると  
も、(中略)此等一作用は、本書に於て論述したる貿易進行の通理に於て變更を惹起すことな  
し。外國貿易が價值に於て權衡以上にあるか以下にあるかによりてのみ、國の富は或は持  
來られ或は持去らる可きのみ、此は凡ての抵抗を超越して必然的に起る大勢なり。其他の  
事柄は一時如何に一國に貨幣を持來すとも結局其實なく又有害なり。此等は恰も激浪の  
如く、一時押寄せ來りて水面を高むるも其去るの後は却て水を乾かし終るに過ぎざるもの  
なり(前掲書一一八・九頁)

彼が斯くのごとく外國貿易の利益を高調するは、誠に克く當時の英國の狀態に合致する  
ものにして、此の世界商權が既に確定の事實となれる十八世紀末の英國に就て立論する  
スミスが、外國貿易よりは内國商業の方利多しとて、マンの議論に正面より反對すると同  
じく、學説は必竟時勢を離れて起るものにあらざること有力に證明するものならずん



ばあらず。然り而してマンの言として普く知らるゝ to sell more to strangers yearly than we consume of theirs in value 同上書 Ashley's Classics, p. 7. と云ふと外國貿易に於て balance を最重要と視るとの二事は最も適切に當時の英國の地位と國是とを道破したるもの也。之を純理の主張と看做して區々の學究的論評を加ふるが如きは迂愚の至りなり。當時の歐洲に於て英國が商權を獲得せんには、獨り貿易の上のみならず政治上の勢力に於て favourable balance を占むること第一義たり、賣るを多くし買ふを少くするは單に商品の上のみあるに非ず。近時に於て新『メルカンチリズム』と稱するものゝ如き消極的の主張は、『メルカンチリズム』の實體と全然沒交渉なり。

マンによりて開かれたる商權擴張論は、更らに和蘭模倣論を喚起せずして已む能はず。何となれば、當時世界商業の上に覇を唱ふるものは和蘭にして、英國が其商權を伸張せんと欲する以上、必ず其最大の敵として和蘭に對抗するを辭する能はざればなり。和蘭の盛大を取りて之を英國に移植せんとするには、先づ和蘭の盛大を致したる所以を究め、之を英國のものとするに勉めざる可らざりしなり。乃ちロッシアが Nachahmung der

niederländischen Handelsblüthe

前掲書 第五七頁

と名くる時代起れり。英國は先づ和蘭と角逐して之に勝ち、次に佛國と争ひて終に世界第一國の月桂冠を贏ち得たり。アダム・スミスは此の後の時代に出でて興亡戰に精神上の中心點を與へたり。而して和蘭との角逐時代に於ては、前にチアイルド、カルペパーあり後にロツク及ダヴナン在り。マンの事業の終る處は即ちチアイルドの事業の始まる所にして、後者は前者と同じく東印度會社の重役たり、其最有力の辯護者たるなり。

トマス・カルペパーの傳は詳ならず、ロツクマン曰く Sein Leben ist so wenig bekannt, dass selbst sein grosser Verehrer, Sir J. Ch Id. nur sagt, er scheine ein Laudelsmann gewesen zu sein. 同上書 S. 57.) と。バルグレー、ウザ字典によれば、彼は千五百七十八年に生れ千六百六十二年死せりと云ふ。但し彼が經歷に就ては此の書亦一事をも載せず。彼の著述に二種あり。一は A Tract against usury, presented to the High Court of Parliament. Printed in the year 1621. 二は千六百四十年出版の同名の書是れなり、此兩書は極めて稀有の本にして、予の藏するものは其第一のみにして、チアイルドの Briefe observations concerning trade and interest of money, 1668. に附録として重刷せるもの是なり、添記して and now reprinted for Elizabeth Culvert at the Brick-spacer.



Engle in Barbican, and Henry Mortlock at the White-Heart in Westminster-Hall. 1668. と云ふ。其千六百四十年印行の續篇に至りては、恐らく世間流布の本殆んど之れなかる可し。バルグレイヴ字典には British Museum 1093 b. 98 の番號を添記す。猶同書によれば、兩書とも千六百八十八年著者の子トマス・カルペパーの印行せるものありと云ふ。

ジョサイア・チャイルドは千六百三十年(我寛永七年)に生れ千六百九十九年(我元祿十二年)に死す。チャイルドの著作中最も普く知らるゝものは A new discourse of Trade にして、予の藏するは千六百九十八年刊行の本なり(版數を明記せず、予は之を第四版と考ふ)。此書初は Briefe observations concerning trade and interest of money と題し千六百六十八年に出版せらる。其の Discourse of Trade と改題したるは何れの印本なりや、予は之を見ざるが故に知る能はずと雖も、マカロツクは左の如く云へり。

The first edition of this work was published in a small 4to tract in 1668. The second edition, which was very much enlarged, appeared in 1690. (Literature, p. 42.)

察するに此千六百九十年版に於て改題したるものにあらざるか。少くとも千六百九十四年刊行のものに A new discourse of trade, wherein is recommended several weighty points relating to companies of Merchants, the Act of Navigation, Naturalization of Strangers, and our Woollen Manufactures, the Balance of Trade, and the Nature of Plantations, &c. sm. 8vo. The second edition なるものあるこ

と丈けは確なり(此書商大圖書館に在り S 28 I.)。其特に第二版と明記しあるを注意す可し。マカロツクの云ふ所、千六百九十年版なる者果してありやなしや、マカロツクは千七百五十一年本を其目錄に掲げたれば、此九十年版なるもの自ら見たるものなりや聊か疑はし。而して彼は此千七百五十一年版に第五版と註記せり。然れば版本の種類にして重要なものは(此外に版本あること勿論なれども、其は重要な關係なしと信ず、近頃武藤長藏氏は或版本を得たりとて屢々煩雜なる考證を公けにすれども、學術上何等の新見を加ふるものなし)凡そ次の如くなる可きか。第一版改題以前のもの一六六八年刊(私藏本)第二版(改題の第一版)一六九〇年刊(見たることなし)第三版(改題の第二版)一六九四年刊(商大藏本第二版にあり)第四版(改題の第三版)一六九八年刊(予が藏本是也)第五版(改題の第四版)一七五一年刊(慶應圖書館本)第六版(改題の五版)左右田博士藏本(年號なし)。ウォルフオードの考證左の如し。

Walsford, Insurance Cyclopedic Vol. I, p. 502. Child, Banker & P, E, pub. in 1668 a Discourse concerni trade. The tract was written in 1665, and when publ. in 1668 did not bear the author's name, but only his initials "J. C." He advocated arguments for erecting.....Court of Merchants for determining controversies relating to maritime affairs. About the same date he appears to have issued another tract, Trade and Interest of money considered. These were probably blended into one in the later eds. of his Discourse about Trade.



pub. 1660, 1670, & 1673. In an ed. we have, dated 1690, are the words on the title-page, "never before printed"; and it contains, by way of appendix *A Small treatise against Usury*, written by Sir Thomas Calpoper the elder, but not so stated there. His (Child) works were long held in high esteem, and even now retain a great reputation—Hodge, 1860. (Mari In.) (Usury).

例のオンケンハ此書に就ても亦甚しき誤謬を取てせり即ち曰く Josiah Child behandelt in den beiden Schriften "A new discourse of trade" (1668) und "A treatise concerning the East India Trade" (1681) (Geschichte der Nationalökonomie, S. 209. と此僅々數語の内オンケンハ幾多の誤を公言するものなり。一著者の名は Josiah にして Josiah にあらざ。二 New discourse 云々の書に千六百六十八年刊本はなし、此年刊行のものは Briefe observations etc. なり。三 A treatise 云々は全くの別書にして、而もチャイルドの著書なりと斷言する能はず匿名愛國者 (Philopatris) とあるなり。

考證周到なるロツシアーも此の點に於て誤に陥り Briefe observations が改題して A new discourse of trade となりたるを知らず、兩書を全くの別本と考へたり。即ち曰く (Child) hat die Resultate derselben in zwei Schriften niedergelegt: Briefe observations etc. 1668: A new discourse of trade 1690 (5. ed. Glasgow 1751) と是れ明かに事實に相違せり、但し彼は兩書とも之を見たることなく後者の(千七百五十四年刊の)佛譯本を見たるのみと正直に告白すれば(同上書第五

九頁) 深く咎む可きなし。予は兩書とも自ら之を藏し、又異版本は慶應圖書館、商大圖書館にも在りて之を比較し得ることを感謝するものなり。コンラッド字典には稍々正しく左の如く記す。

Child ist Verfasser folgender Schriften: Brief observations &c. London 1668: dasselbe 2. Aufl. unter dem Titel: A new discourse of trade. London 1691: dasselbe, 3. Aufl. London 1693: dasselbe, 5. A. Glasgow 1751.

と而して第四版を缺く理由を示さず、又千六百九十年刊本のことを云はずして千六百九十八年版(第四版)を第三版と爲せり。是れ恐らく誤なること前段によりて察知し得可し。さて右私藏本千六百九十八年刊本の内容次の如し。一序文四十三頁 二 Briefe observations 其儘の收録三十一頁 三貿易及金利論(内 "Interest of money mistaken" なる書の再版を第一章とす)百七十三頁 四高利反對論二十二頁即ちカルペパーの著)。されば 二と 四は千六百六十八年印本と全く同じく 一、三 丈け後に追加し而して書名を別に命じたるものなり。ロツシアーは別に Confutation of a treatise intituled "A justification of the directors of the Netherland's East India Company" 1668 なる書チャイルドに在りとす、予は此書を見ず。又た此書を考ふ可き便宜を有せず。バルグレイヴ、コンラッド兩字典とも此書の目を載せず。終に彼が著書なりとして傳へらるゝものに左の一書あり A Treatise wherein is demonstrated



1. That the East India Trade is the most national of all foreign trades. 2. That the clamors, aspersions, and objections made against the present East India Company, are sinister, selfish, or groundless. 3. That since the discovery of the East-Indies, the Dominion of the Sea depends much upon the want or increase of that Trade, and consequently the security of the liberty, property, and protestant religion of this Kingdom. 4. That the Trade of the East Indies cannot be carried on to national advantage, in any other way than by a general joint-stock. 5. That the East-India Trade is more profitable and necessary to the Kingdom of England, than to any other Kingdom or nation in Europe. By *Edwards*. London 1681. オ  
ンケンが *A Treatise concerning the East India Trade 1681* と誤記するもの即ち此書なり。

カルペパー及チアイルド兩人の和蘭模倣論の中心問題は金利論なり、後のロツクの問題とせる者も亦是なり。カルペパー、チアイルド共に謂らく、和蘭の商業の盛大は其金利の低きと最大の原因なりと。此議論は當時直ちに反對論者を喚起せり、即ち匿名の一學者はチアイルドの *Briefe observations* 出づるや即時 *Interest of Money mistaken or a treatise proving that the abatement of Interest is the Effect and not the Cause of the riches of a nation, &c.* 1693. なる書を公にして其論を駁撃し、和蘭の金利低きは貿易盛大の原因に非ず結果なり

りと主張せり。チアイルドは其 *A new discourse* に於て此書に答へて、金利低きは貿易繁榮の原因なる所以を細説せり。此論戰たる今日の學理の立場より見れば甚だ幼稚にして殆ど一顧の價值なきものなり。然れども其眞の意義は別に存せり。何ぞや、チアイルドが（カルペパーの志を紹きて）殆んど一切の事に於て和蘭を羨望し、和蘭の事物は皆之を善とし而して英國人をして之に倣はしめんと欲せし事是なり。ロツシアが和蘭模倣時代と名けしは誠に克く其實を表はすものなり。而して又他方にはマンによりて開始せられたる外國貿易尊重論は、和蘭なる具體的模範の與へらるゝによりて一層精密となり、金利高低論の討究は更に經濟學に一の新しき中心問題を與ふること、なれり。當時の英國の和蘭に於けるは實に今日の獨逸の英國に於けるに酷似す。英國が獨逸の軍國主義官僚政治なるを以つて獨逸排斥の警語とし、自國が獨逸に凌駕せらるゝは即ち世界の文明の退歩すると同意義なるかの如く高言して、世界の同情を自國に集めんとする陋態は、當時の和蘭が亦英國に對して取りし所の態度にして、而して又た今日の獨逸が英國を羨望しつゝ、其權力を自國に奪ひ來たらんとするは、恰も當時の英國が和蘭に對す



るに髣髴たり。カルペパーとチアイルドとは共に此くの如き時勢に促がされて起りしものに外ならざるなり。

#### 第四章 商國主義の確立。マンとチアイルド

英國をして世界商權の覇者たらしめんと欲するマン及チアイルドは亦た内に在りては國を擧げて商人たらしめ、社會の中堅を商人に置く可きことを力説したるものなり。言を換へて云へば英國が Shopkeepers' nation たるの實は、此時以來學說上に打建てらる可く始めたるものなり。即ちマンは其名著『外國貿易による英國の寶』を先づ商人論を以て開卷するなり。彼は其書の結構を叙して云へり。

First, to shew the general means whereby a kingdom may be enriched; and then proceed to the particular courses by which Princes are accustomed to be supplied with Treasure. But first of all I will say

something of the Merchant, because he must be a Principal Agent in this great business. England's Treasure by foreign trade. Askey's Reprint, p. 1.

と。即ち國を富ます主要なる活動者は商人なり、其商人の何ものたるかを知ることがは彼の富國論一切の前提たるなり。故に第一章は題して「完全なる外國貿易商人に要する資格』と云ふ。彼曰く

The love and service of our Country consisted not so much in the knowledge of those duties which are to be performed by others, as in the skilful practice of that which is done by ourselves; and therefore (my Son) it is now fit that I say something of the Merchant, which I hope in due time shall be thy vocation: Yet herein are my thoughts free from all Ambition, although I rank thee in a place of so high estimation: for the Merchant is worthily called the Steward of the Kingdoms Stock, by way of commerce with other Nations, a work of no less Reputation than Trust, which ought to be performed with great skill and conscience, that so the private gain may ever accompany the publique good, And because the nobleness of this Profession may the better stir up thy desires and endeavours to obtain those abilities which may effect it worthily, I will briefly set down the excellent qualities which are required in a perfect Merchant.



斯くてマンは完全なる商人に必要な資格十二箇條を擧ぐ。一 筆跡巧みに計算に明らかに簿記に熟すること。二 度量衡貨幣の制度に通曉すること。三 輸出入品の課税事情に通ずること。四 各國の物産を知ること。五 爲替相場に明なること。六 輸出入禁止の事情を知ること。七 運賃事情を知ること。八 造船の事を知ること。九 商品の品質等を詳にすること。十 航海術を知ること。十一 外國の言語風俗習慣に通ずること。十二 學者たるを要せざるも、少くとも拉丁語の素養を缺く可からざることと是れなり。彼は語を續けて曰く

Thus have I briefly shewed thee a pattern for thy diligence, the Merchant in his qualities; which in truth are such and so many, that I find no other profession that leadeth into more worldly knowledge. And it cannot be denied but that their s' efficiency doth appear likewise in the excellent government of State at Venice, Luca, Genoa, Florence, the low Countrys, and divers other places of Christendom. And in those States also where they are least esteemed, yet is their skill and knowledge often used by those who sit in the highest places of Authority. It is therefore an not beyond rashness in some, who do disable their Counsel and judgment, (even in books printed) making them uncapable of those ways and means which do either enrich

or impoverish a Commonwealth, when in truth this is only effected by the mystery of their trade, as I shall plainly shew in that which followeth. It is time indeed that many merchant here in England find less encouragement given to their profession than in other Countrys, and seeing themselves not so well esteemed as their Noble Vocation requirth, and according to the great consequence of the same, does not the fore labour to attain unto the excellencies of their profession. p. 5-6.

其の商人尊重論の如何に周到なるかを見よ。マンは營利階級の爲めに實に萬丈の氣を吐くものにして、英國に於ける經濟學説は社會改良論者の手より離れて、今や全く第三階級代辯者の手に歸したりと云ふ可きなり。此の意味に於てマンは英國經濟學の一大權威たり。第三階級の學問としての其の建設に與つて最大の功勳者たりと云ふ可し。獨逸の新歴史派が『メルカンチリズム』を以て國を擧げて一の大なる商館とし、國民を綜べて一の商人階級に盡さしめんと欲するものなりと云へるは、我トマス・マンに就ては最も當を得たる評語と云はざる可からず。マンは其書を結ぶに實に次の語を以てせり。

Behold then the true form and worth of forraign trade, which is, The great Revenue of the King, The honour of the Kingdom, The noble profession of the Merchant, The School of our Arts, the supply of our Wants, the employ-



*ment of our poor, the improvement of our Lands, The Nurcery of our mariner, the walls of the Kingdoms, the means of our Treasure, the Sineus of our wars, the terror of our Enemies. For all which great and weighty reasons, do so many well governed States highly countenance the profession and carefully cherish the action not only with Policy to encrease, it, but also with power to protect it from all forraign injuries: because they know it is a Principal in Reason of State to maintain and defend that which doth support them in their estate.*  
P. 119.

商人と其の階級とを維持すべき所以を主張し辯護するは國を強くし富ます所以なりと云ふに至りては、明かに商國主義の頂點を示すものならずや。國中第一流の人材を網羅し國の運命を其双肩に荷つて立ち、社會の木鐸たり國民思想の先達者たる商人階級最始最有力の鼓吹者としてのトマス・マンの面目以て窺知す可し。オンケン前掲書第 二〇六頁が英國の『メルカンチリズム』に三派ありとして 一商人派 二哲學派 三政治算術派を分ち、マンを以て其商人派に屬せしめたるは此の意味に於ては傾聽に値す。マン一度出で、*Kaufmännische Richtung der Nationalökonomie* 連綿として盡きず常に學說發展の一方の流潮を代表するに至れり。

チアイルドも亦同一の意味に於ける商人派經濟論の力説者にして、其和蘭模倣論の着眼はマンの所論と同工異曲たり。彼は其『貿易論』の劈頭に論ずらく

*The prodigious increase of the Netherlands in their Domestic and Foreign Trade, Riches, and multitude of Shipping, is the envy of the present, and may be the wonder of all future Generations; And yet the means whereby they have thus advanced themselves, are sufficiently obvious, and in a great measure imitable by most other nations, but more easily by us of this Kingdom of England; which I shall endeavour to demonstrate in the following discourse.*

Some of the said means by which they have advanced their Trade, and thereby improved their Estates, are the following.

*First, they have in their greater Councils of State and War, Trading Merchants, that have lived abroad in most parts of the world; who have not only the Theoretical knowledge, but the Practical Experience of Trade by whom Laws and Orders are contrived, and Pences with foreign Princes projected to the great Advantage of their Trade. A new discourse of trade, etc. 1698. p. 1—2.*

和蘭の富み且つ強き所以を其の商人尊重の一事に歸し、國政の料理に商人をして干與せしむるを以て、英國のまさに取りつて龜鑑とす可き所なるを主張する彼は、更に以下十四箇



條の細目に涉りて和蘭の模倣す可き點を詳論す。其商人本位論の大膽にして露骨なるチアイルド其人の經驗と知識の伴ふにあらずんば、單に一場の空論と目せらる可き程なり。チアイルドに後る、約六十年、ダニエル・デフォーは『完全なる英國商人』*The complete English Tradesman* なる書を作り理想的商人を描出して時人を教へたり。其趣向の依つて出づる所トマス・マン及ジョサイア・チアイルドの以上の論に存するや疑を容れず。理想的商人論は聽て商人理想論なり、國を以て商人を理想とせしめ、國民各自をして商人を理想とせしめずんば已まず。『メルカンチリズム』の研究者單に金銀尊重論、貿易權衡論あるを知らるに止り、彼等立論の根柢の這箇商國主義 恰も今日の『軍國主義』と云ふものと相對する所の にあるを看破するなくんば到底皮相の謗を免る可からざるなり。英國の *Shopkeepers nation* たる決して一朝一夕にして成れるにあらず。和蘭の繁榮を羨み佛國の進歩を嫉視しつゝありたる十七世紀に於て既に其根柢は置かれたり。マンとチアイルドとは前後相呼應して此の *Shopkeepers nation* に其階級的理論、其特殊の學說を與へんとしつゝありたるものならずんばあらず。而して吾人の特に忘る可からざる一事はマンもチアイルドも共に學究者

流にあらず、身自ら商人として殊に東印度會社の重役として外國貿易の實務に執掌しつゝ、他方に筆を執りて國人を教へつゝありたるものなることは是れなり。彼等は始めより一の特殊利益の代表者として起れり。嚴密なる學理研究の如きは元より之を彼等に期す可きにあらず。然れども商人の階級より出でて商人の爲めに氣を吐きたる彼等は、其論を立つるに於て常に切實なる現實性を帯びざる能はず、其論を聽くものを動かすの力又た甚だ大なるものあり。而して英國の商人階級は此二人者を得て學問の範圍に於ても商人の猶爲すに足るあるを立證し得たり。彼等が着々として學者の壘を摩し、其特殊的利益論を立て、科學的一般論を排するの勢茲に於て成れり。此より後英國經濟學說發達の道程は實に此勢を助長し、マン及チアイルドの一度始めたる事業を間斷なく繼續し行きたるものと云ふも大過なきなり。トマス・マンに就ては近來高橋(誠一郎)教授の『マ  
リ、考證精確論述該博我邦稀に見る雄篇なり、讀者須く往見ありたし。』『三田學會雜誌』第九卷第九至第十二號連載。



## 第五章 商軍國主義と和蘭凌駕論

一度マンとチアイルドとによりて開かれたる商國本位・商人本位主義の思想は、十七十八兩世紀に涉りて幾十の祖述者を得たり。即ち Lewes Roberts の Merchants mappe of commerce (1638); Treasure of Trafficke (1641) の如き Maddison の Englands looking in and out (1610) の如き Thomas Violet の Advancement of merchandise (1651) の如き Potter の Tradesman's Jewel (1659) の如き Francis Cradoche の Wealth discovered (1661) の如き Fortrey の England's Interest and Improvement (1663) の如き Temple の Observations upon the United Provinces of the Netherlands (1672) Essay upon the advancement of trade in Ireland (1673) の如き Philangus と稱する一著者 の Britannia languens (1680) の如き Yarrangton の England's Improvement by sea and land, to outdo the Dutch without fighting (1677-81) の如き

コーク (Coke) の諸篇の如きエヴェリン (Evelyn) の Navigation and Commerce (1674) の如き皆然り。此等諸論者は其時代を支配したる影響に至りてはマン及チアイルドと比肩し得可きものにあらず、所論の價值亦甚しく差等あり。然りと雖も其商國主義を鼓吹し英國をして蘭佛に凌駕せしむ可き所以を力説したるに至つては皆趣を同うす。今暫く其重なるものにして予輩が寓目し得たるもの若干を紹介せんとす。其多くは稀觀書に書館の收藏にかゝる。

フオルトレー謂らく

In trade there may be likewise said to be two kinds, the one trade at home, one with another: the other our trade, or traffic abroad with strangers. And in each of these particulars, by the bounty of nature and divine providence, this nation doth not only equal any neighbour country, but far excels in all the most profitable advantages.

France we know to be a nation, rich, populous and plentiful; and this only by the measure of its own store, raised both by the fruit of the soil, and industry of the people.....Holland hath not much of its own store, especially not answerable to supply the wants of that nation; and yet by their industrious diligence in trade,



they are not onely furnished with whatsoever the world affords and they want, but by the profit of their trade they excel in plenty and riches, all their neighbour nations.

Two things therefore appear to be chiefly necessary, to make a nation great, and powerful; which is to be rich, and populous; and this nation enjoying together all those advantages, with part whereof onely, others grow great and flourishing; and with all, a Prince, who above all things delights and glories in his people's happiness: this nation can expect no less than to become the most great, and flourishing of all others. Englands Interest and Improvement, consisting in the increase of the store and the trade, of this kingdom. 1663. *Hollander's Reprint.* p. 11-12.

而して個人の利益と公共の利益との衝突を論じて語を續けて云ふ。

But private advantages are often impediments of publick profit; for in what any single person shall be a looser, there, endeavours will be made to hinder the publick gain, from whence proceeds the ill success that commonly attends the endeavours for publick good; for commonly it is but coldly prosecuted, because the benefit may possibly be something remote from that that promote it; but the mischief known and certain to them that oppose it, and interest more than reason commonly sways most men's affections.

故に彼は公共の利益は之を一人の手に委ねて、個人の利益の爲めに妨げらるゝことなか

らしむ可しと主張す。然れども彼は國と國との間に就ては一國の利は他國の害なりとの見解を全く脱せずして、マンが『他國より買ふよりも他國に賣ることを多くする』を以つて商國の大方針とす可しとの主張に裏書するものなり。即ちマカロック *Literature.* 及びアシユレー *Quarterly Journal of Economic Sciences.* July 1897. p. 340. が指摘したる如く、フォルトレーの感化の最も大なるは『英國は佛國との貿易に於て少くとも毎年六十萬磅の損を蒙むるものなり』 *It appears*

that our trade with France, is at least sixteen hundred thousand pounds a year, clear lost to this kingdom, *Hollander's Reprint.* p. 26. との偏『メルカニリズム』的主張是なり。抑も一人の利は他人の損たり、一國の利は他國の損たりとの説を最も有力に

唱道したるものは、佛國の哲學者モンテーヌなり、彼は其千五百八十年に起稿せる論集の第一卷第二十一章 *モンテーヌは第二十章なりと云ふ是れ明かに誤謬に題して* *Le profit de l'un est dommage de l'autre* (Cotton 英譯 *The Essays of Michel de Montaigne, translated by Cotton.* Bohns popular Library. 1613. vol. i. p. 97.

That the profit of one man is the damage of another) と云ふ。今其の全文をあぐれば左の如し。

*Demands, Athenien, condamna un homme de sa ville qui faisoit mestier de vendre les choses necessaires*



ant enterrements, sous tiere de ce qu'il en demandoit tr p de prouff, et que ce prouff veluy pouvoit venir sans la mort de beucoup de gens. Ce injement s'impe estre mal prins; d'autant qu'il ne se fait et au gain profit qu'au damage d'autrui, et qu'à ce compte il faudroit condamner toute sorte de gagne. Le marchand ne fait bien ses affaires qu'à la desbauche de la jeunesse; le laboureur, à la cherté des bleds; l'architecte, à la ruine des maisons; les officiers de la justice, aux proces et querelles des hommes; l'honneur mesme et pratique des ministres de la religion se tire de nostre mort et de nos vices; nul medecin ne prend plaisir à la santé de ses amis mesmes, dit l'ancien comique greco; ny soldat à la paix de sa ville; ainsi du reste. Et qui pis est, que chacun se garde au dedans, il trovera que nos soulais interieurs, pour la pluspart, naissent et se nourrissent aux despens d'autrui. Ce que considerant, il ni est venu en fantasia, o mme nature ne se desment point en cela de sa generale police; car les physicians tiennent que la naissance, l'ourissement et argumentation des chusque chose, est l'interion et corruption d'une autre. *Essais ed Michel de Montaigne avec des notes de tous les commentateurs. Edition revue sur les textes originaux. Paris 1882. T. 1. p. 86-6.*

是れ實に最も大膽に最も露骨に商人利己主義を道破したるものにして『メルカンチリズム』思想の源泉は實に此デカルト前のデカルトと呼ばれる十六世紀中葉の佛國哲學者に在るなり。『メルカンチリズム』の商國本位論は此思想を最も巧みに國と國との關

係に就て言ひ表はしたるものに外ならず。フォルトレーが個人の利益と公共の利益との衝突を詳論し、亦た佛國貿易の捨つ可きを主張するは實に其間接の産物なり。千七百十四年マンデヴキユ(和蘭生にして英國に移住せる人なり)は『蜜蜂物語』を公けにして、千七百五年公けにせる *The Grumbling Hive, or, Knaves turned honest* なる諷詩の趣意を布演して *private vices, publick benefits* の論を唱へ時人の耳目を聳動せり。マカロック (*Literature, p. 352*) は此諷詩の公けにせられたる時を 1714 年なりとし『蜜蜂物語』の初刊年を 1723 年なりとす。是れ明に誤なることは予が現に載する千七百十四年版本に諷詩を八年前公けにしたりと明記するによりて知る。蓋し彼はモンテレーヌに私淑し、窃かに英國に於けるモンテレーヌを以て擬するものなり。即ち曰く、

*'Twas said of Montaigne, that he was pretty well vers'd in the Defects of mankind, but unacquainted with the excellencies of human Nature; If I fare no worse, I shall think myself well used. (Fable of the Bees, or private vices, publick benefits London 1714. Preface. A 3.)*

モンテレーヌは人間の缺點は熟知し居れども其の美點を知らずと誇られたり、人若し予に下すに此以上の非難を以てするなくんば予は幸と思はんのみ

彼又曰く



When I assert, that Vices are inseparable from great and potent Societies, and that it is impossible their Wealth and Grandeur should subsist without, I do not say that the particular Members of them who are guilty of any should not be continually reprov'd, or not be punished for them for when they grow into Crimes. 同上序第九頁

彼は譽を設けて曰く、單に自己の便利と愉快とを標準として論ずれば、倫敦の如き汚濁なる市街を歩むよりも田舎の花園を逍遙するの勝れること勿論なり。然れども倫敦市街の汚濁は其繁榮其大なる商業交通に伴ふて起る不得止結果のみ。これと同じく、

If layng aside all worldly Greatness and Vain-Glory, I should be ask'd where I thought it was most probable that Men might enjoy true Happiness, I would prefer a small peaceable Society, in which men, neither envy'd nor esteem'd by Neighbour's, should be contented to lye upon the Natural Product of the Spot they inhabit, to a vast Multitude abounding in Wealth and Power, that should always be conquering others by their Arms Abroad, and debauching themselves by Foreign Luxury at Home. 同上序第一頁なりと云ふ。彼が諷詩の Moral に曰く

So vice is baneficial found.  
When its by Justice lopt and bann'd;

Nay, where the people would be great,  
As necessary to the State,  
As Hunger is to make 'em eat,  
Bare Virtue can't make Nations live  
In Splendour they, that would revive  
A Golden Age, must be as free  
For Accrus, as for Honesty. 同書第二〇頁

と。是れ豈に Shopkeepers' nation の眞髓を喝破するものにあらずして何ぞや。人はマンデヅキユを斥けて危言人心を紊すものと云ふ。爰ぞ知らん彼の言ふ所は其の實に於て英國が其盛大を致すに於て着々採用したる所の主義に外ならざることを。故に Mandeville のは又た道徳の商國主義を排する學者なり即ち Berkeley 然り。(Alciphron Dial. II) Adam Smith (Theory of moral Sentiments. Pt. 7. § 2) 然り。Lutcheson (Original of our ideas of Beauty and Morals) 亦た然り。フォルトレーが公共の利を個人の利と衝突することあるを説き、常に前者の維持を主眼とす可しと論ずるは、必竟異なる言語を以て同一の消息を洩するものと云はざる可からざるなり。



サー・ウキリアム・テムブルは外交家として著名なる人にして、和蘭に滞在すること久しく、其の國情に通曉するに於て第一人者たり。彼は其豊富なる蘊蓄を傾けて『和蘭觀』なる一書を著せり。ロツシアーが此書を評して *das schönste Bild der holländischen Blüte...* ..... *Gehört ohne Frage zu den Meisterwerken der beschreibenden Particularstatistik* Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre. S. 125. と云へるは決して溢美の言に非ず。テムブルは恰も極盛の傾き始めた時に於ける和蘭の状況を詳述し、之を結ぶに千六百七十二年に於ける其戰敗の原因觀を以てせり。彼は和蘭富有の原因を考へて左の如く云へり。

*Since the ground of Trade cannot be deduced from Heavens, or Native Commodities; it were not amiss to consider, from what other source it may be more naturally and certainly derived. For if we talk of Industry, we are still as much to seek what it is that makes people industrious in one Country and idle in another. I conceive the true original and ground of Trade, to be great multitude of people crowded into small compass of Land, whereby all things necessary to life become dear, and all men who have possessions, are induced to Parsimony; but those who have none, are forced to industry and Labour, or else to want. Trades that are vigorous, fall to labour; Such as are not, supply that defect by some sort of Inventions or Ingenuity. These*

*Customs arise first from Necessity, b. t. increase by Imitation, and grow in time to be habitual in a Country; And wherever they are so, If it lies upon the Sea, they naturally break out into Trade, both because whatever they want of their own that is necessary to so many mens lives, must be supply'd from abroad; and because by the multitude of people, and smallness of Country, Land grows so dear. That the improvement of money that way is inconsiderable, and so turns to Sea, where the greatness of the Profit makes amends for the venture. (Observations upon the United Provinces of the Netherlands. 2nd edition corrected and augmented London. 1673. pp. 211—2)*

而して彼れは和蘭の高位者大官等の生活の極めて平民的にして質素なるを口を極めて賞讃し、彼のジアンド・ウキットの尊貴なる『バンショナー』の身分を以てして儀式の場合の外は常に一人の従者を従へるのみにて徒歩し、其服装其家居其飲食の極めて薄き一平民と毫も異ならざるをあげて、和蘭の強きは其官僚の此く平民と同化するにあるを説くこと詳なり。前掲書第一二五頁 而して曰く

*And whilst no great Riches are seen to enter by Tubique Payments into private Purses, either to raise Faniches, or to seed the prodigal Expenses of vain, extravagant, and Luxurious men; But all publique moneys*



are applied to the Safety, Greatness, or Honour of the State, and the magistrates themselves bear an equal share in all the Burthens they impose. f. 130.

と。如何にテムブルが商國主義の政治に傾倒するか以て想見するに足る。彼は又和蘭國民の國民性を論じて云へり。此條ロツシアーにも引

Holland is a Countrey where the Earth is better than the Air, and Profit more in request than Honour; where there is more Sense than Art; more good Nature than good Humour; And more Wealth than pleasure; where a man would chuse rather to travel, than to live; shall find more things to observe than desire, And more persons to esteem than to love. p. 188.

國をあげて商人となし其の精神を以て國の精神となすことが和蘭を強からしめたるを説くこと實に至れり盡せりと云ふ可し。然れどもテムブルの炯眼なる單に和蘭の長所を見て之に眩惑せらるゝものにあらず。其長所は纏て短所たり其強き所以は又た弱點を包藏することは彼の看過せざる所なり。曰く

But the same Qualities and Disposition do not value a private man and a State, nor make a Conversation agreeable, and a Government greater: Nor is it unlikely that some very great king might make but a very

ordinary private Gentleman, and some very extraordinary Gentleman might be capable of making but a very mean Pri. c. p. 188.

而して彼は其の書の末章 Ohp. VIII. The causes of their Fall に於て千六百七十二年に於ける

in 1672 loc. cit. p. 259. et seq.

和蘭戰敗の原因を列舉し其商國主義の弱點を指摘して餘蘊なし。此末尾の一章は今千

九百十六年にして之を読むときは和蘭に代ふるに英國なる文字を以てするのみにして、最も好く現下英國の國情を語るものと云ふ可し。ロツシアーは今を距る六十五年の昔に於て既に so würde namentlich das letzte Kapitel für die heutigen Engländer ungemein viele

beherzigenswerte Fingerzeige darbieten

前掲書第一二六頁

と道破し置きたり。況んや歐洲大戰の成

績に照合して英國の現情を考ふるものに於てをや。テムブルは和蘭讚美論者の白眉なると共に、和蘭衰微の豫言者として第一人たるの稱を値するものならずんばあらず。其識見の卓越なる或はマン及びチアイルドを凌駕するものありと云ふ可きなり。

『ブリタニア・ランゲンス』とは『疲弊せる英國』の義にして、更らに題して *Or a Discourse of Trade shewing the Grounds and Reasons of the Increase and Decay of Landrents, National*



wealth, and Strength; with Application to the late and present state and condition of England, France, and the United Provinces と云々。其内容は此の命題の示す如く主として英佛蘭三國の比較論にして、英國が其富力に於て佛蘭兩國に劣る著しき所以を詳論し、就中英國に於ける地代暴落の原因及其救済法を考究し、地代引上げは貿易商業の振興に待たざる可からざる所以を主張するもの也。此の書の序文に云く

*My original Design was to examine by what means our English Land Rents, lately fallen, might be universally advanced, which I have principally persued; but have found such a Concatenation and Sympathy between the interest of Land and Trade, and between these, and that of the Government. Preface I*

著者は英國を佛蘭兩國に比較して謂らく

.....We observe that some of our Neighbour Nations, lately our equals, or much our Inferiors, are become so prodigiously Rich and Powerful on a sudden (I mean the French and Dutch).....The Nations and Races of people are the same, and the countries of England, France and Holland, stand where they did, they are not removed an Inch; nor do the English seem to have lost Their understandings; they are as cunning in their private Contracts as ever, and appear nothing inferior to the French and Dutch in most parts of Litera-

*tute. 前掲書 Introduction, p. 2.*

其原因を論ずるもの甚だ多しと雖も、其最も重要なるは彼に於ては商業の盛大にして、英國に於ては其振はざるにありとなし、以下全書をあげて其然る所以を詳論して、商國としての英國の惰眠を食ることを痛撃し、商國主義の爲めに辯ずること至れり盡せり。

ヤラントンの書に至つては商國主義の爲めに氣を吐くこと更らに切なるものありて、其の學説の内容もアダム・スミスを豫想するもの尠しとせず。其書は二部より成り題名は甚だ長くして左の如くなり。

*England's Improvement by Sea and Land; to outdo the Dutch without fighting, to pay debts without moneys, to set at work all the poor of England with the Growth of our own lands, to prevent unnecessary suits in law; with the benefit of a voluntary Register: Directions where vast quantities of Timber are to be had for the building of ships; with the advantage of making the great rivers of England navigable: Rules to prevent fires in London, and other great cities; with Directions how the several companies of Handicraftsmen in London may always have cheap bread and drink. London 1677—Part. II. London. 1681.*

ヤラントンは其著の目的を叙して云ふ



Reader, thou must take notice that all Kingdoms and Commonwealths increase in Strength and Riches, according as they are situated for Trade, and do convenience themselves with just and equal Laws and Customs, whereby they cut do the rest of their neighbours. We see of late years what great Contests and bloody Wars have been betwixt England and Holland, and all obtain the Mistress called Trade. Sometimes the English Merchants complaining how the Dutch out-trade them, and that they are not able to live. And so in process of time they and others under pretence of ascertaining the Merchants Rights blow up a War betwixt England and Holland, which hath seldom been compassed with a Peace but the Merchant goeth by the worst, and the People of England seldom bettered, or the trade advanced. And it being my fortune to be travelling, and at Drayden the Duke of Saxony's Court, when the said News came of the Dutch burning our ships at Chatham, I made it then my business amongst other things I was employed in, to observe as far as I could how and which way the Trade of England might be improved and advanced.....it appeared to me that though we could not beat them with fighting, yet on the other hand it was as clear to me that we might beat them without fighting; that being the best and surest way to subdue our enemies. 前掲書 To the Reader. p. 1-3.

戰爭に於ては到底和蘭に敵す可くもあらざれども、商業によりて戦はずして和蘭に勝つ  
の成算ありとして之を國人に教へんとするヤラントンは、和蘭凌駕論者の雄大なるもの  
と云ふ可く、今日の英國人が Battle に於て獨逸に敵する能はざるも War に於て必ず勝つ  
可しと云ひ 我邦の拜英論者屢々此種の言を祖述して青年を誤りつゝあり。 又は兵戰に於て敗くるも經濟戰に於て勝つ可  
しと云ふ其負惜み論は、十七世紀に於て未だ和蘭の下風に立ち居りし頃より、自尊心強き  
英人の好みし所なること以て想見し得可く、今日より顧みて趣味淺からざるを覺ゆるな  
り。商國思想の胚胎する所其根柢如何に深きか聞く者須らく三省す可きなり。  
彼は海戰に於て和蘭の敵し難きを論じて曰く

To beat the Dutch with Fighting is difficult, by reason of the great Advantages they have by their Sands  
and Holds all along the German shore, from the Mouth of the Texel, and other Holland rivers, unto the Mouth  
or Influx of the Elbe and within the Sands and Holds they lye close and safe as long as they please, and  
we cannot come at them with our Ships; the Reason is, we draw five foot water with our Ships more than the  
Dutch do with theirs; and we must lye beating is Sea, and receive all Storms and Accidents that the Seas  
and our Ships are liable to, while the Dutch are at Anchor within their desirable Sands and Holds, and upon  
their own coasts, and there with ease may take in and be supplied with all manner of Ammunition, Provision,  
and Men, with all other things they stand in want of. And when the wind blows strong at East, we must



bear away, and cannot keep our Station. The same wind that blows our Ships off, blows the Dutch out, and if they have a mind to follow us, they may, and when we are within some of our Bays they may come at us with ease: And as I said before, the reason is, we draw five foot water more with our Ships, than the Dutch do with theirs: They build for their Shores and Harbours, and we build for ours; and we see by experience they made their sea water only defensive, and so will do untill they find themselves strong enough to venture to fight at half Sea. 前掲書第一至二頁

今日英國人が獨逸に對して云ふ處は全く符節を合はず如くなり。打勝ち難きは和蘭にあらず、和蘭の Sands and Holds に非ず、和蘭船の吃水英船より淺きこと五呎なるが爲にあらず、一に全く當時の英人の無爲無能なりしが爲めなり。ヤラントンは問ふに落ちずして語るに落つ。和蘭の天然的恩恵を以てするも一度英人の覺醒し英人の振ふて起つや一敗復た起つ能はざるに到れるに非ずや。キール灣頭に潜伏して防禦線のみを維持する獨逸海軍の打勝ち難きに非ず、十七世紀英人の和蘭に對して無能なりし如く、第二十七世紀の英國海軍の獨逸に對して無爲無能なるのみ。

ヤラントンは英國海岸の防備を詳かに考へ、幾多の圖畫を添へて其方法を教ふるの外

諸般の小問題に涉りて考ふる所あり。而して其議論の歸着點は兵戰に於ては到底必勝を期し難し、唯だ英國の貿易を振興し商戰によりて和蘭を仆し得可きのみと云ふ。曰く

To beat the Dutch with fighting, so as to force them from their beloved mistress and delight, (which is Trade and Riches thereby) hath been the design of most of their Neighbours for this forty years last past, who thought thereby to bring that mistress of Trade to leave that people, and betake herself to a place of better Ports, and healthfuller Air. To which purpose upon the end of war betwixt England and Holland, many advantageous Articles have been agreed upon, and some good Laws made to encourage Trade and the merchants; but I see although we get this mistresses Love, it is but for a short time, she is still endeavouring to be gone, and fear herself in that dull and stagnant Air. And the Reasons wherefore she doth so, and will do so, I will here discover unto you. p. 6.

商業を平和の戰爭なりと稱する陳套にして、而して根本的に謬れる思想は、ヤラントンに於て最も特色ある代辯者を見出したり。而して當時の英國に於て云へば此思想は陳套に非ず、又た必ずしも誤謬に非ず。後のアダム・スミスの世界同胞主義を十七世紀の英國と其時の學者とに期待するは時代錯誤なり。ヤラントンは商軍國主義 姑く此造 の屈 語を許せ



強の代表論者なり。而して英國の世界商權は這箇の商軍國主義の產物に外ならざるを忘る可からず。

エヴェリンの書は題して

*Navigation and Commerce, their Original and Progress; containing a succinct account of Traffick in General; its Benefits and Improvement; of discoveries, Wars and conflicts at Sea, from the original of Navigation to this Day; with special regard to the English Nation their several Voyages and Expeditions, to the Beginning of our late Differences with Holland; in which His Majesties Title to the Dominion of the Sea is asserted, against the Novel and later Pretenders.* London 1674.

と云ふ。此書は極めて不完全なる商業史の類にして識見の勝れたるを見ずと雖も、和蘭商權の由來を説き、英國の之を回收す可き方法を論ずること稍々詳にして、亦以て時勢を反映するものと云ふ可きなり。曰く

*To demonstrate this in a most conspicuous Instance, we need look no further than Holland, of which fertile or enchanted Spot 'tis hard to decide, whether its Wants, or Abundance are really greater, than any other countries under Heaven; since, by the quality, and other circumstances of Situation it affords neither Grain,*

*Wine, Oyle, Timber, Metal, Stone, Wool, Hemp, Pitch, nor almost any other Commodity of use: and yet we find, there is hardly a Nation in the world, which enjoys all these things in greater affluence: and all this, from Commerce alone, and the effects of Industry, to which not only the Neighbouring Part of Europe contribute, but the Indis, and Antipodes: so as the whole world seems but a Farm, scarce another province to them; and indeed it is that alone, which has built, and peopled goodly Cities, where nothing but Rushes grew.* 前掲書第六至七頁

世界を市場とする和蘭を羨望するの狀想見す可きなり。

ヤラントンと時代を同うし、彼によりて稱揚せられたる學者にロージヤ・コークあり。其著は四篇より成る左の如し。予の見る所の書は四篇を合綴して一となす。

(1) *A treatise wherein is demonstrated that the Church and State of England are in equal danger with the Trade of it.* Treatise I. London 1671.

(2) *Reasons of the Increase of the Dutch Trade wherein is demonstrated from what causes the Dutch govern and manage Trade better than the English; whereby they have so far improved their Trade above the English.* Treatise II. London 1671.

(3) *England's Improvements in Two parts* In the former is discoursed, how the Kingdom of England may



be improved in Strength, Employment, Wealth and Trade, by increasing the Value of Lands, the revenues of the Crown and Church, Peace and Amity with foreign nations, without any charge to the subject. In the latter is discoursed how the Navigation of England may be increased and the Sovereignty of the British Seas more secured to the Crown of England. Treatise III. London 1675.

(4) How the Navigation of England may be increased and the Sovereignty of the British Seas more secured to the Crown of England. Treatise IV. London 1675.

コークはロツシマーが評して *das übliche Bild des Merchantsystems verhältnismässig am Besten passt* 前掲書 S. 75 と云ひしが如く極端なる商權論者にして同時に英國の現狀に就て甚しき悲觀を抱くものなり。而して和蘭の盛大を羨望するに於て、以上諸論者と全く同一の思想を披瀝せり。彼は蘭英を比較して云へり。

So as, Reader, thou mayest understand, and that by demonstration, in the former treatise, from what causes, and by what means the English Nation is become so degenerate in Strength, Wealth and Trade. In this thou mayest understand by what means and degrees the Dutch in less than 100 years have attained such prodigious Riches and Strength by Trade: we have little left but the French and Canary Trades (wherein we undo ourselves) and the Trade of our Manufactures and Plantations. And in these two the Dutch may outdo the

English in Foreign Trade, if their charge in requiring them does not exceed their charge otherways. And herein they may clearly outdo the English, if it be true, as is said, That in them English Factors Trade in their own Names. Yet upon the account of Dutch Merchant; whereby it much more comes to pass, which Sir Walter Raleigh long ago observed, that our Sea and Land commodities serve only to enrich and strengthen other Countries against our own. Reasons of the Increase of the Dutch Trade etc. p. 150.

コークはフォルトレーが佛國との貿易を以て英國に不利なる貿易權衡を齎らすものなりとの警告に關聯し、更らに英國の人口が『ベスト』并に米國への移民により著しく減少する危険を指摘し、航海條例及び救貧法の弊害を論じ、之を救ふ方法として外國人の歸化を奨勵す可きこと、特權會社を開放す可きこと等を主張せり。此の點に於ては『疲弊せる英國』の著者と粗ぼ見解を同うす。此著者が英國の疲弊を金銀の輸出佛國より奢侈品の輸入、航海條例、東印度會社、其他の特權獨占貿易團體に歸したるはコークの指摘する所と殆ど符節を合するが如し。而して此等に反對して佛國貿易の利を論じたる者に

England's Great Happiness, or a dialogue between Content and Complaint, wherein it is demonstrated, that a great part of our complaints is causeless. By a real and hearty lover of his king and country. London.



1677.

なる匿名の一書あり。McCulloch, The Literature of Political Economy, London 1845, p. 40. 予は未だ此書を見るを得ざるものなれ共、マカロック及ロッシアの記する所によれば、著者はフォルトレー、コータ及『疲弊せる英國』の著者等に比すれば識見時流を抜く者にして、殊に佛國貿易に關する謬想を痛撃して剩す所なきものゝ如し。マカロック曰く

*This is a very remarkable tract; its author having been very far in advance of the prejudices of his time. Were it to be rewritten at this moment, the only changes which it would be proper to make would be in the style, and even these would be inconsiderable.* 同上頁

と。然れどもフォルトレーが一度播きたる謬想は深く根を時人の心に植ゑ、此書の論ずる所は顧みられず。千六百七十八年佛國との貿易は三年を限りて禁止せらるゝに至れり。此時を以て商軍國主義の絶頂點となす。極端なる自國本位説極端なる外國敵視主義より打出せられたる商人的經濟思想は此時を一段落とし、其より後は更らに廣汎なる更らに進歩せる意味に於ける商國思想の漸く起りて英國經濟學説の面目頓に新なるを

見るなり。乞ふ章を改めて此新傾向に就て略述せん。

## 第六章 新商國主義 特にパーボンの學説

極端なる商軍國主義はフォルトレーよりヤラントンに至る諸論者を以て一段落を告げ、英國の對外經濟思想は漸く圓熟の境に入り、廣汎なる而して進歩せる立場に達するを見る。今此新傾向を代表するものは分つて三派となす可し、曰く新商國主義學者曰く政治算術學者曰く哲學者是なり。ヒュームは即ち十八世紀の中葉に至りて此三大分派を湊合統一して英國の經濟學を大成したるものにして、彼は新商國論者としても哲學的經濟論者としても、而して又或度迄は政治算術家としても、其最高頂に立つものにして、此等各箇の思潮は實にヒュームに至りて其最大の代表者を得たるものなりとす。

新商國論者の數尠からざる中に就て、予は其最も傑出せる者として二人を擧ぐるを得



可しと信ず。即ちニコラス・バーボン (Nicholas Barbon) サード・ドレーノース (Sir Dudley North) 是ななり。此二人は政治算術學者の最も卓越せる代表者たるサー・ウィリアム・ペー哲學者にして其經濟論を以ても亦た甚だ重要なジョン・ロックと相並んでヒューム以前の四大經濟學者を以て目するも決して不當ならざるものとす。

ニコラス・バーボンはパウアー教授が評してベテリ及ロックよりも其經濟論の透徹せる點に於て勝り殊に利子の學說に至りてはマッシー並にヒューム出づるまでは他に匹儔なき卓越なる意見を有したりと云ふ所なり。

*Stephan Bauer, Nicholas Barbon, ein Beitrag zur Vorgeschichte der klassischen Oekonomie. Conr. d's Jahrbücher, 21 Bd. Neue Folge. SS. 561-590. (1890) — Article "Barbon," in Tulgryue's Dictionnary of Political Economy.*

然るに彼は永く忘却裡に埋没せられて其鋭き見解と汎き觀察とは毫も顧みられず、單に一の奇抜なる保險論者としてのみ知られ、而して死するに方つて學弟ジョン・アズデルに遺言して予が遺す借財は壹錢だも之を支拂ふこと勿れと云ひたりとの一逸話を以て記憶せらるゝに止まれり。パウアーが精密周到なる研究を企たるにより、彼が學問其價值の大なること始めて學界の注意する所となれる彼が薄運は轉た同情に堪えたるものありと雖も、今日に至りては其最傑著は

ホランダ―重刷叢書に收めあり、マカロックも亦其の『稀觀經濟書集』に彼の『都市建造辯妄』を納れたれば、原題共に 下に出す吾人は彼を度外に置きて十七世紀の英國經濟學を談ずるの權能を有せざることゝなれり。英國經濟學史の權威たるロックシア―すらパウアーの著述を見るに及ばざりしならん。予は之を憾まざるを得ず。に就て何の言ふ所なかりき、蓋しロ氏は未だバーボンの

パウアーの教ふる所によれば、バーボンは恐らく千六百四十年を以て倫敦に生れ、千六百九十八年後事一切をジョン・アズデル(又一箇の有力なる經濟學者なり)に託して死す。彼は和蘭ライデンに於て醫學を修め同ウトレヒトに轉じて醫學ドクトルの學位を承け、千六百六十六年倫敦の大火に際し再建事業に與て功あり、其經驗より終に火災保險事業の必要を感じ、百方盡力の結果同八十一年英國最始の火災保險會社を起し、續て土地銀行設立に熱心し『國立土地銀行』National Land Bank 此銀行は問もなく解散せり。創立者の一人たりと云ふ。Hollan- Reprint of "A Discourse of Trade" の緒言を併せ見よ。パウアー評して曰く『バーボンの見解は若干の謬を免れざりしと雖も、著しく時流を抜くものにして殊に價值利子地代、外國貿易等に關しては近世の學說に近きものあり』Palgrove's Dictionary Vol. 1. p. 119.又其『貿易論』に就ては曰く『バーボンの此著



はヒューム出でずアダム・スミス出ざる前に於ては貿易均衡説に對する最有力の駁撃たり」と同上書一 然るに『貿易論』の重刷に於ては編者ホランダール謂らく『パウアー教授がバーボンの此著の或個所は彼がペテロ、ロッタ以上の學者たることを示せりとの説並に彼が貿易均衡説の駁論はヒューム及スミス以前の時代に於ては最有力のものなりとの説は彼の崇拜者ならざるものは必ずしも服従せざる所なるべし。然れども此書は今日猶ほ吾人の精讀に値し、彼の説は從來與へられたるよりもより多くの注意をホッブスよりヒュームに至る英國經濟學史の研究者によりて與へらる可きものなる事は誰人も之を拒まざる可し』前掲書緒言第一頁と。 今予は仔細にバーボンの著作を繙讀したる結果、一半はパウアー教授に一半はホランダール教授に追從するの已む可からざるを認むるものなり。バーボンはホッブスよりヒュームに至る間、即ち世界商權成立時代に於ける英國の經濟思想發達史に於て必ず度外に置くを得ざる有力の一學者たることホランダールの如くなるのみならず、彼は此間に於ける最も傑出したる思索家にして、兼て當時の現實問題に對し最も精到剴切なる解説者たることは之を否むを得ず。パウアーの言少しく

好む所に偏するの嫌あるを免れずと雖も、彼が英國經濟學史上に占むる地位の如何なるかは即ち道ひ得たり。バーボンの著述にして注目に値するものは左の如し。

- I 1684. A letter to a gentleman in the country giving an account of the two insurance offices; the Fire Office and Friendly Society. 予未だ此書を見ず。
- II 1685. An Apology for the Builder: or a discourse shewing the cause and effects of the increase of building London, printed for Care Pullen, at the Angel in St. Paul's Church Yard. 1685. 假りに『都市建造辯妄』と意譯す、此の書收めてマカロッタ『稀觀經濟書集』に在り。題名次の如し。A Select Collection of Scarce and Valuable Economical Tracts, from the originals of Defoe, Elking, Franklin, Turgot, Anderson, Schönberg, Townsend, Burke, Bell, and Others with a Preface, Notes, and Index. (Printed by Lord Overstone for distribution among his friends, edited by J. R. McCulloch, Esq.) London 1859. 一頁至二十六頁
- III 1690. A Discourse of Trade. By N. B. M. D. London, Printed by The Milbourn for the Author. 1690. 是れ即ち著者の傑作にして近頃ホランダールの重刷する所なり、其本は次の如し。A Reprint of Economic Tracts, Edited by J. H. Hellander. (1905.)
- IV 1694. An Answer to a Paper entitled Reasons against reducing Interest to four per cent. 前掲 III 出



版せらるゝや匿名の一論客 H. なる人 Reasons against reducing Interest to four per cent. 1691. なる書を作りてパーボンを駁撃せり。パーボン之に答へたるもの即ち此書なり。

五 1695. An Account of the Inhabitants, showing the Design and Manner of the settlement.

六 1696. A Discourse concerning coining the new money lighter. In Answer to Mr. Locke's Considerations about raising the Value of Money. 此書はロックの有名なる利子論の批評にして卓見を載せること多し。假りに『改貨議』詳しくは『新貨幣論』と意譯す。

右六部の中經濟思想史の上に不朽の價值を有するものは三の『貿易論』なり。利子學說に就ては六の『改貨議』、地代論人口論に就ては二の『都市建造辯妄』共に捨つ可からず。『都市建造辯妄』は僅々數十頁より成る小冊子に過ぎずと雖も、之をヒュームの『古代都市人口論』と併せ見る時は趣味深きものあり。一編の要旨は都市殊に倫敦の異常なる膨脹を非難する當時の俗論を斥くるにあり、以て一の都市經濟論と做す不可ならず。彼曰く『建物の一般に能く整ひ各家屋をして宛ら一の建築の藍本たらしめたる古代の藝術家は、アゼンス及其他の都市を其建築物によりて有名なるものとし、其勝れたる技術の遺跡によりて今日猶其紀念を維持するが如く、現代の藝術家は倫敦を其建築に於て歐

羅巴の首府とも見る可き程に飾れり。實に倫敦に於ける善良の家屋の數、其大にして數多き廣場、其住民の富より見れば倫敦は世界に於ける最大にして最も善く建造せられ、最も豊富なる都市なると云ふも溢美にあらず。然るに大なるものは常に妬みの目的となる。全世界は倫敦の繁昌に驚異の眼を注ぎ、年々其膨脹するを羨み、從て之を呪ふの念を生ず。是れ世人が新家屋の増築は舊都市の地代を下落せしめ、其商業を害す可しとなし、地方の人士も亦倫敦に地方民が吸收せられ、地方人口の減少を來し、終には田地の小作人なきに苦しむ可しと憂慮するに至る所以なり。而して彼等皆謂らく、倫敦の増築は政府に危険を醸し、國家の發達を不具ならしむ可しと』前掲書三頁至四頁パーボンは即ち此の種の論者に對し其誣妄と誤謬とを指摘す可く、此書を作れり。故に彼は先づ論を家屋増築即ち都市膨脹の原因に起せり。曰く都市膨脹の原因は死者よりも生者常に多きて、ふ人類の自然的増加に在り。増殖する人口は 一食 二衣 三住に對する需要の増加を招致す。食は凡ての物に共通なる必要なり、衣は然らず、人類にても寒地に住み乍ら衣類を纏はざる種族あり、即ち衣は生存の絶對的必要物にあらざること明なり。衣料に對する必要は



多く習慣の力より來る、之に反し住は生兒養育の爲め不可缺所にして、所産兒が保護を要すること多き動物は皆住所を構ふ兎、狐、獅子の如き然り。其然らざる動物例へば牛羊の如きは住居を作らず、されば家を建つる自然的原因は幼兒に養育所を與ふるに在り。人類亦然り。人口増殖するに従ひ新しき家屋は建設せられて従て都市は膨脹す。是に全く自然的必要より出づと。パーボンが都市膨脹反對論者に對する論旨の根據は斯くの如く簡易なるものなり。然るに彼は之に續きて彼獨得の地代論を主張せり。曰く『人類が文明に進み技術を習熟し善良なる政府の下に立つときは各人は必ずしも自用の肉を調理せず自用の衣を作らず自用の家を建てず。彼は自己又は祖先が技術と勤勉とによりて得たる土地及貨物の所有を享樂す。此等所有は富者と貧者との別を生ず。而して富者は他人の勞働によりて食衣住を得るも貧者は自己の勞働を費やさざるを得ず。かく貧者の作る貨物は即ち富者の土地に對する地代なるなり（何となれば自己の身體又は精神を勞することなくして十分に衣食住を得ることは是れ富者の謂なればなり）。』  
前掲書 第六頁 父祖より何物をも承けず自己勞働の儲餘なき貧者は他人の爲めに勞働す。斯く

他人の爲めに費やす貧者の勞働は富者所有地に對する地代となりて富者に飽食暖衣逸居せしむる所以なり』と。即ち其の所謂地代はメンガリの『無勞所得』、タムソン又はマルクスの『餘剩價值』と同一性質のものならずんばならず。パーボンの卓見寧ろ驚異す可きにあらずや。彼更らに進んで曰く、人類は其享樂する所よりも其欲望する所によりてより、能く區別せらる。職業の主たる任務は此等の機會を充たす可く各種の貨物を作り之を賣るに在り。蓋し餓寒を禦ぎ幼兒に保育所を與ふる等の第一次的自然的必要を充たすよりも、安樂愉快榮耀を進む可き物を作り、人の認識欲望を充たす爲に要する勞働の方遙かに多ければなり。かくて人の欲する所に従ひ大小各種の家屋を作り之を市場に提出して賃貸するなり。故に都市家屋の増築を不思議と考ふる人には、人類は自然的に増殖するものなることを諒解せしめざる可からずと。斯くの如く彼の都市膨脹論は人口増加論を前提とし、増加する人口に就ては欲望増進論を前提とす、彼が鋭き眼孔は當時に在つて優に時流を抜き後のヒューム以降の經濟理論と默契する點尠からず。彼はマシウ・ヘールの人口増加論を、詳かに評隲し、其八箇の論點の當否を考へ、『ドームス・デ



「ブツク」并に死亡表(Bills of mortality)の研究による議論を最も有力なりとして、而して結論すらく『多くの小なる政府の存在する状態は其國の發達幼稚なるの證なり。政府は箇々の家族に起源するものなれば、小なる政府は其起れる儘の家族に外ならず。かく幾多の小政府分立するときは國の半は無用に歸す。何となれば、敵によりて其收穫を害せられんことを恐るゝの餘り、各小政府は其領域の周圍を荒蕪に委ね置くを例とすればなり。故に一の大なる政府の下に統一せらるゝ場合に比し、一定の面積の養ひ得る人口數は少からざるを得ず。又技術の發達することなくんば多數の人民共に生存すること能はず、農業の技術により自然の状態に於けるよりも十倍の民口に食を給することを得、又大都市も起り得るなり。技術なくんば食料に對し支拂ふべき工藝品なし、大都市の技術は即ち地方の食料に對し支拂に供せらる可き物を作るなり』と。此一節は彼が經濟發展史に關する意見を窺はしむるものあり、而して又後世の所謂生産要素論の根柢をなすものと見る可きなり。而して彼の意見を總括する一句に曰く『天地創造の始より其政治にして善良なる限り人類は生みて而して殖ゆるものなり』と。茲に於て彼は

家屋増築の影響を 一都市の發達 二國運の伸張 三政治の便宜の三項に分つて詳論す。曰く、『家屋の新造は都市に利あり、何となれば之によりて舊家屋の賃料(レント)騰貴す可ければなり。都市が大なればなるほど其家屋の價値は高まる、同一の便利と品質との家屋もブリストル、エキセター、ノーザムプトンに於ける方近隣の小村に於けるより價値大なり。都市の中央に在る家屋は市端に在るものより價値多く、新家屋の増築により嘗ては市端なりし家屋も中央に近きこととなり、從て其の價値を増す』前掲書第 十八頁と、彼が『レント』論の眞意茲に於て太だ鮮明なるを覺ゆ。人口の増加は家屋の新築を促し家屋の増築は都市を膨脹せしめ、從て又富者の得る『レント』を高むと云ふは或點に於てリカルドを豫想するものなると共に、『レント』即餘剩價値論に會通する所あり。次に國運の發展に及ぼす可き影響に就ては謂らく、都市の膨脹は國家に取りて二様の利益あり、一は地方の産品に對する需要を増す、二は地方に用なき人民に職業、從て生計の道を與ふ是なりと。前掲書第 十八頁政治の便宜に就ては四個の理由を擧ぐ。其一に曰く、都市の膨脹は人民統治を遙かに容易ならしむ蓋し地方に散居する人民よりは都會に集居する人民の方治



め易ければなりと。マカロック稀觀書集解題 第六至八頁は此議論に反對して諸種の例を擧げて、都會人民の却て統治し難きを論ぜり。今詳論を省くと雖も、予は寧ろパーボン説の方遙かに當を得たるを信する者なり。彼曰く、都市家屋の増加し都市の膨脹するは人民をより能く治め易からしめ、從て一國の平和を保つ所以なり、第一家屋の所有者勉めて平和の維持を圖る可し、戰爭は彼等の敵なり、地方の地主は一收穫を失ふのみにして、戰終れば再び其土地を恢復し得可きも家屋に至りては然る能はず、第二に都市の空氣は平和の空氣にして、殊に大都市に集る人民は主權者の監督の下に在るが故に之を治むるに易し、都市大なればなるほど政治に利あり、又戰爭一度起るとき兵士を集め軍需品を得るに甚だ便ありと。

彼は右の外都市膨脹の政治上の利益を列擧して 一人口増加に便なること、而して人口の増加は政治の第一なること 二下層民に職業を與ふるによりて浮浪の徒を減ずること 三人民に貨殖致富の機會を多からしめ、從て國富の増加に利あること 四主權者の財源を豊ならしむることを説けり。今彼の論旨を綜括して考ふるに、其都市論は必竟

商工立國論を反映するものにして、彼が一代の傑作たる『貿易論』と相對して一篇の内國經濟政策論たるものなり。其見解は甚だ進歩的にして、また他の偏頗極端なる商軍國論の比に非ず。彼が政策の根本はマルサスによりて着色せられざる以前の人口増加論なり。パーボン曰く、『パーボンに取りては商國富有の誤る可からざる兆候は唯一、即ち人口の増加是れなり。人口の増加は即ち都市の膨脹となり海上力の擴張となりて顯はると』前掲書第百二十一頁是れ後のアーサー・ヤングが其『政治算術』『佛蘭西旅行記』等に説く所と全く同一轍に出づ後段一三〇五頁英佛兩國大小農制に關するアーサー・ヤングの研究參照を乞ふ。而して予の見る所粗之に同じきことは拙著の讀者の知る所なる可し。經濟學講義『人口の法則』(本全集第一集六一七頁)を見よ 好む所に偏するの謗は予の敢て辭せざる所なり。

遮莫パーボンの都市膨脹論の眞價値は其自らに存するにあらず、其論が彼の代表的著作たる『貿易論』の前驅として其論旨の多くを豫見せしむる者あるが爲なり。彼が倫敦に就て又一般大都市に就て云ふ所は要するに大英帝國の全體に就て言はんとする所を縮寫するものなり。謂ふ所都市の膨脹は帝國膨脹の反映なり。彼が都市増築反對論を



斥くるは、即ち極端固陋の『メルカンチリズム』を斥くる所以なり。彼は國內經濟論としての『都市建造辨妄』に於けると、對外經濟論としての『貿易論』に於けると均しく共に進歩論者なり。大帝國主義者なり。乃ちパーボンの真相を究むるには其『貿易論』一部は絶好の資料たり。

『貿易論』は千六百九十年倫敦に於て刊行し、序文九頁本文九十二頁より成る一小冊子なりと雖も、其内容の豊富にして所論の剴切卓抜なる之を推して十七世紀經濟文獻最大産物の一となす決して不可なきを信す。彼は其書の趣意を開陳して曰く『貿易の事に關して真相を得んと欲せば、其全體并に各部を合しての綜觀を作らざる可からず、決して部分のみを觀察して足る可きに非ず』ホランダー重刷 本序文第七頁と、彼は謂らく、從來の外國貿易論は何れも其一部のみを捉へ、之を直ちに移して全斑と做したるが爲め何れも甚しき誤謬に陥れり、部分的觀察而も特殊利害關係と相結んで國利民福の大局に着眼せず、是貿易を獎勵せんとして却て之を阻害し、國利の名の下に私利私益を圖るに至る所以なり。故に予は如何に不完全なりとも常に大局の上に立つて此問題を考究せんと欲すと。是れバ

パーボン其志を語る所にして、而して予の見る所を以てすれば、彼れは此言を十分に實現したるものなり。彼がヤラントン一流の商軍國主義を斥けて真正なる商國殊に海商國の國是を取る可きを提唱し、武力主義を排して平和主義を力説する事アダム・スミスと雖も一言も増減するを得ざるものあり。而して此點に於て彼が正面の論敵となしたるは實にトマス・マン其人なり。パーボン曰く『和蘭の如きヴェニス<sup>ス</sup>の如き地狹くして而も民多く國富む所以は、一に外國貿易の齎らせる賜に外ならず。然るに英國に在りては未だ外國貿易を盛ならしむべき眞原因を正解するに至らず。多くの學者は商業を以て戰爭並に政治の從僕と看做し、戰爭に關係あり之を助く可き點よりのみして商業を觀察するが故に常に謬見に落ちたり。古代にありてはリヴェキウスの如き才人にして、猶ほ商業を全然度外して政治を考ふるあり。中世に至りてもマキアヴェリ<sup>の</sup>の如き卓見家にして、政治の道具としてのみ商業を觀察するに止るあり、而して世間一般に商業は國民を懦弱ならしむとの謬れる見解を基とし、唯だ戰爭に必要な武器の供給上已むを得ざるものと見做せり』前掲書 第六頁更にマンを評しては曰く『貿易の真相を正解し居る可き筈なる商人



貿易業者すらも之を解せざるか、又は自己の利益を損ぜんことを恐れて其真相を發見するを欲せず。一商人なるマンが其の『貿易論』に於て論ずる所は完全なる商人を作る可き規範を教ふるに専らにして、國民全體に取りて利益ある様にするには如何に爲す可きかを論ぜず、されば吾人が毎々商人の口より聞く所は、悉く私利の爲に誤まられたる議論にして、其利害關係次第互に相矛盾せる主張たらざはなし』同上マンの如き身自ら海外貿易の業に従ひ、其道の先覺者を以て目せらるゝ者にてすら猶ほ私人本位の見解を脱せず、商人の利害よりして國家の外國貿易を考察す、況んや他の賸々者流に於てをやと。パーボンの此論聊か酷に失せり、彼はマンが其著に於て先づ論を商人養成論に起し、商人に必要な條件を細説するを見て、マンは常に這箇の立場に在て一國商業の諸問題を觀察する者と認めたるなる可し、其は誤解なり、速斷なり。マンの本旨は決して商人萬能論を唱へんとしたるに非ざることは上段説く所を以て明白なるべし。然りと雖もマンは未だパーボンの如き廣汎なる寛宏なる自由思想に進み居らざりし一事は之を拒むを得ず。パーボンが此痛所を責むることは誠に當を得たり。彼曰く『土耳其貿易商人は東印度

會社を非難し Wollen-Draper は Mercer を攻撃し、Upholster は Cain-Chair-maker に反對し、或者は貿易商人の數多きに過ぐとなし、建築者の多數なるを難し Ale-house 多きに失すと云ひ、或者は或貨物を獨占業とせざる可からずとし、他の者は或商品の專賣を必要なりとす。斯て此等の論者各其の欲する所の法律の發布を見るに至らば、次代の新進者に殘る所の貿易は皆無となる可し。如斯貿易の數人場所を限らんと企ては、其の口實として如何に國利民福を標榜するとも、結局貿易を縮小するに外なけん』第六、至七頁と。彼は此種の我利論を根柢より一掃するを自家の天職と考ふ。茲に於て『貿易論』の著あり。

『貿易論』章を分つこと七 一貿易の客體即ち商品 二商品の品質分量 三商品の價值及價格 四貨幣信用及利子 五貿易の利益 六貿易發達の原因 七貿易衰頹の原因と地代下落の原因是なり。パウアー此書を評すらく『今日迄の經濟學史家が毫も顧みざりし此書は、彼の同時代の學者の最大なる者の何れにも劣らざる卓見を披瀝する者なり』前掲書第百十九頁と。パーボンの論旨一面は外國貿易論にして、當時の英國の爲に固陋なる『メルカンチリズム』を斥け、進歩せる意味に於ける『メルカンチリズム』を鼓吹すると共



に、他面經濟生活の根本現象に關して甚だ傾聽に値する考察を試むる者にして、今日の吾人彼が爲に啓發せらるゝもの一再にして止まらず。是予が特に稍々詳細に彼に就て語らんとする所以なり。

## 第七章 パーボンの價值論

パーボンは『トレード』を定義して貨物を作ることと、一貨物を他貨物に代へて賣る事となりとし、前者を Handy-Craft Trade と名け、之に従事する者を Artificer とし、後者を Merchandizing と名け、其人を Merchant なりとし、各々種類を列擧したる後『トレード』全體の目的を示して chief End or Business of Trade, is to make a profitable Bargain 『トレード』の主たる目的又は任務は収益を得べき取引をなすに在り』前掲書と云へり。是れ即ちゾムバルトの所謂『營利經濟』の謂なり、彼は此營利經濟の福音を力説高唱するものなり。

彼の都市膨脹論然り。彼の外國貿易論然り。

商品に二種あり、自然的商品、人工的商品是れなり、兩者とも主として之れを生じ又は製する國に取りては其國の Staple Commodity と名く。『ステイブル』は風土氣候の異なるにより異なる。『ステイブル』は之を二種に分つ、自國産品、外國産品是れなり。自産『ステイブル』とは其國が自然的に且つ最も能く生産するものを云ひ、外産『ステイブル』とは外國の某地への獨占貿易によりて得る外國品、又は特殊の獨占技術の所産たる外國品を云ふ。Spices は和蘭の『ステイブル』にして、硝子及び紙の製造はヴェニスの『ステイブル』たるが如し。各國の自産『ステイブル』は其國の富なり、是れ永久的にして無盡藏なり、地の獸畜、空の鳥、海の魚は自然に存在す、礦物又然り。自然の『ステイブル』にして無盡藏なる限り、人工的『ステイブル』も亦無限に造り得可し。亞麻羊毛、木綿生糸無限なれば、毛織物、リネル、キアリコ、精糸亦無限なるが如き是なり。此く考へれば、トマス・マン所論の一節の誤なること多言を須たず。彼は節儉、質素及奢侈禁止令を富國の手段なりと説き、例を設けて曰く、毎年千磅の收入ありて別に二千磅の儲餘を有する人、一ヶ年千五百磅づゝ



消費する時は四ヶ年にして其貯蓄は空しかる可しと。然れども此例は一個人の事のみ、之を以て一國を論ずるは不當なり。一個人の貯金高は有限なり一國の資源は無限なり、一個人の貯金は盡くることあるも一國の資源は然ることなし、無限なるものは節儉すとも之れに加ふるに由なく、浪費するも之を減ずる能はずと。此言餘りに簡に失して俄かに之を聞くときは、詭辯に類するの嫌なきに非ずと雖も、バーボンの眞意は存して深き所に在り。彼はマンが國を治むるは商人が産を治むるが如く、國を建つことは商店を経営するが如くならざる可からずて、商人本位の『メルカンチリズム』を唱ふるを淺薄なりとして斥けんと欲するものなり。故に兩者の根本的相違を力説して、其の妄を匡さんとす。是れマンの商國主義とバーボンの商國主義との相分つ所なり。バーボン論を進めて曰く、一國の自産『ステイプル』は其外國貿易の根柢なり、外國貿易の起るは先づ自國産の商品を與へて彼の商品を得るにあり、此外々國品を得るの道なし。故に自産品より來る富は確實なれ共外國商品より來る富は不確實なるを免れず。『或國は他國への獨占貿易又は或技術の獨占特權によりて外産『ステイプル』を得、自産『ステイプル』に

劣らざる利を獲ることある可し。然れ共其利たる獨占によるものなれば不確實なり、他國は同一場所に貿易する道を見出し獨占を無効たらしむることある可ければなり。』  
前掲書第十一頁 獨占特權は恃む可からず、バーボンが夙に此消息を道破せるは十七世紀の英國に在りては比儔少なき卓見たらすんばあらず。

商品の品質及分量論に於て彼は更らに *Mystery of Trade* を論じ兼て商業道德のことに及ぶ、即ち左の如し。

*Because the difference in qualities of wares, are so difficult to understand, it is that the Trader serves an Apprenticeship to learn them; and the knowledge of them is called "Mystery of Trade"; and in common dealing, the Buyer is forced to rely on the Skill and Honesty of the Seller, to deliver Wares with such qualities as he affirms them to have: It is the Seller's Interest, from the Expectation of further Dealing, not to deceive; because his Shop, the Place of Dealing is known: Therefore, those Persons that buy of Pedlars, and wandering People, run Great Hazard of being cheated.* 前掲書第十三頁

商品の價值及價格の章はパウアーが壓卷の一章と云ひ、又『價值並に價格に關するバーボンの説は彼の同時代の何れの學者の説よりもより、多く近世の説に接近す』と云ふ



所にして、吾人細心の吟味を促がすものなり。彼曰く、凡て商品の價値は其利用より起る、利用なき者は價値を有せず、英語にて之を *They are good for nothing* と云ふは這般の消息を傳ふるものなり。利用とは人の欲望と必要とを充たす事を云ふ、人生れて二様の欲望を有す、身體上の欲望と心意上の欲望と是れなり。此兩様の必要を充たすが爲に日の下の凡ての物は有用となり従て價値を有するに至るなり。體欲は衣食住の三に分ると雖も、其絶對的に必要なは食のみ、他は習慣上通俗上認めて必要となすに止る。然るに心欲に至つては無限なり。 *Man naturally aspires, and as his mind is elevated, his Senses grow more refined, and more capable of Delight; his Desires are enlarged, and his wants increase with his wishes, which is for every thing that is rare, can gratify his Senses, adorn his Body, and promote the Ease, Pleasure, and Pomp of Life.* 前掲書第 十三頁 (人は自然に向上の念あり、其心高まるに従ひ嗜好は精緻となり樂を求むる事を増し願望は擴張し欲望は増進して、凡て珍奇なるものを求むるに至り、以て其心を滿し其體を飾り安易愉快榮耀を進む)。心欲の中最も強きものは裝飾の欲なり、如何に野蠻なる民にても *Distinction* を示す可きものを求む (獨逸學者の所謂

*Anerkennungstrieb* 認識の衝動)、殊に強き色彩主として赤色は彼等の好んで身に纏ふ所なり (臺灣タイヤル族の如き盛裝は勿論日常の衣にも其色は皆赤色なり)、又得るに困難なる珍稀の品は之を得る容易ならざるが爲に、人に誇るに足るものとして甚だ尊重せらる。パーボンが價値は利用より起ると云ひ『利用なきものは價値なし』 *No Use no Value* と云ふは、單に物能を指して云ふに非ざるとは彼が重きを心欲に置き、人が認めて用ありとなすことを用と云ふに徴して知る可し。最近の學説が *anerkenntermassen brauchbar* (欲望を充たすに足ると人が認むる) を以て價値となすと全く同一趣味に出づ。彼より後れて出でたるジョン・ロー、ジョセフ・ハリス、并に此兩人を承けたりと見る可きミスミス等の價値論に於て、使用價値なくして交換價値を有するものありとし、水と金剛石とを好んで引例するに比すれば、パーボンは遙かに多く最近の學説に接近するものならずんば非ず。又其認識の欲望 *Desire for Distinction* を説き、稀なるもの得るに難きもの、即ち價値多しとして尙ばるゝ所以を明にする、又共に斯學現在の立場其儘なり。斯くして彼の價格論の眞面目は躍如として吾人の眼前に在り。其一節含蓄殊に深ければ先づ原文を左に出す。



The price of wares is the present Value; and ariseth by computing the occasions or use for them, with the Quality to serve that Occasion; for the Value of things depending on the use of them, the Overplus of those wares, which are more than can be used, become worth nothing; so that Plenty, in respect of the Occasions, makes things cheap; and Scarcity dear.

There is no fixed Price or Value of any thing for the wares of Trades; The Animals, and Vegetables of the Earth, depend on the influence of Heaven, which sometimes causes Murrains, Dearth, Famine, and sometimes Years of great Plenty; therefore, the Value of things must accordingly alter. Besides, the use of most things being to supply the Wants of the Mind, and not the Necessitys of the Body; and those Wants, most of them proceeding from imagination, the Mind changeth; the things grow out of Use, and so lose their Value. 前掲書第十五頁

(商品の價格は現在の價值なり、而して商品に對する機會と其の機會に役立つ可き商品の分量とを比較するによりて起る。蓋し物の價值は其利用によるものなれば、其商品の過剰は何等の價值を有せず、故に機會に對し潤澤なるときは物は安くなり稀少なるときは物は高くなる。)

商品としての物には一定の價格又は價值なるもの存せず。地球の動植物は天の影響により豊凶常ならず、從て物の價值は變動す。加之、多數の物の利用は身體の必要を充たすよりも寧ろ心意の欲望を充たすにありて、此等の欲望は多くは想像より出づ、而して人の心は變化す。かくて一度用ありし物も其用を失ひ從て價值なきこととなる可し。

バーボンは價格を以て現在の價值の謂なりとするものにして、使用價值なきものも猶ほ交換價值即ち價格を有すると云ふが如き見解に與せざるものなり。價格は物の機會と之れに對する分量との比較より起ると云ふは、即ち需要供給によると云ふと同一義なり。供給が需要に超過する時は過剰を生ず、此部分には價值なし、價值は利用あるもののみ之を有すればなり、價格の高低は此理によりて定まる。而して價格價值には一定のものもあることなく常に變動するものなり、物の豊凶は天之を定むるのみならず人心は常に變ずと。是れ明かに『カノニスト』の *justum pretium* を否定すると共に、アダム・スミス一流の *Natural price (normal price)* 論を排斥する所以なり。其見識の傑出せること今多言を須むずして明ならん。

斯く一定の價格價值なるものは之を認む可からざると共に、凡の物の價值は之を推定す可き方法なきにあらず。之を分つて二とす、曰く、商人の價格、工人の價格是なり。商人



の價格とは生産實費、諸掛り及利子の總計を云ひ、工人の價格とは原料の價に加工の時間を通算したるものを云ふ。時間の價は一様ならず、技術の差異及工人の熟否に依て定まると。彼が時間論はマルクスの『社會的必要勞働時間』論と似たる所あり。而してパーボンの茲に云ふは總じて供給價格のことたる勿論なり。其點に於ては今日の學說の教ふる所彼の所論以上に出づることなきなり。彼は商人原價中利子を加算する理由を説て『利子は商人が依て以て商賣す可きや否やを定むる定規なり』Interest is the Rule that the Merchant trades by と云へり。商人に取りての利子は即ち工人に取りての勞働時間なり、商品の價格下落する時は商人は利子を損し、工人は時間を損す。而して一切の價値の最良の判者は市場なり。市場は賣手と買手、商品の分量と其機會との相知らるゝ所なればなり、故に曰く Things are just worth so much, as they can be sold for, according to the old Rule, Valet quantum vendi Potest 前掲書第十六頁 (凡て物は其賣られ得る丈の價値あること古言に『賣り得る分量丈の價値あり』と云ふが如し)と。

彼が價値價格論の徹底せること概ね斯くの如し。然れども其貨幣及利子論に至りて

は更らに驚異す可きものあるなり。彼は劈頭貨幣に定義を下して曰く Money is a Value made by a Law: And the Difference of its Value is known by the Stamp, and Size of the Piece. 前掲書第十六頁 『貨幣とは法律によりて作られたる價値の謂なり。其價値の差は刻印と形の大小とによりて知らる』と。而して謂らく、貨幣が金又は銀を以て作らるゝことは必しも肝要に非ず、何となれば其價値は一に法律の定めより起るものなれば、刻印を捺す金屬の何たるかは問ふ所に非ざればなり Money hath the Same Value, and perform the same Uses, if it be made of Brass, Copper, Tin, or any things else 第十頁(貨幣は之を作るに眞鍮銅錫又は他の何物を以てするとも同一の價値を有し同一の用を盡くす)。唯だ其法律の力の及ばざる所(外國)に至りては其金屬の何たるかは意味を生ず。斯くの如き所にては刻印の捺されたる金屬其物の價値が貨幣の價値たり。乃ち外國に在りては自國貨幣は其作る金屬の價値丈の價値を有するに過ぎず、法律の附與したる價値は當然存することなし、故に凡ての外國貨幣は重量によりて授受せられ一定の價値を有せず、其金屬の價格の變動に伴ふて或は騰り或は下ると。同上

パウアーはパーボンの此論を以て誤なりとし、唯だロツ



クの共同合意説(貨幣は其始め人民の共同合意によりて作らるるとの説)よりは勝れりと云ふ。パウアー教授の此論は未だクナップの國定説出でざる前の通説の見地より下したるものなること勿論にして、吾人今日の立場よりしては未だ俄かに斯く速斷するを許さざるなり。抑も貨幣の價值を *proclamatorisch* に説明せんとする試は必ずしもクナップに始まるに非ず、否、パーボンと雖も破天荒者には非ず、彼の前にダヴァンツアチあり、モンタナリあり、ルイス・ロバーあり、其他同説者少からず。但し國定又は政權説は共同合意説と混同す可からず、兩者は形太だ似て實は甚だ異なる。共同合意説 *Convenienztheorie* は必竟社會契約説の延長に過ぎずして、如何なる意味に於ても斷じて今日の學問に許す可からず。之に反し政權國定説は一度英國の金屬尊重説の爲めに掩はれたり雖も、『メタリスト』は一は金屬尊重の『メルカンチリズム』の餘波を受くるものにして、又一は十八世紀末の英國不換紙幣時代の弊害に懲り懲り於羨者而吹竈ものなり、今日に至りては却て眞理に近きものとして認められんとす。故に予はカール・メンガーが兩者を同一視したるを斷じて謬解と見る。 *Grundrisse der Vol. wirtschaftslehre. Wien 1871 SS. 255-250 Fussnote.* パーボンに取る可きは其政

權説が毫も社會契約の臭味を帯びずして、而して極めて透明なること是なり。彼曰く法律が定めたる價值が即ち貨幣の價值たらざるなれば、英國の『クラウン』は今五志二片の價值ある可きなり、何となれば『クラウン』を鎔解して之を外國に齎らす時は其價あればなりと。彼は成語を以て言表はさざるも、對外貨幣と對内貨幣との別は明かに之を知り、前者に對して金屬價值説を認め、後者に對しては政權説を取ることにシユルツ以下最近學者と異ならず。斯して彼は其根本地に立ちて『メルカンチリズム』の金銀過重の謬見を痛切に批駁し、貨幣金屬説が其謬見の本源なることを指摘せり。曰く世人は金并に銀に對し甚だ大なる尊重の念を有し、爲めに金銀は固有の價值 *Intrinsic Value* を有するものにして、凡ての物の價值を此の固有價值によりて算勘し得可しとなす。此誤謬の依て起る所以は、貨幣が金銀を以て作らるゝよりして彼等は貨幣と金銀との區別をなさざるに在り。然れども貨幣は法律によりて確定の價值を附與せられあるも、金銀は然らず、其價值は銅鉛其他凡ての物と同じく不定なり。兩者を同一視するは全然誤れりと。又謂らく、金銀の價值大なるは其が稀少なる爲なり。若し昔より發掘せられたる金銀にして



費消せらるゝことなく悉く世に存したりとせんか、今日の如く金銀に價值あることなる可し。されば『哲學者の石』を求むる鍊金術は自家矛盾に落つるものたるを知る可し。彼の術者の云ふ如く容易に金を作り出すを得るに至らば金の價值は輕小となる可く、從て鍊金術を施して金を作るは徒勞に歸するの外なからん。金屬が其の價值を維持する所以は其が稀なる爲めなり。其固有の性質に基くに非ず。何物と雖も確定不動の價值を有することなし、凡ての物の價值は時と所によりて異ると。彼の貨幣論の時流を抜き、嶄然として獨得の慨ある如くの如し。而して此貨幣論は彼が更らに取て以て外國貿易論の基礎とする所なるを知るに及ばず、吾人の敬重の念は更らに一段を加ふ可きなり。乞ふ以下少しく詳説せしめよ。

## 第八章 パーボン貨幣論

パーボンの著作にして予が從來見るを得たるものは『都市建造辯妄』と『貿易論』の二著にして、彼が『改貨議』に至ては其名を聞くこと久くして未だ其書を見るを得ず、僅かにパウアー教授の引照を唯一の頼みとするに過ぎざりき、故に前章に於て予はパウアーの引用を誤なきものと推定して立論を試み置きたり。然るに予が此稿の進行に伴ひ、而して學友其他の好意によりて往々にして十年憧憬の稀觀書を見るを得るものあり、恰も前章を下筆し終れる後若干日倫敦より到來せる新收書中にパーボンの『改貨議』一部あり、乃ち予は其書を読み、讀むことを得たり。其書は小形二十四切序文六頁内容要目八頁本文九十六頁より成り、其『タイトル・ページ』に記する所は左の如し。

A

Di course

Concerning

Coining the new money lighter

in

Answer to Mr. Look's Considerations



about raising the Value of money.

By Nicholas Barbon, Esq.

London

Printed for Richard Childell, at the Rose and Crown

in St. Paul's Church-Yard MDCXCVI.

書中章を分つこと四 一富及物の價值 二貨幣及各種貨幣の平價 三貿易の均衡及外國爲替 四貨幣の價值の引上げ其原因及結果是なり。パーボンが此書を著はす理由は、其著題に明なる如く貨幣改鑄詳く云へば新貨幣を輕鑄すること「之を當時敵味方とも稱し」に關しラウンズの輕鑄說に對し時の大哲學者ジョン・ロツクが有力なる反對論を二回の大論文に於て發表し、貨幣輕鑄の非を痛論したるを更らに駁撃し、貨幣輕鑄の利を説き、新貨は舊貨よりも金屬分(銀分)少きものとす可しと主張せんが爲にして、ロツクの論據たる *That there is an Intrinsick Value in Silver, which is the Price or Estimate that Common Consent hath placed on it, by which it comes to be the Measure of the Value of all other*

*things* (銀には固有の價值あり、即ち共同の合意によりて附與せられたる價格又は評價是なり、此固有の價值あるにより銀は凡て他の物の價值の尺度たるに至れり) てふ前提を根本的に否定し、パーボン自家獨得の說を披瀝する者なり。彼は先づ卷頭にロツクの說の要領を列記し、次で自說の要領を擧て之と對照せしめ以下本文の論述に入る。其ロツク說の要領なる者を摘出すれば左の如し。 前掲書 *The Content* 1-5

- 一 銀は其固有の價值によりて商業の要具たり又尺度たり。 *That Silver is the Instrument and Measure of Commerce by its Intrinsick-Value.*
- 二 銀の固有價值とは共同合意によりて附與せられたる評價のことなり *The Intrinsick Value of Silver is the Estimate which common consent hath placed on it.*
- 三 銀が商業の尺度たるは其分量による。銀の分量は又其固有價值の尺度なり。吾人が授受し又依つて契約するものは銀の分量なり、吾人が他物の價值を評價するも、凡て他の貨物に代へて授受するも、共に銀の分量なり *Silver is the measure of commerce by its Quantity, which is also the measure of its Intrinsick Value. It is the quantity of Silver, Men give, take, and contract for, that they estimate the value of other things by, and give and take in exchange for all other*



Commodities.

四 貨幣と鑄造せられざる銀地金と異なる所は唯一點にあり、即ち貨幣に於ける銀の分量は各片毎に其刻印によりて表示せられ、其刻印は目方と純分とに對する公けの保障たることなり That Money differs from Uncoined Silver only in this, that the quantity of silver in each piece is ascertained by its Stamp; which is set there to be a Public Voucher for its Weight and Fineness.

(以下略之)

之に對するパーボンの反對提議 *Contrary Propositions* 次の如し。

前掲書  
Contents 6-8

- 一 銀には固有價值なるものあることなく、又た共同合意によりて附與せられたる一定又は確實の評價なるものなし。銀は單に一商品たるのみにして、他の商品と同じく其價值騰落するものなり That there is no Intrinsic Value in Silver, or any fixed or certain estimate that common consent hath placed on it; but that is a commodity and riseth and falleth as other commodities do.
- 二 商業の要具たり尺度たるものは貨幣にして銀にあらず。That money is the Instrument and Measure of Commerce, and not Silver.
- 三 貨幣が商業の要具たるは之を鑄造する政府の權威による。貨幣は各片の刻印と其の大

小によりて其價值を知る That it is the Instrument of Commerce from the Authority of that Government where it is coined; and that by the Stamp and Size of each piece the Value is known.

四 貨幣と鑄造せられざる銀地金と異なる點は、政府の權威を以て貨幣の各片に一定確實なる價值を附與し、其價值は一般に其の含有する銀の價值たることはなり That money differs from Uncoined Silver in this, that the Authority of the Government gives a fixt and certain value to each piece of Money which is generally beyond the value of the Silver in it.

五 吾人が他物に代へて授受し又依りて契約し并に之を以て凡て他物の價值を評價するものは貨幣にして其各片の純銀の分量よりも、貨幣の刻印と通用力とを目當とするものなり That it is Money that Men give, take and contract with for all other commodities, and by which they estimate the value of all other things; having regard more to the stamp and currency of the Money, than to the quantity of fine Silver in each piece.

(以下略之)

予は此書を熟讀して、前節に引用したパウアーの説の寸毫も誤なきを確め得たるのみならず、パーボンは此書に於ては其『貿易論』に於ける主張を些も變ずる所なくして、却て往々にして説て更に詳なるを見て、本稿半にして此の機會に逢ひたることを甚だ會心と



せざる能はず。其ロツクの討論の部分は之を他日ロツクを論ずる折に譲り、『貿易論』に在る可くして無く却て此書に載せたる貿易均衡論は、之を貿易論に合せて以下に紹介せんとす。價值論并に貨幣論に就ては前節の叙述を以て粗ぼ足れりと信するが故に、今は唯だ次の數言を紹介して彼が意見を更らに確かめ置くに止む可し。

パーボンは其價值論の末尾に總則五條を列記す。一何物も其自らに價值又は價格を有する事なし。二凡の物の價格又は價值は之に對する機會(需要の事なり)又は要用より起る。三此機會に對比して存在量の充分なるや稀少なるやが其の價值を大にし或は小にす。四一物の存在量充分なりや稀少なりやは同一の使用に充つるに非ざる他物の價格を變ずる事なし。五貿易商業に於ては價值均しき物と物との間に何等の差別ある事なし。鉛又は鐵の二十志分と銀又は金二十志分とは商人に取りては同一物なりと書第十乃至第十一頁是なり。彼は又其貨幣論に於て主張すらく、一金屬をして貨幣たらしむものは國家の權威なり、此の權威によるに非ざれば銀は貨幣として金よりもより多く通用する事なし。ロツクが他物の價值は何れも變動するも、銀のみ獨り其價值變動することなし

と云へるは明かに誤にして、彼は貨幣と其材料たる銀とを混同したるものなり。價值の變動せざるものは貨幣たる銀片なり。銀なるが故に變動せざるに非ず、貨幣たるが故に其の確定的に附與せられたる價值變ぜざるなり。略何物も其自からに價值又は價格を有せざること、而して凡ての物の價格は其利用より起ること疑を容れずとせば、貨幣はなる利用を有するにより地金即ち刻印を施さざる金屬其もの、價格より大なる價值を有することは別に怪む可き所なかる可きなり。而して一國の政府が其發行する貨幣に一定の價值價格を設定附與する權能を有すること、恰も商人が其賣る所の商品に於けるが如くなるを得可きは亦た自明の理なり。又政府が貨幣に附與するに地金の價格以上の價值を以てして、其刻印に對し或價值を許さるゝの當然なるは、金鍛冶に金皿製作の價を拂ひ、彫刻師に『メダル』彫刻料を供すの當然なるに均し。略貨幣を授受するものは銀の分量よりも寧ろ其鑄貨の通用を重視す。ロツクの云ふ如く、刻印は目方及純分の保證たりと云ふの非なるは、何人も實際授受に方りて目方及純分を顧慮せざるに徴して明なり。吾人が授受し契約する者は英國の通用法貨(current and lawful money of England)なり



て銀の一定分量に非ず。故に結論して曰く Money has some Valuation from the Authority of the Government where 'tis coin'd and not its sole Value from the quantity of Silver in each piece (貨幣は之を鑄造する政府の權威に基きて或る價值を有す。其價值は單に各片の銀量のみによるにあらず)而して men regard the Currency and Stamp of the coin, and take it more upon the account that it will pass again for the same value to another, than for the quantity of Silver in each piece (吾人の着目する所は鑄貨の通用と刻印となり、即ち吾人が貨幣を受取るは各片中にある銀の分量を目當とするよりも、其各片が再び(受取りたると)同一の價值を以て受取られ通用することを目當とするなり)と。前掲書第二十九乃至三十四頁に就て摘記す

## 第九章 パーボンの信用及利子論

パーボンの貿易論を紹介するに先ち彼が信用及利子説を一瞥す可し、其の論は貨幣論

(貿易論第四章)の末尾に載せたり。彼謂らく信用とは輿論によりて作られたる價值のことなり、而して信用の物を買ふことは貨幣に異らず、凡ての商業地に於ては現金によりて賣らるゝよりも信用によりて賣らるゝ商品の方多し。信用に二種あり、一は買手の能力に基く信用なり、二は正直に基く信用なり。信用を幫助する爲に大商業地には Public Banks of Credit あり、アムステルダム并にヴェニスの如き是なり。此種銀行は國の商業に大なる利あり、獨り倫敦之を缺くは恨事と云ふ可しと。 It is much to be wondered at, that since the City of London is the Largest, Richest, and Chiefest City in the world, for Trade; since there is so much Ease, Dispatch, and Safety in a Publick Bank; and since such vast Losses have happened for want of it; that the Merchant and Traders of London have not long before this time addressed themselves, to the Government, for the Establishing of a Publick Bank, Loc. cit. p. 19 (パーボン此言をなせるは千六百九十年の事なり、而して四年後の千六百九十四年英國銀行の設立を見る。パーボンの喜想見る可きなり)。バ 利子に就ては曰く、利子とは Rent of Stock (資本の賃子)のことにして、土地の地代と同一物なり、異なる所は前者は作られたる人爲的の資本 (Wrought or Artificial Stock) の賃子にして、後者は作られざる又は自然的 (Unwrought or Natural Stock) 資本の賃子なること之れなり。利子は普通に貨幣に對して計算せらる、其故は利附にて借りられたる貨幣は貨幣を以て返済するを以てなり、然れ共こは誤謬なり、利



子は貨幣に對して支拂ふものにあらず資本に對して支拂ふものなり、借入たる貨幣は商品を買ひ又は前拂する用に充てらるゝを常とす。何人も利附にて貨幣を借入れ之を其儘に保藏して利子を損するもの非ず。利子の用の一は商人が之を以て損益の計算を立つること是なり。利子を差引きたる殘餘の收得は利益として計上し、利子に足らざる分は損失として利子を差引きて過不足なきときは損益共に無しと云ふなり。利子第二の用は土地地代の價値の尺度たる是れなり。例へば和蘭に於ては利子の率は三分なれば百磅中其何倍あるやを計算して三十三を得、之に三を加へて土地の價値は三十六年の買價なるを知る。英國にては利率は六分なれば土地の價値は二十年の買價なり、愛蘭にては利率一割なれば地價は十三年分なり。即ち行はるゝ所の利子の率によりて土地の價値を知り得。故に各國共に利子は法律を以て定めて之を確實にするを例とす、然らざれば商人は計算の標準を得ず、紳士は土地を賣る可き目安を得ざるべきなりと。前掲書

頁一 パーボン『貿易論』に述ぶ所の信用及利子論は、此の如きに過ぎずして其詳細を窺ふに

由なし。パウアー教授がマツシー及ヒューム出づるまでは匹儔を求めて得ざる卓越なる意見なりと稱する彼が利子學説は、果して那邊に之を尋ね可きや予の知り得ざる所なりと雖ども、利子を地代と同一物なりとし、又利子は貨幣に對して支拂はるゝものに非ず、資本に對して支拂はるゝものなりと云ふは『メルカンチリズム』論者の多數に比して一段の高處に在るものなるは疑を容れず。然れ共利子が法律によりて定めらるゝは之を確定ならしめて賣買價格に標準を與へんが爲めなりとの論は斷じて謬見とせざるを得ず。是れ彼が利子制限論引下げ論に淫するものならずんばあらず。然りと雖も、予は彼の著たる『利息引下げ論』原名前に出づ、前段一〇九七頁書目四を見るを得ざるものなれば、彼の利子説に關して今猝かに評論を敢てし得ず、唯だ後日の機會を待つのみ。利子論を載せたる可く想像には案外にも利子に就て一言をも下さず



## 第十章 パーボンの貿易論

パーボンの『トレード』(商業と工業との總稱)論は三章に渉る。曰く『トレードの用と利』  
『之を促進する主要原因』『其衰頹の主要原因附土地地代の下落』Use and Benefit of Trade,  
Chief Causes that promote Trade; Chief Causes of the Decay of Trade, and the Fall of the  
Rents of Land 前掲書第二十一 是なり。曰く『トレード』の用に三者あり。一人生に必  
要なる物資を供す。即ち吾人生活の維持は勿論防禦安樂愉快榮耀に要するものを作り  
之を供給するは『トレード』なり。二土地の地代を高む。各種の改良を施するにより土  
地はより大なる自然的資源を供し、従つて地主の得る分け前はより大となる。地主の分け  
前が貨幣にて支拂はるゝと貨物を以つて支拂はるゝとは同一事なり、何となれば貨幣は  
貨物を買ふ可く支出するを要すればなり。貨幣は交換の便の爲に法律によりて作られ

たる想像的價值のみ、眞正の價值たる土地の地代たるものは自然的資源なり。三平和を  
促進す。北歐の人民は人口數増すに従ひ、其氣候の必要上より轉移を餘儀なくせられ、南  
方に下り來りて暖地の先住民を滅ぼし其他を奪掠したれども、『トレード』起りて後は彼  
等の勤勉は其乏しき土地を豊にし物産を多くし、南方の産物と交換するの道開け、彼等は  
安んじて其寒地に止り復た南方を侵すの必要なきに至れり。是れ七八百年以來は昔日  
の如く北方民の侵掠を南方に見ること稀なるに至りし理由たらずんば非ず。加之産業  
は戦争よりも勞働者により、善き價を供するを常とす、斯して人類は戦争によりて遠く異  
域に運命を求むるよりも、平和の業に従て本土に留るの利あるを悟るに至れり。以上三  
者は人類全體の立場より見たる『トレード』の利益なり、然るに一國の政治の立場より見  
るも『トレード』の利益亦多大なり。一 國家の收入を増す『トレード』は人民に職業を  
與へ、職業ある人民は國家に納税する高多し、殊に消費税海關稅收納を増進す。此點より  
見れば一國に製造又は輸入するに如何なる種類の貨物が政府に取りて最も利ありやの  
争論は容易に解決す可し。吾人が顧慮す可き唯一の差別は、其製作に使備せらるゝ工人



の數の多少之のみ。例へば生糸の輸入は金又は銀の輸入よりも政府に利あり、何となれば生糸は之を精製するに金銀よりも、より多數の工人を使用すればなりと。此一條の論說極めて簡單なりと雖も、亦以て彼が金銀偏重の俗見を抜く數等の上にあるを見る可く、後のアダム・スミスの生産力本位論又はアーサー・ヤングの下民使役機會本位論と殆んど相分つ可からざる底の進歩的見地に立つを窺知せしむ。二國防に用あり。『トレード』は軍需品の供給を潤澤にす。彈藥兵器の材料は多く貿易によりて外國より得る所なり。三帝國の擴張 *Inlarging of Empire* を助成す。世界帝國若くは大領土國が再び世界に起ることありとせば、其は貿易の助けによりて作らるゝ機會の方多かる可く、陸軍によりてよりも海軍によりて此の如き大帝國は起るなる可し。こは素より大問題にして容易に論斷す可きにあらず、現に佛蘭西國王が大帝國を建てんと計劃しつゝある今日、陸軍國の望少く海軍國の望多きを一言する必ずしも無用ならじ、今日歐洲に於て大帝國を起すに方つて感ぜらる可き困難は甚だ多し。一歐洲は昔に比して遙かに人口多く、之を羅馬帝國時代に較ぶれば要害地の數甚多し。従て一君主の權力下に之を従ふると容易なら

ず。二印刷術の發明、磁石の發見による航海術の進歩等により世界各國間の交通發達し、各國民相互を理解すること進み、知識は一般に普及し、戰術戰略は相互に知られて秘密を破り、其結果として各國は戰爭に於て互格となり、粗ぼ同一の力を以て相對抗することゝなり、或一國のみ強くして容易に他國に打勝つが如きことあり得ず、従て戰爭は勢ひ長期に涉らざるを得ず、勝利を得るには之に伴ふ著大なる犠牲を辭するを得ざることゝなれり。三ゴツス民族歐洲に優勢となりし後は政體は皆ゴツス的自由政治となれり。政體は大別すれば土耳其式(即ち專制政治)とゴツス又は英吉利式(即ち自由政治)となすを得可し。兩者共に土地の所有を基礎とす、前者に於ては土地の所有權と立法權とは共に君主の手に獨占せられ、後者に於ては兩者共に君主と人民と之を共有す。蓋し所有權と立法權とは相伴はざる可からず、所有權分割すれば立法權も分割す、土地を所有するものは之を維持する爲に法律を作る權能を有するの必要あればなり。土耳其式專制政治は陸軍によりて領土を擴張維持するに適す(今日の所謂軍國主義!)。何となれば陸軍戰に於ては戰情の一消一長に應じて臨機に命令を下し得る爲めには君主は專制的なるを



要すればなり、反之英吉利式自由政治は最も海商國に適せり、何となれば人は最も自由に  
して其勞働の結果を安全に享受し得るとき、又最も勤勉なるを常とすればなり。而して  
此種の自由政治が今日に於ては既に能く確定し、人民皆自由を享受することは各國家が  
其領土を擴張するに大障碍たり。何となれば善良なる政治の下に在る人民は、其國を防  
ぐに於てより、有力なればなり、自由なる人民は國の亡ぶるによりて失ふ所奴隸よりも多  
き故に、敵の侵略に對しより、強く抵抗す。自由なるタイヤの都市は亞細亞の凡ての都會  
よりも、之に打勝つにより、多くの困難を亞歷山王に與へたり。彼は又シリシヤ戰に於て  
十一萬アルベラの戰に於て四萬人を殺したるに、自ら失ふ所は千人を出でざりしが、自由  
なるスパルタ人との戰に於ては兩軍共六萬を出でずして、彼が軍の失ふ所は千十二人な  
りき。自由の民と戰ふと奴隸的の人民と戰ふとの難易の差概ね此くの如し。以上列舉  
する所により陸上に於いて、陸軍によりて領土を擴張するの困難なること明瞭なる可し、  
然るに海上に於て大帝國を起すには此くの如き障礙あることなし。否な陸上に於て大  
帝國の起るを妨ぐる事情は却て海上に於て其を促進する原因たり。即ち世界の人口の

より、多くなることは海上帝國に取りて何の妨とならず、何となれば海上には餘地綽々た  
ればなり。各國に多き要塞は陸軍の行進を妨ぐるも海上に船の航行するに何の妨げと  
ならず、航海の技術は進み却て海上權に無限の範圍を供するに至れり。又自由政治は海  
帝國に何の妨をなさず、否海權の擴張は自由政治國と最も克く合致するなり。海上にて  
得たる勝利を持続する道は陸上に於けるとは異なる、陸上の勝利は大小の都市村落を燒却  
し人民を殺戮して統治を容易ならしむるを要す、然るに海上の勝利は却て都市を擴張し  
又は新都市を建設するを利とす。陸軍の征服は人民を驅逐するも、海上の勝利は人民の  
生命と財産とを保護して之を帝國に招致するを勉む。而して此くの如き海帝國の位置  
は島國を以て最も適せりとす。其故は、之を防禦するに一に海力によるを得ればなり。  
即ち帝國を擴張する手段を以て又た之を防禦し得るの便あり。之を要するに大帝國は  
之を陸上に起すこと難く、之を海上に起すこと遙かに容易なるの理は和蘭の實例之を證  
明して餘あり、和蘭は西班牙及佛蘭西が陸上に大帝國を打建てんと勉めつゝありたる、過  
去百年間に於て貧弱窮乏の國情を一變して國の地位高く力強き一大國となり、昔は貧し



き一漁市たりしアムステルダムは今や歐洲最大都市の一となり、其國力西佛兩國を凌ぐに至れり。而して這箇海上大帝國を起すに和蘭よりも更らに勝りて適せるは實に我英國ならずんばあらず。蓋し英國は島國にして之を護るに一の陸軍を要せざればなり。加之商人と軍人とは決して同一地にありて繁榮するものにあらず、兩者の利益は兩立すること難し。英國は大帝國たるに要する多くの大港灣を有し、其人民は勇敢にして其政體は大帝國たるにも大貿易國たるにも共に克く合へり。若し英國に一般歸化法ありて英國に於て土地を購ふ外國人を凡て歸化するを許し、英國人同様の自由を享受せしめば、英國は僅かの歳月を以て他の何れの陸軍國よりも容易に大帝國となるを得可きなりと。かくて彼は其論を結んで左の如く云へり。

*For Since, in some parts of Europe, Mankind is harassed and disturbed with Wars; Since, some Governors have inroched upon the Rights of their Subjects, and inslaved them; Since the People of England enjoy the Largest Freedoms, and Best Government in the World; and Since by Navigation and Letters, there is a great Commerce, and a General Acquaintance among Mankind, by which the Laws and the Liberties of all Nations, are known; those that are oppressed and inslaved, may probably Remove, and become the Subjects of Eng-*

*land; And if the Subjects increase, the Ships, Excise and Customs, which are the Strength and Revenue of the Kingdom, will in Proportion increase, which may be so Great in a short time, not only to preserve its Ancient Sovereignty over the Narrow Seas, but to extend its Dominion over all the Great Ocean; An Empire, not less Glorious, & of a much larger Extent, than either Alexander's or Caesar's.* 前掲書第三十一頁

歐洲の或部分に於ては人類は戦争に依て苦しめられ擾されつゝあり、或君主は其臣民の權利を侵し之を奴隷としたり、英國の人民は之れに反し世界中最大の自由を享受し最良の政府の下に立てり。航海と學問とによりて大商業起り人類相互間の親和生じ、各國の法律と自由とは能く理解せらるゝに至りたれば、虐げられ奴隷とせらるゝ人民は其國を去りて英國の臣民となる可く、かく英國臣民の數増加せば國家の力たり財源たる船舶、内國消費税、海關税は之に準じて増加す可く、其増加は短日月の間に甚だ大にして狭き海上に於ける昔よりの主權を維持し得るに止まらず、凡ての大海の上に其領土を擴張するを得るに至る可く、かくしてアレキサンダー又はケーザールの帝國よりも更らに大規模にして光榮之に劣らざる一大帝國を現出し得るに至る可きなり

彼が海帝國・商帝國の福音を説くこと實に此くの如し。彼は大陸的の陸軍國主義又たは『メルカンチリズム』舊派の夢みたる商軍國主義を斷乎として排斥し、其が時代錯誤的



空想たる所以を明かにし、英國は此の如き謬想を一掃し平和と自由を高く標榜する所の海商大帝國を以つて理想とす可きことを高唱するなり。彼が千六百九十年に於ける此理想論は、爾後二百餘年間に於て着々實現せられ、彼が先見は最も的確に裏書せられたり。此意味に於てはアダム・スミスと彼パーボンとは殆んど相分つを得ざる光榮の位地を占むるものとせざる可からず。否時代の差を考慮し又た彼が立論の根據を克く諒解するときは、彼が見識の卓越せる或はスミスを凌ぐものありと云ふ必ずしも溢美にあらざる可し。

パーボンは之に續て貿易盛衰論を述ぶ。曰く『トレード』を促進する主要なる原因は（善き政府、平和國の位置其他の便宜は勿論として）其國貧民の勤勉と富民の寛容との二者なり。寛容と云ふは貧民勤勉の結果たる産物を心身の用に對して自ら使用することを云ふ。此美德の正反對は浪費と貪慾となり。浪費は個人に取りて害ありと雖も『トレード』に取りては必ずしも然らず、反之、貪慾は其の人に取りても『トレード』に取りても均しく有害なり。富者若し相約して貪慾を張り、費やす所を極減せば、それは商業國に取

りては外國との戰爭に均しき危険たる可し。富者等は爲めに自ら富を加ふること毫も之れなくして國民を貧ならしめ、政府をして其收入を減せしむ可ければなり。寛容とは主として衣食住に關する各種費用を均一に分つことによりて實行せらるゝものにして、各人の事情に應じて適當に配當し且つ快樂にも若干の餘地を存するの謂なり。而して『トレード』を助成するに與つて最も力あるは衣食住に關するもの之れなり。就中流行即ち衣服の變遷は『トレード』を助くること大なるものあり。世に流行を非難し殊に新を追ふを咎むる人ありと雖も、如何なる風俗も一度は嘗て新流行たらざりしことなきを思へば、其非難の取るに足らざること言を俟たず、されば流行の變化は之を呪ふ可からず寧ろ歡迎す可し。住居の新營に於ける亦然り。建築は『トレード』助長手段の最要なるものなりと。彼が此の一條の議論は往々にして疑を禁じ得ざる謬見を包むものあるが如しと雖も、そは全きを責むる所以にして、予輩は却て這裡に猶且つ彼が進歩的態度の甚だ鮮明に現はるゝを認むるの外なきなり。

パーボンは、更に章を改めて『トレード』衰頹の原因を論じて、其重なるものに二ありと



せり。即ち多くの禁止と高き利子と是れなり。外國品の輸入は内國品の輸出によりて支拂はる。故に外國品の輸入を禁ずるとは取も直さず之に代へて輸出せらる可き内國品の製造と輸出とを減ずることなり。外國輸出の道絶てば内國資産の價格は下落す。從て土地の地代亦下落す。外國品の輸入禁止を主張する普通の論據は、此くの如き物を輸入して國內に於て消費するは、同種の貨物が國內に生産せらるゝを妨ぐと云ふにあり。然れどもこは誤謬にして『トレード』を惹起す所以を解せざる論なり。蓋し消費を喚起するものは必要に非ず、人性自然の必要に僅少のものを以て充さる『トレード』を喚起するものは、新しきもの珍らしきものに對する心の欲望即ち流行なり。例へば英國製の『レース』手袋又は絹を其要する丈け之を有し其以上毫も欲することなき人も、ヴェニス『レース』『ジェシミン』手袋又は佛國製の絹に逢はゞ之を購はんとす可し、英國製の『ベーコン』を食はざる者もウエストファリア産『ベーコン』は之を食はんと希ふ人ある可し。されば外國品の禁止は決して同種の英國製品のより大なる消費を意味するものにあらざるを知る可し。轉じて外國人に就て見るも其理亦同じ。新奇を求むる慾は自國

品を望まざる外人をして、英國産なれば之を購はんとの心を起さしむるなり。彼等は英國製の毛織物、帽子、手袋等を自國品よりもより熱心に求むる事あり。而して輸出入には運送の利之に伴ひ海運の盛なる國は生産品の利益以外に運賃を利するなり。或特殊品の禁止によりて利益を壟斷し得可しと思惟するものは往々にして欺かるゝことあり。禁止の結果は同種の自國品に向はずして却て趣好に變化を惹起し、其種の需要は全く消滅することあればなり。一步を譲りて或種貨物の禁止によりて自國品の消費額を増す事ある場合に於ても、そは一部産業者のみの利たるに止り國民一般は爲めに損す可し。何となれば、貿易の利たる所以は海關稅の收入によりて政府の財源を豊にすること、民間に在りては最多數の工人に業を與ふること、なり。外國品の輸入に代ふるに自國品を以てするに至れば、海關稅の收入は減じ工人に業を與ふる事亦減す可し。例へば英國より煙草又は毛織物を輸出し、之に代へてウエストファリア『ベーコン』を輸入しつゝありたるに、此輸入を禁止せんか、英國製『ベーコン』の消費高は増す可きも國民全體は損を受く可し。何となれば煙草はより多くの關稅と運賃とを支拂ふ可く、毛織物はより多



くの工人に業を與ふ可ければなり。要するに生絲、木綿麻の如き粗製品并に葡萄酒、油果實の如き嵩多きものゝ禁止は國民に損あり、何となれば前者に就ては工人の業を著しく減じ、後者に就ては運賃の收入を減ずればなり。此理は輸出入勘定の差額否輸入品の全部が銀又は金を以て支拂はるゝ場合と雖も毫も異なることなし。金銀は英國に生ぜず悉く外國より輸入を仰ぐものにして、運賃として支拂ふ所甚だ少く、之を加工するにも工人を要すること少し。故に外國品の輸入を禁じて金銀の出づるを妨ぐるも國民の損は依然たるなり。各國は皆外國貿易を如何に有利ならしむ可きかを考究しつゝあり。されば我邦にして禁止する所あれば彼亦之に應ふ可く、結局一の禁止は他の禁止によりて酬ひられて各國間の貿易は害せる可し。パルボン故に結論すらく、

To conclude, If the bringing in of Foreign Goods, should hinder the making and consuming of the Native, which will very seldom happen; this disadvantage is not to be Remedied by a Prohibition of those Goods; but by Laying so great Duties upon them, that they may be always Dearer than those of our Country make: the Dearness will hinder the common Consumption of them and preserve them for the Use of the Gentry.

who may Esteem them, because they are Dear, and perhaps, might not Consume more of the English Growth, were the other not Imported. By such Duties, the Revenue of the Crown, will be increased; And no Exceptions can be taken by any Foreign Prince, or Government; Since it is in the Liberty of every Government, to lay what Duty or Imposition they please. Trade will continue Open, and Free; and the Traders Enjoy the Profit of their Trade the Dear Stock of the Nation, that is more than can be used, will be Carried off, which will keep up the price of the Native Stock, and the Rent of the Land. 前掲書第三十七、八頁

之を要するに、外國品の輸入が國産の製造及消費を妨ぐるが如きは極めて稀有の事に屬するが、假に此れありとするも此不利益を救済する道は其輸入の禁止による可からず、之に重税を課して國産よりも價を高からしむ可きのみ、價高ければ普通の消費は防ぎ得べく、價高きを以て賞鑑し其外國品の輸入なしとして之に代へて自國品を求むることなかる可きものゝみ、之を消費するに止むるを得可きなり。而して政府は關稅の收入を増す可く、關稅の賦課は各國政府の自由なれば外國君主又は政府は之を免るゝことを得ず。かくして貿易は依然として開放且自由なる可く、商人は其貿易の利を享く可く、使用に餘る死藏資本は搬出せられ、從て國內資本の價格を維持し兼て土地地代の下落を防ぐを得可し。

パルボンの極力反對する所は絶対的の輸入禁止にして、彼れが自由貿易と云ふは後世の



自由貿易とは必ずしも同一義に非ず。彼は常に國內勞働の機會、資産の利用、地代の維持、換言すれば生産關與者一切の維持を本位として貿易の事を立論し、金銀過重論と武力侵略主義とを飽迄も斥けんとするものなり。

パーボンは貿易衰頹の第二の大原因は英國に於て和蘭其他の商業國に於けるよりも金利の高きこと是なりと云ふ。是れカルペパー井にチアイルドの既に極力論盡したる所なり。彼謂らく、和蘭の利息は三分にして英國の其は六分なり、是れ英國商人の和蘭商人に及ぶ能はざる大理由なりと。但し獨占貿易の場合に非ず、利率如何に高くも商人は必ずしも之を疾まず、之に反し諸國相競争する貿易場裡に於ては、高き利子を支拂ふ商人は常に不利益を蒙る。和蘭が世界商業の大倉庫たるは其金利安くして、貨物を貯藏するに英國よりも遙かにより安くし得る爲めなり。商人は需要と供給との調節を圖るを主要なる任務とす、價安き時は供給を差控へて他日を待つ可きなり。然るに金利高き時は商品を退藏するによりて蒙むる缺損大ならざるを得ず、勢ひ供給の差控を爲し能はず、安き價に於て投資するを餘儀無くせらる。和蘭の商人は此の點に於て英國商人の

知らざる便宜を有す。次に利子の高きは地代下落の原因となる。何となれば、利子高き爲め貿易は利潤多き業のみに限局せられ、供給の調節による利を望むを得ず、從て和蘭に比して英國は自國産を輸出する範圍甚だ狭く、國內に國産堆積する結果、之を産する土地の地代亦下落す、國産の價安ければ地代亦低からざるを得ざるは當然なればなり。和蘭の如く金利僅かに三分なれば英國と雖も地代はより確實となり、地價は從て騰貴す可きは明なり、三分の差違は極て重大なり、和蘭在住の和蘭商人は其國産を英國に賣りたる代金を自國に取寄せず、之を英國に保有して三分の餘分の利子を收めつゝあり、從て取引上常に優勢を占むるを見て知る可しと。斯くして彼は利息制限論を説き、反對論の根據なきことを明にし、兼て地代引上げ論を主張して此書の議論を結び、謂らく地代の維持又は引上げは國防上必要なりと。此論は明らかに謬見たること今言ふまでもなしと雖も、當時に在つては多少の價值なきにあらず、何となれば英國は依然として貴族即地主の國にして、又其憲法政治とは其實貴族政治のことに外ならず、貴族は國の柱石たる實の未だ存せし時なればなり。彼の最後の斷言に曰く、地價を高むるも之が爲めに他の何物の價值



も妨げられ、減ぜられ、又は變ぜしめらるゝことなし (it doth not Disturb, Lesson, nor Alter the Value of any Thing else) と。是れ或は後のリカルドを豫見するものとも見る可し、異なる所はリカルドは地主存在の根據を否定し、パーボンは地主の存在極度まで肯定するものなること之れなり。

## 第十一章 パーボンの貿易均衡論

パーボンの外國貿易均衡論は彼が幾多の議論中殊に識見の群を抜く所にして、之を殆んど其儘に今日の學說として受け入るゝを得可きものに屬せり。蓋し彼が貿易均衡論を試みたるは、ジョン・ロツクが貨幣の輕鑄は國の貿易均衡を妨ぐと主張したるを駁撃せんが爲めなり。故に其論は之を彼の貿易論に見出さずして却て彼の『改貨議』中に載せたり。彼曰く。

*The Balance of Trade, is us'd by Mr. Locke as an Argument against raising the Value of the Money; because the Balance of all Foreign Accounts, as he supposes, are paid in Money, which must be sent out to balance the Account; and let the Value of it be what it will that is set upon the Money, it will go for no more in Foreign Countries, than according to the quantity of Silver that is in it.* 『改貨議』第三十五頁

ロツクは貨幣價值の引下げに反對する一論據として貿易の均衡を擧げて謂らく、對外勘定の差額は貨幣によりて支拂はれざる可からず、此貨幣は決済用として國外に搬出せらるゝなり。今此貨幣の價值を國內に於て引上げたりとて、一度國外に出づるときは何の効もなく其含有する銀量丈けに通用するに止る可し。

是れ一般に行はるゝ説なれども、明かに誤謬なり。There is no such usage as Balancing the Foreign Accounts of Merchants, by the Money of a Foreign Nation 商人の對外勘定を外國貨幣によりて決済するが如き慣例あることなし。假りに在りとすれば、そは却て貨幣價值引上げを主張す可き最大なる論據たる可きなり。普通貿易の均衡と稱するは外國品の輸入と國産品の輸出とが相均しきことを意味せり。而して輸出が輸入に超過するとき之を貿易均衡上の利益と唱ふるなり。其理由は超出額丈けは地金又は貨幣となり



て輸入す可く、其額多きほど國利大なりと云ふにあり。然れどもこは金銀を以て唯一の富なりとする謬想に基く誤見なり。此誤解に基きて主張せらるゝ貿易均衡説なるものゝ根據果して如何。先第一に如何にして一國の貿易均衡又は差額なるものを知り得るや、事實上之を知るの道一も存せず全く一の空想たるに過ぎず、假りに其を知悉し得るとするも其利は果して何なるや。超出額丈けは地金にて支拂はるゝにより國は利すと云ふは全くの誤謬なり、金銀も他物と均しき一商品たるに過ぎず、銅の百磅と銀の百磅とは其間何等の徑庭なし。國の富むは金銀の額のみによるにあらず、其人民に衣食を供する職業の多きによるなり。For every man that works, is paid for his time; and the more there are employed in a Nation, the richer the Nation grows (勞働する者は其の價を受く一國に使備せらるゝ人多ければ多きほど其國は富む) 而して一切の外國貿易の根源は其國自産品にあり The foundation of all Foreign Trade is from the Native or Staple Commodities of each Country 故に消耗品を多く輸入する貿易は不利なりとし従て Whether a Nation gets or loses by any particular Trade, from the difference that each Nation consumes in the perishable

ble Goods of each Country なりとするは取るに足らざる謬想にして、輸入品の耐久的なりや否やは毫も其利不利を定むるものにあらず、唯だ之によりて國民に業を授くる機會の多きや否やを問ふ可きのみ。故に曰く There is but one infallible Symptom to know when Trading Nations thrive and grow rich; that is, when the Inhabitants grow more populous; when they enlarge and new-build their Cities and Towns; and when they increase their Ships and Naval Strength 『改貨議』第五十一・二頁。猶パウア(商國繁榮富有の唯一の誤らざる兆證は其人口の増殖是れなり、人口増加し大小都邑を新建し船舶と海軍力とを増加することこれなり)と。バーボンは其章の終末 同書五十九、六十頁 に自家立論の要領を繰返して左の如しとせり。

- 一 商國の富むは貿易と其人民の産業とによる。一國の自産は決して盡くることなし。
- 二 何品と雖も其輸入を全く禁止す可きに非ず。貿易自由なるほど國は榮え富むなり。
- 三 一國の貧富は外國品を消費するの多少によるにあらず、又消費品の價値の差違によるにあらず。



- 四 貿易の均衡てふ思想は之によりて一國の得可き利益を算出して、其貿易調節の目安となし得るが如きものにあらず、反て貿易に關する總ての議論に累する無用の觀念なり。
- 五 一國に貿易の均衡なるものありとするも、それは決して貨幣流出入の原因たらず。貨幣の流出入は各國間の地金の價値の差違に基く。即ち爲替に依るよりも貨幣現送の方商人に利あるとき出入起るものなり。
- 六 爲替手形は又殘高勘定の支拂に充つる爲めに貨幣又は地金の搬出せらるゝ機會あることなし。
- 七 爲替手形又は殘高勘定の價値の各種の貨物は手形額に應じて足り勘定を決済するに於て貨幣に異ならず。

と、彼が貿易均衡の俗説を徹底的に放擲し、外國貿易の真相を道破すること實に斯くの如きなり。之れをフォルトレーよりヤラントンに至る『メルカンチリズム』論者の一群と對照するときは、英國の經濟思想が僅々數十年の間に偉大長足の進歩を爲したること亦た予輩の絮説を要せざる可し。之れと同時に抑も英國の國を建つる根柢に溯つて狹隘にして排他的なる商軍國主義 Shopkeeper's point of view の漸くに廢れて、更らに廣き立

場、更らに高き見地に立てる大海帝國の理想の徐々に熟し來たることを認めざるを得ず。此の傾向はダドレー・ノースによりて更らに繼承せられ擴張せらる。次に章を改めて之を叙説せん。

## 第十二章 ノースの經濟學說

パーボン『貿易論』刊行の翌千六百九十一年匿名の一學者同じく一篇の貿易論并貨幣論を著して、更らにより多く進みたる思想を開陳したり、此書はアダム・スミス以前に於ける最大の自由貿易論と稱せらるゝものにして、其の著題は左の如し。

Discourses upon Trade; principally directed to the cases of the Interest, coinage, clipping, increase of Money. London; Printed for Tho. Basset, at the George in Fleet-street. 1691.

全篇十頁の序文、二十三頁の本文、五頁の追録より成る一小冊子にして、序文は著者某氏よ



り刊行の事を依託せられたる友人の手に成り、著者の此書に對する用意を詳密に紹介せり。著者が自ら名を著けざる理由として序文者の記する所は左の如し。

The Author is pleased to conceal himself; which after perusal of his Paper, I do not ascribe to any Diffidence of his Reasons, the Disputes of Great Men, nor overmuch Modesty, which are the ordinary Inducements for lying hid; but rather to avoid the Fatigue of digesting, and polishing his Sentiments into such accurate Method, and clean Style, as the World commonly expects from Authors: I am confident he seeks only the Public Good, and little regards Censure for the want of Neatness, and Dress, whereof he seems to make a slight account, and to rely wholly upon the Truth, and Justice of his matter, yet he may reasonably decline the being noted, for either a careless, or an illiterate Person..... Wherefore I cannot but excuse our Friends's Retirement, and shall take advantage of his absence so far, as to speak of his Discourses with more freedom, than I verily believe his Presence would bear.

著者は自己を匿くすを欲す、予は彼の稿本を一讀して其理由は普通匿名の理由たる自己の主張を立つるに勇を缺く爲めにあらず、顯要の人々を嫌ふが爲めにあらず、または過度の謙遜の爲めにもあらざるを知る。彼が理由は世間が普通書物の著作者に期待する如き精密なる方式と、簡潔なる文體とに自己の思想を咀嚼し洗練するの勞を厭ふが爲めなり。予は信ず彼

は唯公共の利益を念とするものにして、文を練り體を飾るが如き事を一些事と做し、之れを缺くが爲めに非難を被むるを意とせず、一に全く自説の眞理と正義とのみに重きを置くものなるを。唯だ世間が彼を目して輕卒なるまたは無學なる者となさんことを欲せざるは道理あることなり。(中略)故に予は彼が名を匿くすを看過せざる能はず。而して此の匿名たることを利用して彼の面前に於て言ひ得るより、多くの自由を以て彼の書に就て紹介するところあらん

と。以下數頁に涉りて著者の文體に就いて論じ、學究的に第一第二第三其又小別等を施すの愚を説き、更らに著者立論の方法及び態度に論及して、著者はベーコン及デカルトによりて立てられたる新哲學的方法、即ち實證方法によるものなることを詳論す。獨逸及日本に在りては往々にして類似の例を見ることなきにあらずと雖も、英人の著書にして僅々二十三頁の本文に對し十頁の序文を添ふるが如きは極めて稀なり。而して實は其序文も著者自らの筆に成るものにして、他人代て辯ずと云ふが如きは世間を欺く一手段たるを知るに及んで、吾人は啞然たらざるを得ざるなり。著者は本文の議論に何等關係なき文體論哲學論を某人の口に假託して序文に試みたるは何の必要ありてのことなり



や。此疑問の解決は總て本書が一種特殊の事情の下に作られたるものなるを明かにするものなり。

匿名の著者も序文の筆者も共に當時英國の政治界に甚だ顯要の地位を占めたる而してジェームス二世、財政大困難の時に突如として身を實業界より轉じて事實上の大藏大臣となり、能く財政整理の大事業を遂行し、國難を未然に救ひたる大手腕家サー・ダドレー・ノース其人なるなり。彼の兄フランシス・ノース即ちギルフォード卿は内大臣としてチアレス二世及ジェームス二世兩朝に歷仕し、英國の政治史上忘る可からざる人なり。此人決して悪人にはあらざりしも其性格堅固ならず、政治上の操守高からず爲めに國に累を及ぼせること尠からず。弟たるダドレー・ノースも其聰明其機智其手腕に於てはマコーレーが評して *one of the ablest men of his time* *Macaulay, History of England, Ch. IV. Trauhnitz edition Vol. II. p. 89.* と云ふ如くなり、雖も其標置高からず切りに政治上に榮達を求めて已まず、一度事實上の大藏大臣として一世に時めきしも、一朝スチュアート朝の顛覆に遇ひて榮枯所を替ふるに至りしかば、更に其著述によりて新朝に容れられんことを欲したりしなり。是彼が單に貿易

貨幣の事に通曉するのみならず文學哲學の造詣亦深きを示さんが爲めに長文の序文を添へたる主たる理由なり。ロツシアー評して曰く

*Sonst hat mein College und Freund, G. Harlstein, gewiss Recht, wenn er aus der obigen Stelle, die allerdings viel Eeteregenes zusammenwirft, den Schluss zieht, das North in der eigentlichen Philosophie nicht eben zu Hause gewesen. Seine im Orient und in Handelsgeschichten hingebende Jugend wird ihm an dergleichen Studien verhindert haben; und es ist nicht so, dass er durch anscheinende Brillensheit dies verdecken wollte. Roscher, a. a. O. S. 92. Anmerkung.*

此の言聊か酷に失せり。ノースが公人として操守堅からず見識高からざるは甚だ惜む可き所なりと雖も、此一點を以て彼の哲學の造詣を否認せんとするは過なり。英國は少くとも其大なるベーコンに於て、人として甚だ下劣なるも學問に於て甚だ深奥なり得る一例を有するにあらずや。否獨佛哲學者にも類似の例は絶無にあらず。

ノースの一生は甚だ傳記的なり。彼の弟 Roger North (是れ又た一の經濟學者なり) は其兄内にせり、即ち前者は *Life of the Right Hon. Francis North, Baron Guilford, Lord Keeper of the Great Seal etc. 1742. (2. E. 1838.)* 後者は *Life of the Hon. Sir Dudley North etc. 1744.* 是れなり、マコーレーは其 *History*



of England Ch. IV. 千六百八十五年條下に於て稍々詳しくノースに就て論述せり Trench. 彼は千  
 nitz Edition Vol. II. pp. 88-90. を見よ Dictionary of National Biography にもノースの傳を收む 彼は千  
 六百四十一年に生れ、幼にして身を貿易に投じスミルナ、コンスタンチノープル等に居住  
 し、二十一歳にして既にコ府に於ける英國土耳其會社有數の一人たりしと云ふ。年四十  
 にして英國に歸り、千六百八十五年ジェームス二世登極後の財政紊亂に際し、新稅を起す  
 大事業を託せられ其業を成し遂げたり。マコーレー記して曰く『彼は幼にして小亞細  
 亞に赴き商業に従事せり。多數の人は此の如き境遇にありては自己の修養の荒むに任  
 すなる可し。スミルナ、コンスタンチノープルには讀む可きの書少く交る可き良友に乏  
 し。然るに彼は境遇に支配せられず外部の助けを待たず、自己の絶倫の精力を以て獨り  
 退いて貿易の哲理に念を潜め、終に百年の後アダム・スミスによりて唱道せられたる所と  
 實質に於て同一なる完全にして敬服す可き學說を考へ出せり。其倫敦に歸りて土耳其  
 貿易商たるや、彼が商業の問題に關して有せる學理上及實際上の深き知識と、其自說を説  
 明するに透徹的にして英氣潑刺なる直ちに政治界の認むる所となれり。政府は又彼に  
 於て聰明なる忠言者と、而して唯々諾々躊躇する所なき奴隸とを見出せり。何となれば

彼が稀有の天稟は放逸なる主義同情なき心腸と結び付きあればなり』同上八十九頁と、  
 大意を意譯す  
 更に彼が議會に於ける行動を叙しては曰く『古き議員等は議員となりて未だ二週間を  
 經ず、其生涯の大部分を外國に暮したる此人が、大藏大臣の一切の職務を深き自信を以て  
 擔任し、而して巧みに之を處理して過る所なきを見て、驚愕の眼を張れり。彼の立案は採  
 用せられたり、而して王室は英國々内のみより約百五十萬磅の純收入を得るに至れり。  
 此くの如き收入は平和の時に於て政府を支ふるに用ゐて餘ある所なり』と。同上書  
 九十頁  
 ノースは其『貿易論』一篇の主張たる自由貿易論が破天荒の新說にして、時勢に先だつ  
 遠く、從て世人之を喜ばざる可きを慮り、其書に名を表はさず、他人の依託によりて刊行す  
 るもの、如く裝へり、而も其眞意はスチュアート朝崩壞後の新時代は自由と財産の保障  
 とを主義とする革命時代なれば、彼の主張たる自由貿易主義は必ず其時代の思想となる  
 に至る可く、然らば其の唱道者たる彼は必ず再び時の寵兒たるを得可しと思惟したるも  
 のなるが如し。然るに彼の憂慮の的中したると共に彼の豫想は全然外れ自由貿易説の  
 容れられざるのみか、保護特惠の舊思想は依然して渝らざりき。是れ即ち此『貿易論』の



一書の忽然として跡を絶ち、爾後殆んど人間に傳存せざるものと考へらるゝに至りし原因なる可し。恐らくノースは自説の容れられざるは勿論、終には其自由貿易論の爲めに一身上に累を被る可きを恐懼して版本を破却したるなる可しとのことなり。ホランダ一は其『重刷叢書』の解題に於て曰く

*It is doubtful whether the Essay, as originally printed, received any attention or served any use. For a considerable period, indeed, it was supposed to be entirely lost. Writing in 1744, Roger North intimated that the tract was designedly suppressed, and declared "it is certain the pamphlet is, and hath been ever since, wholly sunk, and a copy not to be had for money. Introduction p. 1.*

と、兎にも角にも彼は明哲保身の道を解したる者の如く、オレンヂ・ウキリアム侯の即位の後、に於ても、他の多くの論客志士の如く亡命の客となることなく、兄ギルフォード卿の子女の保育と自家蓄財の業とに惠念して無事に晩年を送れりと云ふ。斯くして此英國經濟學史上の一大産物は永く世に忘れられ、爾後百年全く其跡を絶てり。然るに十九世紀の初頭英國經濟學の盛を極め、國法の存否に關聯する自由貿易可否論の喧しきや、彼の弟ロージアの残せる彼の傳記中に載せたる此書に關する記事は熱心なる學者の注目す

る所となり、自由貿易論の陳吳たる此『貿易論』を尋討する者あり、終に有名なる弄錢家ルーデングの藏書中に一本を見出し、千八百二十二年エヂンバラに於て之を翻刻するものあるに至れり。此 1623 版本（予之を見るを得ず）は Toml Murray の寄贈によりてリカルドの手に如き正しき説を有したる人ありとは予の思ひ設けざる。其發見者翻刻者の誰なるかは詳ならず、ホランダ一はマカロツク即ち其人なる可しと云へり。前掲書解題。マカロツクはボンたるも、其著者のパーボンなることを知らず、然るに此 續て千八百四十六年再刻あり、ホランダ一は是れ又たマカロツクの力によるものなる可しと云へり。予は此の版も亦た見ざれ見たることを明 肥す、p. 10, 11, 23. 千八百五十六年にはマカロツクは此書を其『商業稀觀書』中に收めたり此書も亦た流布の本甚だ少し予は幸に 左右田博士架上の其書を見るを得たり。ホランダ一は千六百九十一年版の原本を其『重刷叢書』の一として千九百七年に印行したれば、吾人は遺憾なく其惠に浴するを得るなりさてノースの『貿易論』は長き序文に續て第一『利息引下げ論』 *A discourse concerning the second [貨幣論] A discourse of coined money* 第三『追録』 *Postscript.* の三部よりなる、彼は序文に於て自家主張の要點十三箇條を掲ぐることを左の如し。



- 一 貿易の上に於ては全世界は猶ほ一國一民の如く各國は猶ほ國中の各人の如きのみ。
- 二 或一國と一國との貿易の廢滅は單に其國貿易上の損たるに止まらず全世界貿易に取りての損失なり。何となれば世界の貿易は合して一體たるものなればなり。
- 三 如何なる貿易と雖も公共に不利なるものあることなし。何となれば或貿易が眞に不利なりとせんか人々は自ら之を已む可く、而して貿易商の繁榮するは必竟其屬する全體たる公共の繁榮たればなり。
- 四 或人々を強制して一定の制限の下に貿易を營ましむるは或は其人々を利することあらんも公共は之によりて利する事なし。何となれば是れ國中の一方より奪ひて他方に與ふるに外ならざればなり。
- 五 如何なる法律を以てするも貿易上價格を制定する事能はず、價格の率は其れ自ら成るもの又は成らざる可からざるものなり、故に此くの如き法律は多ければ多きほど貿易に害あり。
- 六 貨幣は一の商品に外ならず、從て一國に存する貨幣には不足の生ずることあると共に、又た過剰の起ることあり、其過剰は國の不便たること亦た之れあり。
- 七 一國民は日常の取引に要するだけの貨幣を缺く能はざると共に其の以上は之を要せず。
- 八 單に貨幣を多く得ることは富と同じからず又對價を以て購ふの外貨幣を得る道なし。

九 自由鑄造の制は絶えず貨幣の鑄解改鑄を促がし、之によりて公共の費用を以て金銀治及鑄造業者を養ふ所以に外ならず。

十 貨幣の輕鑄は相互を欺く所以にして公共に取りて何等の益なし。貨幣は固有以外の性質又は價值あるを許さざるものなればなり。

十一 貨幣の輕鑄は參和物によりてなすも重量に於てなすも其作用異なることなし。

十二 爲替は輸送逆送の費を省くの外現金輸送と何等異なる所なし。

十三 貿易によりて輸出する貨幣は其の國の富を増す所以なり、之に反し戰爭に費し又外國に於て支拂ふ貨幣は其れ丈け國を貧くす。以上前掲書序文十三、十四兩頁

ノースは以上を綜括して謂らく「要するに一部の貿易又はは利益を特惠して他のものを抑ふることは一の曲事たり又た公共の害なり、此の理は多くの人之を珍奇と感ずること其眞理たると度合を同うす可し」と、而して彼は此理を一の『パラドックス』なりと云ふ、其意は世人が意外と感ず可き眞理なりと云ふにあり。

前掲書十四頁、With many other like Paradoxes no less strange to most men than true in themselves. Roscher (n. n. O. S. 86) Das Auffallende seiner Lehre von der Handelsfreiheit war ihm klar, er nennt sie "Paradoxen, nicht weniger fremd der meisten Menschen, als wahr in sich selbst. Desshalb fingirt er auch aus Vorsicht, als wenn sein Buch von einem Freunde verfasst, und von ihm nur herau gegeben worden.



『利息引下げ論』は法律を以て利息を制限するの不可能なるを立證するを趣意とし、其の爲めに利息の本質に關し頗る卓越の説を下せり。先づ利息引下論の論據として世上に主張せらるゝものを列擧して三種ありとす。一 利息低き時は貿易は獎勵せられ商人其惠に浴す、利息高き時は金貸業者又は貨幣の所有主一切の利益を壟斷す。二 和蘭に於ては利率低きが故に貿易は英國よりも廉價にして英國は之と競争する能はず。三 利息高き時は地價下落すと。是れ實に前述の如くカルペバー及チアイルド以降繰返して主張せられたる所にして、パーボンも亦粗ぼ同様の説を有し、殊に利子高き時は地價下落するの理は彼が極力主張する所なり。第九章以下を見よ然るにノースは謂らく、論者の主張する事實其ものは眞實なる可し、然れども其原因は彼等の思ふが如きものに非ずして、利子法定引下げ論に寸毫も根據を與へず。今一切の論辯を評論するの煩を省き、其中心問題たるものゝみに就て論ず可し。即ち政府は法律を發布して百分の四以上の利子を取ることを禁ず可きや、又は利子の率は全然貸借兩當事者の取引に放任す可きや是れなり。今此問題に答ふるには先づ貿易の性質より考へ始めざる可からず。貿易とは必竟剩餘

と剩餘との轉換を云ふものなり。予は予が剩るものを汝が剩れるものに代へて與ふる是貿易なり、國に就ても都會に就ても此理に二ある事なし。而して此貿易に於て最大の利を占むるものとは最も勤勉にして最多額の物を生産又は製作する人にして、此人は又た他人他國の産物を最も多く得る人たるなり。彼は缺乏より自由にして最も多くの便宜を享受し、從て眞に富める人たり。Foscher (C. u. O. S. 87) は此一節を以てノースの富に對する唯だ行論の順序として之を言へるのみ、Foscherのノース評論は全體を通じて此種の淺薄なる解説を下す所多し、予は與する能はず。金銀又は之に類するもの一も之を有せざるも、其富者たることに於て何の妨なきなり。但金屬は多くの用途に必要にして他の産物と同じく世界の産物たり、就中金と銀とは其性の美なると其量の少きとにより價貴く、而して容易に腐朽せざるにより、又運搬に便にして少量を以て高價なるにより、貨幣として廣く用らるゝものにして、其貨幣たるは法律の力によるにあらず（パーボン説と比較せよ）。個人も國家も都市も其消費する所より生産する所多く、此の剩餘を後世に傳ふるによりて富有を致す、剩餘を後世又は他人に移轉するには金銀の貨幣を以てすること普通なり。一方に富者あれば他方に貧者あり、貧富の區別茲に於て起り



自己の使用し得る以上に土地を有するものあり貨物を有するもの生ず。土地を多く有する者は自己所要以外のものは之を他人に貸し、貨物を多く有する者は之を貿易場裡に出す。土地を貸すものは地代を收め貨物を賣出すものは其價を收めて餘裕の富を作る。二者は其理に於て異なることなし。而して耕す可き土地を有する人の數よりは土地を耕す可き人の數は多く、資本を有する人の數よりは資本を求むる人の數は多し。他方には國如何に富むとも其所有する資本を自ら運用するの才能を有せざるか、又は其勞を厭ふ人の手に資本の多く存することを免れず。此等の人は土地を多く有するものが地代を收めて之を他人に貸與ふる如く、其有する資本を他人に貸して報酬を收む可し。此報酬は即ち利子なり。利子とは資本に對する賃貸料なること、地代が土地に對する賃貸料たると毫も分つ所なし。多くの國語に於て金錢の貸付も土地の貸付も同一語を以て言ひ表はされ、英國にても地方によりては又た然るを見て知る可し。即ち Landlord たる Stock-lord 此語を造り得て甚だ巧妙ならずや たるると其間何等軒輊する所なきなり。唯だ地主が金主に勝る點は、借地人は其借地を任意に運び去ること能はず、借金人は任意に其借錢を持去り得

る一事にあるのみ。是金錢の貸付は土地の貸付よりも危険多く、利子は地代よりも其率高からざるを得ざる所以なりと。ノースの炯眼は最近の學說の漸くにして到達せる所を看破したるものにして、アダム・スミス以後殊にリカルド以後の謬説は毫も彼に見ることを得ず、土地も資本も同一のものと見、利子も地代も均しく財産の使用を他人に許して收むる賃貸料なること、而して土地と資本との唯一の差別は、其動性不動性の別にあることを明言す、卓見敬仰の外なきに非ずや。

彼は更に論歩を進めて謂らく、穀物、羊毛其他の貨物は其量多きほど價安く、買手の要するより市場に提出せらるゝ分量多きほど價格下落すると均しく、金錢の借手よりも貸手多き時は利子は下落するなり。されば普通主張せらるゝ如く、利子安きが故に貿易榮ゆるに非ず。貿易榮え國の富増すによりて利子は下落するなり。論者曰く和蘭に於ては英國に於けるよりも利率低しと誠に然り。其然る所以は、和蘭は英國よりも資本に富むが故なり。和蘭の利率低きが故に和蘭は富めるにあらず。和蘭に於て利率を制限する法律を發布したるを聞きしことなし。今日和蘭商人間の利率は六分を普通とす。元よ



り三分又は四分の利率を見ることありと雖も、其は抵當品ある場合のことにして、而も個人相互の約束によりて爾く定めらるゝものにして、嘗て法律又は強制によりて然りしことあるなし。貸借に二種あり。一 對物貸借 二 對人貸借之れなり。兩者は決して混同す可からず、對物貸借の利率を對人貸借に期待するは誤なり。又た商業用の貸借と自己の奢侈の爲めにする貸借とは同一視す可からず。事實に於て利率低きは貿易を促成するよりも却て奢侈を助長する傾あり。貧き商人は其資本乏く又は皆無なる爲め、富商より掛にて物品を仕入れ、之に對し事實上五分、六分、八分、否一割、一割二分の高利を支拂ふものにして、如何なる法律も之を禁じ又は救済する力を有せざるなり。即ち利息制限の法律は此種商人に何の利益をも與へず。或は云はん、掛買を廢して利附貸借によらしむ可しと、然れども政府にして特に其元本を供給す可き制限を設けるにあらざれば、其は言ふ可く行ふ可からざるを奈何せん。

斯くの如く利息の制限は寸効あるなく、貸借當事者をして各其事情に従て任意に取引するに放任するの最善なることを知る可し。是實に論者が常に模範として推稱する和蘭の執る所の方法なり。國にして榮え且つ富む限り金利は安かる可く、反對に衰へ且つ貧しきときは金利は高かる可し。此鐵案は何物を以てするも變更するを得ず。政府は地代を制限し得ざる如く金利も亦制限するを得ず。必ず何等かの方法によりて法網を潜るもの生じて害を醸すのみ if you take away interest, you take away Borrowing and Lending 殊に利子制限の爲め地主が抵當借をなす能はず、其所有地を賣るの外なく、其結果地價の下落を來たす可く、商人は資本を借り得ざるが爲めに其業を廢するか、又は掛買をなすの外なきに至らんと。是れ彼が極力法律を以て利子の引下げを實現せんとする説を斥け、利子の低減は唯だ國富の増加従て貸付資本の増加によりて之を實現し得可きのなりと主張する所以なり。カルペバー又はジョン・ロツクに比しノースの意見の遙かに進歩的なることは今絮説を須ひず。

『鑄貨論』は『メルカンチリズム』の宿説たる鑄貨充實論を痛切に排撃し、國內に於ける金銀貨の分量の如きは特に懸念を要すに及ばず、一に貿易の大勢に任す可きものなりとの自由説を主張するものなり。ノースは其結論として左の如く云へり。



That Laws to hamper Trade, whether Foreign, or Domestic, relating to money, or other merchandizes, are not ingredients to make a People Rich, and abounding in Money, and Stock. But if Peace be procured, ease of Justice maintained, the Navigation not clogg'd, the Industrious encouraged, by indulging them in the participation of Honours, and Employment in the Government, according to their Wealth and Characters, the Stock of the Nation will increase, and consequently Gold and Silver abound, Interest be easie, and Money cannot be wanting. 前掲書三十三頁

外國又は内國の貿易を貨幣又は其他の商品に關係して抑制することは、決して國民を富ましめ貨幣と資本とを充實せしむる要件に非ず。之に反し平和を保ち正義を維持し航海を防害せず、産業者を獎勵して其の富と性格とに應じて名譽と政府の公務とに與からしむるときは、國の資本は増加し、從て金銀充實し利率は低下し貨幣に不足を告ぐることなきに至る可し。

彼謂らく、金銀は其の稀少なるが爲め、少量にて價貴く又た之を運搬し保管するに容易なる爲め、世界に於て人と人との取引一切の共通の尺度となりしものにして、而して此便利を更に増さんが爲に、一々其目方と品位とを検するを省く方法として鑄貨の制起れり、かくて世界の貿易は甚だ容易となり、凡ての取引は貨幣あらば用を便するに至れり。故に

物を賣るは即ち貨幣を得ること、同一事と看做され、之を得ざるものは物の賣れざるよりも貨幣の不足なる爲めなりと思惟し、貨幣の不足を訴ふるの聲喧しきこと、なれり。然れ共實は貨幣の不足なるにあらず其原因は他に在るなり。今其理を明らかにせんに、人あり其財産を悉く貨幣又は金銀塊に換へたりとせよ、彼は爲めに毫も富を増さず否却て貧しくなるなり。財産は貸付土地にせよ、貸付貨幣にせよ、商賣用品にせよ、凡そ如何なる態にありとも増殖す可き状態に在る人が富者たるなり。然るに凡て現金に換へて之を退藏するときは富は毫も増殖せず却て減じ行く一途あるのみ。貨幣の不足を訴ふる人に就て見よ。先づ乞食は如何、彼は貨幣を乞ふも其は之を退藏せん爲にあらず、之を以て『パン』を買はんが爲なり、即ち彼は貨幣を乞ふに非ず實は『パン』を乞ふものにあらずや。農夫は如何、彼が貨幣の不足を訴ふるは貨幣多ければ彼の産穀が良き價を以て賣らる可き爲にあらずや、彼の求むる所實は貨幣にあらずして價格なり、彼が高き價格を得る能はざるは、決して貨幣不足の爲に非ず。其原因は凡そ三あり。一 國中に穀物並に貨物多くして賣らんとするもの買はんとするものに超過する爲め、二 戦争其他の事變に



より運送不安なるか、又は禁止せられ爲めに普通の販路の制限せらるゝ爲め 三貧乏其他の事情により消費減少し、從來の需要以下に落つる爲め是れなり。此等の原因は鑄貨を増加したりとて之を除却すること能はざるは明なり。貿易の上に於て金銀は他の商品と何等異なる所なきものにして、其剩れる者より取りて缺く者に供給するに外ならず、勤勉なれば富み怠惰なれば貧に落つ、如何なる政策も之を左右すること能はず。此理は極めて簡單明瞭なるに拘らず、之を解する者甚だ少く、却て人爲的に法律の力を以て貿易の持來せる一切の金銀を國中に止め得、從て富國たり得可しと思惟するは甚しき謬想にして、富國の道を妨ぐるること大なり。手近き例を取りて考へ見よ。一都市に於て法律を以て一切金銀の搬出を禁じたりとせよ、其都市は賣るのみにして買ふ能はず、其結果他の都市は此都市と一切の取引を斷念するに至り、其都市は孤立して一切他都市の富を得る能はず、自己の産物も之を賣る能はざるに至るや必定なり。是れ奢侈禁止法律を存する國の概して貧しき眞因なり。又た外國貿易のみ國を富ますとし内國商業は然らずと爲すも誤れり。外國貿易の繁昌せんには必ず内國商業あるを要するなり。貨幣制度を圓滿

に行はんには鑄造局あるを便とするは勿論なれども、之れなくとも其國にして富む限り、其要する貨幣は之を得ること難しとせず。之に反し必要以上に貨幣増加するときは、其價值は地金と同様たる可く從て鑄解行はる可し。鑄造局ありとも之を妨ぐることは能はざるなり。

ノース乃ち曰く、

*Then let not the care of Specifick Money torment us so much; for a People that are rich cannot want it, and if they make none they will be supplied with the coin of other Nations; and if never so much be brought from abroad, or never so much coined at home, all that is more than what the Commerce of the Nation requires, is but Bullion, and will be treated as such; and coined Money, like wrought plate at second hand, shall sell but for the Intrinsic.* 前掲書第二十九頁

然らば正貨に關する憂慮を以て吾人を惱ましむること勿れ、國民にして富む限り決して正貨に事缺くことなかる可ければなり、自ら一の正貨を鑄らずとも他國は其鑄貨を我に供す可く、又外國より輸入し自國に於て鑄造する所如何に多くとも、國の商業が必要とする以外のものは、單に一の地金たるに過ぎずして地金としてのみ取扱はる可く、鑄貨は金銀製作品と同じく唯だ其地金の價を以て賣らるゝに過ぎざる可し



而して彼は更に其の『追録』に同一の問題を再説し Plenty of anything makes it cheap の理に基きて徒らに國に金銀を蓄積するの愚を鳴し、且つ曰く『貨幣は常に何人かに所有せられんことを欲するも施を求むる乞食の如くに來らず、必ず對價を提供する人の來り購ふを待つ』 Money will always have an Owner, and never goeth a Begger for Entertainment. 貨幣は海水の如く干満あり或は餘り或は足らざることあり、而も其干満は必ず自からの作用による、決して政治家の力を藉るものに非ず、又之を輕鑄し參和金屬を多くするときは其價は必ず之に準じて下る可く、變ずる所は唯名目のみ、其實價に至ては何人も人爲を以て左右すること能はずとして、結論すらく Thus we may labour to hedge in the Cuckow, but in vain; for no people ever yet grew rich by Policies; but it is Peace, Industry, and Freedom that brings Trade and Wealth, and nothing else. (斯て吾人は郭公を圍ひ込まんとして如何に焦慮するとも其は徒勞なり、如何なる國民も政略によりて富有を致せることあらず、國に貿易と富とを齎らすものは平和産業自由あるのみ、他に何物もあることなし) と。彼が商軍國主義と謬れる金銀過重論とを斥けて、自由にして公明なる海商帝國の爲に萬丈の氣を吐くを

見ずや。憾むらくは大言俚耳に入らず、這個自由進取の福音は全く時人に忘れられ、百年の後ヒューム起リミス出でて再び新たに之を唱道するまでは寸毫も顧みられず、ホンダーが彼の書を評して of interest rather than of influence 前掲書解と云へる言全く中れり。學説の顯晦は眞乎學者に取りての第一事たらざるは言ふまでもなし。然りと雖も切に聞達を求めて已まさりし彼ダドレー・ノース其人にして、一世に傑出せる其大思想が這般の運命に陥れる、其心事憐む可く又た悲む可きにあらずや。

—以上『經濟論叢』自第一卷一號至第三卷五號掲載—

### 第十三章 商國主義の終末。新趨勢起る

ヒューム以前の英國經濟學はベテ、ロツク、バーボン、ノースの四人者を以て其頂點に達したり。而してバーボンとノースとは主として英國の經濟生活の實際に論據を置き、其國の大本たる商國主義の理想を最高點まで引上げたるものなり。ベテを代表者と



する政治算術家の經濟論とロツクを師表とする哲學者の經濟學とは更らに之に馳せ加はり、茲に英國の學問としての經濟學の基礎を置きたり。ヒュームは乃ち斯く置かれたる基礎の上に、眞乎獨立の學問たる經濟學を築く可く第一手を着けて之をアダム・スミスに引渡したり。見去り見來つて回顧すれば、英國經濟學の由來も亦久遠なりと云ふ可く、大陸の學者が各其國に偏して或は伊太利を以て或は佛蘭西を以て經濟學の祖國なりと主張するの必ずしも猝かに信す可からず、吾人は少くとも右二國と同一の程度に於て英國は昔より經濟學の鄉國なりし事實を認めざる能はざるものなり。而してペテリ及びロツクと共に我がパーボン並にノースの所論を取つて之れを佛伊は勿論、蘭獨西等の同時代の學者の何れに比するも遙かに一頭地を抜くものあり、英國經濟學が國內一等の優秀なる人材を抱擁せしことの、必ずしもヒューム、スミスの時代に始まるにあらざること亦た之を否認するを得ざるなり。

パーボン及ノース出でて後の商國主義經濟論は、幾十の學者によつて繼承せられたりと雖も、其識見の透徹に於て其見聞の該博に於て能く此二人の右に出づるもの一人も之

れあることなきは、恰かも政治算術に於てはアーサー・ヤング出づるまではペテリの上に出づるものなく、哲學者中にてはパークレー出づるまではロツクを凌駕するもの之れなきに同じ。

ノースに少しく後れて出でたるものにチャーレス・ダヴナンあり。千六百五十六年に生れ千七百十四年に死す、ダヴナンは縉紳の家に生れ高等の教育を受け屢々出でて下院に議員となり、又朝に入りては消費稅務官たり。後擧げられて輸出入總監となる。而して一世著述する所甚だ多し。其大部分は千六百九十五年より千七百十二年の間に公刊したり。千七百七十一年サー・チャーレス・ウヰットウォースなる人其一切を編纂して全集を刊行す。題して *The political and commercial works of that celebrated writer Charles D'Avenant* と云ふ。此書慶應商大兩圖書館及予に藏本あり。書中重要なるもの凡そ左の如し。

1. *An essay on ways and means of supplying the war.* 1695.
2. *An essay on the East India trade.* 1697
3. *Discourses on the public revenues and of the trade of England.* 1698.



4. An essay on the probable methods of making the people gainers in the balance of trade. 1699.
5. Essays on the balance of power, the right of making war, peace and alliance; universal monarchy. 1701.
6. A picture of a modern whig. 1701.
7. Essays on peace at home and abroad. 1714.
8. Reflections on the constitution and management of the trade to Africa. 1709.
9. Reports to the commissioners for putting in execution the act, entitled, an act for the taking, examining and stating the public accounts of the kingdom. 1712.

ダヴナンの博識宏辯にして而して往々奇警卓拔なる意見を吐露することは、此等の諸書をして猶ほ今日に生命あらしむる所以なり。唯今日までの經濟學に於ては誤つてグレゴリー・キング法則と稱せらるゝものが彼の著書中全集第二卷第二頁二百二十四頁に載せあるが故に、ダヴナンの名の忘れられざるに過ぎず。而も此キング法則なるものは果してキング自ら之を唱出したるものなりや否や甚だ疑はしきものなり。キングの著述として今日に傳はるものは千八百一年刊行の *Chalmers, Estimate of the comparative strength or Great Britain* 此書蔵して商大圖書館に在り に附録として收めたる其著 *Natural and political observations and conclusion-*

upon the state and condition of England in 1696 あるのみ。而して此の書には所謂キング法則なるものに就て何等記す所なし。故にダヴナンは自説に力を加ふ可く特に之をキング唱出の法則なりとしたる者なるやも斗られず。而して今日の學理に照すときは、此の法則なるものは左迄重大なる價値を有するものにあらず。唯だ一の興味ある試みと稱す可き者なり。ダヴナンにして其眞の發見者なりとするも、別に彼の學名を重からしむ可きものにあらず。然るに右列擧したる諸書に述ぶる所は其實質に於て此の如き一時的のものに非ず、殊に英國の國情に鑑みるときは豊富なる参考の資料を吾人に提供するものあり。而して彼は殆んど有らゆる經濟上の問題に涉つて縦横に論義し、其の論を行るに廣汎なる知識を以てするものなれば讀んで益すること決して尠しとせず。

彼の議論の中心點は貿易均衡論なり。而して貨幣及富に關する議論に至つては論旨甚だ徹底せり。彼は貨幣と富との差異を明快に指摘して『疲弊せる英國』 *Britannia in-Enens* 前に引 けり の論を排撃せり。彼は貨幣を名づけて『貿易の使丁』と云ひ、其用は『數取り』たるにあり、されば紙幣と雖も其用に至つては全く貨幣と同じと云ひ、富有なる國民にし



て正貨を要すること甚だ少きことありと云ひ、此金屬の輸入は却つて好ましからざる場合あることを斷言す。全集第四卷 第百六頁

彼は又貿易の自由を主張し、貿易商業は其自然に放任するを以つて最も可とすと云ふ（但し航海條例の必要は之れを認む）。商人にして己れの考ふる儘に自由に外國に於て其利權を主張するを得關稅にして餘りに高額ならざる時は、善き港灣、航海及商業的精神生産に富める國土並に米國の如き善き植民地を有する國即ち英國を指していふは必ず貿易によりて富有を致す可きものなり。第五卷四百五十二頁而して穀物貿易に就ては自由なる輸入但し輸入税の全額を主張するを以つて最も當を得たりとし、商人の自利心に一任するの弊害最も少きことを主張せり。所謂キング法則なるものは此論旨を助くる爲彼の掲げたる所なり。其意穀物の供給の減少は遙かに著しき穀價の騰貴を惹起す理を、右法則によりて立證して穀物貿易の解放的なる可きを明かにするにあり。但し彼は後世の所謂自由貿易論を採るものにあらずして、殊に當時存在したる特許會社、亞弗利加及印度會社を辯護するに大に力を用ひたり。全集第二卷第百二十六頁以下

其他彼の論ずる所人口問題あり、租稅問題あり、國債論あり、植民政策あり、關稅制度あり、又た一般の政治問題ありて其涉獵の該博なること敬服に堪へたり。殊に政治算術に就ては深く精通するものゝ如く、統計學本質論をさへ試みたる箇條あり。第一卷第百二十七頁『政治算術の用を』然りと雖も其該博の反面には散漫を伴ふを免れず、殊にノース、バーボンの後に彼の説に接するものは、其間の距離の甚だ遠きものあるを認めざる能はず、必竟ダヴナンは所謂 Eclectic の雄とも云ふ可く、英國の經濟學に深さを加へたるの功は之れを彼に許すと能はざるなり。

ダヴナンと同じく該博なる Eclectic 的著述に *A discourse of trade, coyn and paper credit: and of ways and means to gain and retain riches, London 1697 printed for Brabazon Aylmer. To which is added the argument of a learned counsel, upon an action of the case brought by the East India Company against Mr. Sands, an interloper. 1697.* なる著者不詳の書あり、或は此書も亦たダドレー・ノースが匿名にて出版せしめたるものなりと云ふものあり。書中記する所往々取る可きありて、或はノース其人の筆に成れりと云ふの眞なるが如きもの



ありと云ふ。唯だ予は不幸にして今日まで未だ其書を手にするを得ず。

ダヴナンは十七世紀に於ける新商國主義の殿將にして、彼去ると共に茲に十七世紀は終を告げたり。而して是と同時に英國の學問としての經濟學の基礎工事は其終末を告たる者ならずんば非ず。尤も十八世紀に入りてもジョン・アスチル千七百五十九年生の如き、マシウ・デツカー千七百四十九年生の如き、其他タツカーの如き、ジョン・ユアヂーの如きありと雖も、英國の學問として特に其商國主義の立場に於る經濟學の發達に獨特重大の貢獻を爲したりと云ふ能はず。斯して十八世紀の英國經濟學は漸く商國主義の狭き領域を脱却して、ベテールとロツクとが一度開拓したる廣き分野に向て開展すべく初めたり。即ダニエル・デフォ千七百三十一年生を筆頭として、マンデヴキ千七百三十一年生の奇警なる、ジョン・ロー千七百二十九年生の破天荒的なる、共に一世の耳目を聳動するあり。以下ヴァンダーリントあり、ジョセフ・ハリスあり、マツシーあり、カンチオンありて貨幣及び貿易に就て理論的研究を進め、哲學の立場より出立するものに僧正バークレー千七百五十五年生あり、アダム・スミスの師たりしハチソン千七百四十六年生あり、稍趣

を異にするものにウアレ千七百九十七年生あり、ジョン・スミスあり、而してヒュームと粗ぼ時を同するものにベンジヤミン・フランクリン千七百九十年生（但し米人）あり、ジームス・スチュアート千七百八十年生あり、此等幾多の學者は各々其特長を以て我學の建設に寄與しつゝ、恰かも我がデヴキツド・ヒューム千七百七十六年生と、而してアダム・スミス千七百九十年生との出で來るを待てるが如き觀を成せり、然り然りと雖もハツクスレー教授が眞正の哲學を學ばんと欲する者はホツプス、バークレー及ヒュームの三人を研究せば即ち足ると云ひしに倣ふ時は、英國の學問としての經濟學其眞髓に徹底せんとするある者は、トマス・マンに始りノースに至りて完成せる商國主義と、ベテール及ロツクに始りてヒューム及スミスに至りて終結せる哲學（並政治算術）的潮流とに就て深く究むれば即ち事足ると斷言するの大過なきを見る。英國は其產出したる天才の殆んど凡をあげて此の二種の思想の發展に捧げ、茲に經濟學の祖國たるの實を完成したり。マルサス、リカルドあり、ジョン・スチュアート・ミルありと雖も、此の基礎的造營物あるにあらざれば決して彼の黄金時代を現出すること能はざりしなる可し。此の基礎的造營を



缺く他國の學問が、今日に於て未だ經濟學を英國より奪ひ來りて之を自國の學問とする能はざるは決して怪しむに足らず。英國の學問としての經濟學の決算期は今や時々刻々に迫りつゝありとの予輩の推斷にして誤ることなしとせば、次に起る所の問題は他に何國ありて英國經濟學の發達に對抗し得べき堅固なる基礎的造營を築き上げつゝありや是ならずんばあらず。然れども此問題の解答に着手する前未だ殘る所の事業あり、其は他なし、以上縷述した商國主義經濟論の發達と常に相駢馳して基礎造營の事に當りたる英國哲學が、經濟學に寄與したる所如何を考察すること即ち是なり。知らず此事を企つ可き餘時と餘力との予輩に與へらる可きや否やを。

—(以上新たに補筆す)—

## 九 マルサス及リカルド研究

(改定經濟學研究 第六篇)



一 人口法則と生存權

マルサス對アーサー・ヤング

附錄 西洋學者不詮索の一例

二 價値の原因と尺度とに關するマルサスとリカルドとの論争

三 リカルド經濟原論の中心問題

附錄 リカルドの地代論よりマルクスへ

解題

本篇三章一面に於ては學說史研究の副産物たり、他面社會政策に於ける理論の根據に一考を加へんと期するものなり。マルサスとリカルドとは予が年來研究の題目にして、向後更らに精考を積まんと期する所、今未熟の文を茲に收むるものはマルクス研究への過渡を便にせんが爲めのみ、讀者之を以てマルサスとリカルドとに關する卑見の全般を速斷するなからんことを切望す。

一 人口法則と生存權

(マルサス對アーサー・ヤング)

一 アーサー・ヤングの人口論

マルサスの人口論は第一版の標題に明記する如く、始め主としてゴドウィン次でコン



ドルセーの *Perfectibility of man* に關する意見に反對の趣意を以て成れるものなり。然るに人口論一度世に出で、賛否の聲喧しきに及び、マルサスは更らに群書を涉獵して自己の主張を資く可き材料を豊富に蒐集するに勉めたる結果、自説と同様の論究を自己以前に下したる者寧ろ多數なるに驚きたり。故に彼は人口論第二版の序に云つて曰く

In the course of this inquiry, I found that much more had been done than I had been aware of when I first published the essay. The poverty and misery arising from a too rapid increase of population had been distinctly seen, and the most violent remedies proposed, so long ago as the times of Plato and Aristotle. And of late years the subject had been treated in such a manner, by some of the French Economists, occasionally by Montequien, and, among our writers, by Dr. Franklin, Sir James Stewart, Mr. Arthur Young, and Mr. Townsend, as to create a natural surprise, that it had not excited more of the public attention. 『人口論』第二版千八百三年第四頁。アシユレー名著集版第六十八頁。ワイド・ロック商會刊行通行本第三十五・三十六頁

此の研究の進行に伴ひ予は予が始めて此書を公けにせしとき知り居りたるよりも、遙かに多くが既に前人によりて成されありしを見出すに至れり。人口の激増より起る貧困並に

窮厄の事實が看取せられ、また其救済策として最も激烈なる提案のなされたることはブラトン及アリストテレスの時代に於て既に之あるを見る。近年に至りては佛蘭西經濟學者の或もの斷片的にはモンテスキューが同一の論法を以て此問題を討究し、我英國にてはドクトル・フランクリン、サー・ジェームス・スチュアート、ミスター・アーサー・ヤング及ミスター・タウンゼント等亦然り。されば此等學者の議論が公衆の注意を惹くこと少きは寧ろ奇と稱す可き程なり

此く人口論問題に關してマルサスの先覺者とも見る可き學者の數多き中に付て殊にマルサスと立論の趣を同ふするものはアーサー・ヤングなり。ヤングの意見は根柢に於て殆んどマルサスと相分つ所なく、彼の考證の爲めの考證を喜ぶ詮索家をして兩者の説を考覈せしめば、必ずやヤング著述のマルサスに先つの故を以て、マルサスを以て *Platonicism* を敢てしたりと斷ずることならん。然れどもマルサスは此疑を受く可く餘りに高潔なり。恰かもアダム・スミスのジョセフ・ハリスに於ける如く、同一の時勢は多くの點に於て甚だ異なる二人者をして同一結論に到着せしめたりとするの妥當なるに若かず。



マルサスは其著第二版に於てヤングを引照する甚だ審にして親切に其説に評論せり。但しマルサスの引く所は有名なる『佛蘭西旅行記』を主とし其他若干の書に言及すと雖も、ヤングは其前既に『政治算術』なる書其以前『北英旅行記』の著ありて人口に關する説を載する由なれども予は此書を得ざるが故に今略すに於て自家の人口論を論陳したり、前著は千七百九十二年マルサス『人口論』第一版のは千七百九十八年出版刊行にかゝり、予の見る所の『佛蘭西旅行記』は其翌々『政治算術』の書は千七百七十四年刊行のものにして前者に先つ實に十八年なり。さて『政治算術』なる書は英國の農業状態を記述し、何故に其が歐洲に冠たるかの原因を詳論するものにして、『佛蘭西旅行記』は之に反し、大革命以前の佛國農業状態に關する最大最良の記録たると共に、佛國の農業が英國に比し著しく劣る原因を精しく考へたものなり。而して兩書の何れに於てもヤングは人口の問題を最重要なるものとして取扱ひたり。今兩者を對校玩味する時は、彼が人口學說の概要を悟了し得るの便あるのみならず、又以て相對立せる二大國民經濟の特色を看取することを得、現實的歴史的研究に従事する者に取りて絶對の資料たり。『政治算術』の書名は甚だ長し、即ち

Political Arithmetic: Containing observations on the present state of Great Britain; and the principles of her policy in the encouragement of Agriculture Addressed to the Economical Societies established in Europe, to which is added A memoir on the corn trade drawn up and laid before the Commissioners of the treasury by Governor Pownall. London 1774.

『政治算術』大英國の現状に關する觀察并に農業獎勵に於ける其政策の原則。歐洲にある經濟協會に寄す。附録ガヴァーナ・ポーンオル立案大藏省委員へ提出したる穀物貿易意見 倫敦千七百七十四年』

此の書の結構は英國農業の大なる進歩の原因を列挙して一自由 二租税 三貸地制度 四タイス 五徭役の自由 六穀法 七一般の國富 八インクロージュニア 九肉類の消費の七條とし、以下章節を分て各條を詳述して之を第一章と名け、第二章に入りて農業進歩の妨害を除却することを論じ、第三章は以上に關する世上の謬見を論評して本論を終り、附録としてポーンオルの意見を収載す。

人口問題に關する彼の意見は第一章第七條一般の國富を論ずる第五項に掲ぐ。第六十一頁より 其意謂らく、英國の人口多きは之を支ふるに富あればなり。The national



wealth increased the demand for labour, which had always the effect of raising the price, but this rise encouraged the production of the commodity, that is, of man or labour, call it which you will, and the consequent increase of the commodity sinks the price or industry to the level of the demand. You will, and the consequent increase of the commodity sinks the price or industry to the level of the demand. The increase of the price of labour encourages the production of the commodity, which had always the effect of raising the price, but this rise encouraged the production of the commodity, that is, of man or labour, call it which you will, and the consequent increase of the commodity sinks the price or industry to the level of the demand.

増加は労働の価格を引上ぐるにあらす、其工業に従事する労働者の数を増加す、蓋し Employment の増加は hands の増加を惹起すものなればなり、パーミンガムの人口は千七百五十年に二萬三千なりしが、千七百七十年には三萬に増加したるは何故ぞ、答へて曰く、其れ丈け Employment 増加したればなり、人間に對する需要あるところ人間の数は之に應ず可し、人間に對する需要とは言ひ換ゆれば ease of subsistence なり、生計維持の容易となるは米國に土地餘裕あると同じく人口の増加を容易ならしむ。米國に於て結婚數多きは生まるゝ所の子が負擔とならざるによる、パーミンガムに於ける亦同じ。蓋し子は其の手に用ゐる得るに至れば優に己の生計を支ふるを得ればなり。要するに Employment 増加する所人口は増加し(パーミンガム)、其反對に Employment 増加せざる所人口亦増加せず(コルチェスター)、一國一世紀を平均して Employment 増加したる場合には人口

は必ず之に相應して増加したるを知る可し。英國の海運業を見よ、其理亦同じ。英國の海員の数は増加したり、何故ぞ Employment 増加したればなり。海員に對する需要の増加して已まざる限り、此需要に應ずる現象は絶えず人口必ず増加し、需要の増加如何に激しくとも之に應じ難しと云ふことなし。農村に到りて見よ、同一の眞理明瞭なる可し、農業進歩して労働者を需要すること多ければ、其の供給も亦多かる可し。彼故に曰く

Who supposes that a county of wurrens, heaths, and farming slovens, converted to well tilled fields, does not occasion an increased demand for hands:—And was it ever known that such a demand existed without being supplied? 六十三頁

然るに農村を去りて都會に入るもの多きは何故ぞや。他なし農村に Employment なく都會に之れあればなり。都會に就くとは畢竟職業を追ふて走ることなり。they go to that very circumstance which is to increase their number. They go, because they are demanded; that demand it is true takes, but then it feeds them. 人口は絶えず増殖せんとす、唯之を養ふ能はざるに苦む、されば之を養ふの道即職業にあらば人は争つて之に赴きて其數を増加



するなり。パーミンガム、シエフキールド又はマンチエスターに於ては世上の論者多くは、人口減少の原因となる可き事實行はれたりと云ふに拘らず、實際は却て人口増加せるは何故ぞ、他なし地方より移入民多かりしによる。何故に地方民はヨーク、ウキンチエスター、カンターベリー等に移住せず、以上の諸都會に赴くや、他なし前者には需要あり後者には之なければなり。此等の明白なる事實を知る以上、吾人は *its employment which creates population* (p. 61) なるを否定する能はず、即ち人口問題の研究は職業増減の問題たるを認めざるを得ざるなり。 *A position impossible to be disproved; and which, if allowed, throws, the enquiry concerning the depopulation of the Kingdom into an examination of the decline or increase of employment.* p. 64 如何に他の原因働くとも、人口に對する需要にして減少せざる限り其増加は已むことなし、戦争を起して幾萬の壯丁を屠り、移出を奨励して民口を減ずるとも、職業の残りて存する限り人口は之に應ずる丈けは増加する事、牛を屠りて牛肉を少し、小麦を輸出して在荷を減少するとも、牛肉小麦に對する需要減ぜざれば其殘部の牛肉小麦の價格が騰貴すると同一理なり。價格騰貴すれば供給亦必ず早晚増加す *how can you encourage the reproduction more powerfully than by adding to its value?* 故に曰く、人口

多き國の特色は *many people, but labour dear* なること之なり、人稀薄なる國の特色は *few people, and labour cheap* なることにあり。和蘭は勞働の高價なること歐洲中第一なり、從て又た人口密度の大なる歐洲第一の國たり。人口増加最大の刺戟は *Ease of acquiring income* 人口増加最大の障礙は *Difficulty of acquiring income* なり。是れ一國人口の問題を決定する標準なり。曰く

*If you view the country and see agriculture under such circumstances that the farmer's products will not pay his usual improvements, and consequently, dismissing the hands he formerly kept. If the manufactures of the Kingdom want a market, and the active industry, exerted in them, becomes languid, and decayed. If commerce no longer supports the seamen she was wont to do: If private and public works, instead of entering into competition for hands with the manufacturer and the farmer, stand still amidst numbers who cry in vain for work—If these effects are seen, a Ward of employment will stare you in the face, and that want is the only cause of depopulation that can exist.....Does not the great active cause, Employment, operate more powerfully than ever? Away then with these visionary ideas, the disgrace of an enlightened age, the reproach of this great and flourishing nation*



彼れは英國の經濟狀態就中農業狀態に關する樂觀論者にして、ヒュームが「人は性として現在を非難し過去を稱揚する癖を有す」ヒューム論集千七百六十四年版第四百九十頁より引く。『政治算術』六十六頁脚註。の言を引き、又た現狀を批議する論議は容易に人の耳に入り易きも、現狀を善しとする意見は動もすれば人に嫌はれると歎じたるが序文中今人口問題に就いても英國の現狀を以て満足し悲觀論を斥くるに力を用ゐたり、其主なる論敵はプライスなり、之れに反しフランクリン (When labourers are plenty, their wages will be low, by low wages a family is supported with difficulty; this difficulty deters many from marriage) の言を其著『人類増加に關する觀察』より引く) 及びダヴナン (where a nation is impoverished by a bad government, by an ill-managed trade, or by any other circumstance, the interest of money will be dear, and the purchase of lands cheap: the price of labour and provisions will be low; rents will every, where fall; land will be untilled, and farm houses will go to ruin; the yearly marriages and births will lessen, and the burials increase. The stock of live cattle must apparently diminish; and lastly, the inhabitants will by degrees, and in some measure, withdraw themselves from

such a declining country. Davenant, Works vol. i. p. 358) 及サー・ジェームス・スチュアートは人口増減の原因を勞働に對する需要の増減にありとする點に於て彼の同論者として有力なり。

ヤングは『佛蘭西旅行記』に於て佛國人口の英國より稀薄なる有力の原因として土地分割の過小をあげて極論するものなるが、今『政治算術』の書に於ても粗ぼ同一の主張を爲せるを見る。即ち彼は親しく佛國の農業狀態を研究する以前既に此點に著眼したるものなり。曰く

A country divided into little farms, with many little estates supporting little landlords, has certainly the appearance of population: these writers say, that if the small farms are thrown into large ones, many of the people will disappear: let us (which we need not do) grant this fact. It is saying, that when the country was more populous, its inhabitants eat much more food than at present, consequently could not spare so much for towns. The people employed in the country in raising the fruits of the earth, may be employed with so little economy as to eat up the whole produce; in which case, there can be no towns..... You had before a population useless, because not industrious; who, instead of adding to the national wealth, only eat



up the earth's produce; this population is changed for industrious manufacturers, artisans, and scamen, who eat the same produce, but pay you amply for it. With one population, let it be ever so great, you must be a poor and a weak nation: with the other, you are a wealthy and powerful one. p. 71.

然るに英國農地の分割は過小ならず、又た工業海運業盛にして労働に對する需要大なり、此の状態にして變ぜざる限り英國は Depopulation を恐るゝに及ばず、恐る可きは需要なき人間の過大なることは是れなり、農地分割過小なるときは此恐なきを得ず。英國に於ても十七世紀と十八世紀とを比較するときは、前者に於て此憂多く後者に少きを知る。

In the last century, the farms it is said were smaller, and consequently more farmers and their families. But let me ask what a little farmer or labourer did with his family? That surplus of the population of villages, which in the present age finds at all times a refuge in manufactures, commerce, arts or some branch of industry, (all which are infinitely increased) could not do the same then; for they had not such abundance of employment to resort to; and if the villages were better peopled, this must have happened at a time when such a resort was much more wanted. What must have been the consequence of this? Why the little farmer's houses and the cottages must have been crowded with people *without employment*, and consequently *without the means of living*: this might go to a certain point, as far as relations would submit to be burthened,

but it would go no farther, and must operate as a great discouragement to marriage. p. 77.

ヤングの人口問題に關する意見は、佛國に赴き其の農業状態を精査するに及びて更らに精彩を著けたり、是れ其『佛蘭西旅行記』に載する所にして、マルサスが自己と同説を述ぶるものとして『人口論』第二版に引用する所なり。彼の『旅行記』の第一篇には旅行日誌を録し、第二篇に至りて章を分ち項を設けて系統的の論述を試む。人口論は收めて第二篇の第十六章『佛蘭西の人口』の下にあり。彼は佛國人口數に關する諸種の考證を引用して *Etat générale de la population du royaume de la France* なる一表を掲げ、轉じて英佛比較論に入り、英國の人口の密度佛國の其れに勝る所以を示し、倫敦一市のみにて佛國の巴黎、リオン、ボルドー、マルセイユの四大都市に拮抗する人口數を有する事を擧げ、*the comparison shows at once the vastly greater activity there must be in one country than in the other* と断定す。第二版四百八十一頁 是れより進んで人口問題の一般的考究に入る、曰く、經濟學の凡ての問題中人口問題ほど誤説謬見の簇がるものあるを知らず、數百年間識者は人口數の多少を以て直ちに國運の消長を判定す可き標準なりとし、唯だ其數の多きことのみ喜べり、



to enumerate the people was the only step necessary to be taken, in order to ascertain the degree in which a country was flourishing とは一般に考へられたる所なり。予は二十二年前千七百十九年『北英旅行記』なる著に於て此種の謬見を排斥するに勉めたり、予の結論は that no nation is rich or powerful by means of mere numbers of people; it is the industrious alone that constitute a Kingdoms wealth 單に人口數のみによりて國は富み又は強きにあらず、一國の實力を形成するものは産業に勉むる人口是れのみと、而して此論定は既に千七百七十四年『政治算術』の書及千七百七十九年出版の其第二卷に於て之を重説せり。予と時を同ふして遙に勝れたる天才(サー・ジェームス・スチュアート)は、予が微力の企て及ばざりし點を論究して、人口の原則に就て卓越なる名論を下せり。今此論を明證する實例は佛國に若くはなし、予は佛國を視察研究したる結果、其人口は産業及勞働に比して過大なるを見出せり。佛國にして現人口より五六百萬を減ずることを得ば、より強くより繁榮となる可きを疑はず。 From her too great population, she presents in every quarter such spectacles of wretchedness, as are absolutely inconsistent with that degree of national felicity which she was

capable of attaining even under her old government (p. 482)。然らば此人口過大の原因は何ぞや。第一政府が細民を保護するが爲めにあらざるは明なり、何となれば佛國の細民は特權階級の意の儘に虐られ居ればなり。第二氣候の爲にあらず、何となれば佛國の出生・死亡統計は英國の其れに比して優れる數を示さざればなり、又た和蘭・フランスの如き獨逸及伊太利の或部分の如き遙かに氣候悪しき所にして佛國よりも更らに人口多き實例あればなり。故に予斷じて曰く、其の重なる原因は佛國の土地が英國に於ては到底夢想だもせざる程の小所有に分割せられ居ること之れなりと。佛國に於ては生計を維持し得る望微少だもあれば人は直ちに結婚す。 The inheritance of ten or twelve acres to be devided amongst the children of the proprietor will be looked to with the views of a permanent settlement, and either occasions a marriage, the infants of which die young for want of sufficient nourishment or keeps children at home, distressing their relations, long after the time that they should have emigrated to towns. 故に僅かにても衣食の道を妨ぐ可き事情起るときは農民の困窮は甚大なり。農民の餘剩を吸収して之に衣食を與ふる都會と、其工業となく



人皆極小地積を耕して甘ずるが故に、人口増加の力は常に其需要を超過せんとするなり。英國とても全く此憂なきにあらざるも、之を佛國に比するときは莫大の差あり The indiscriminate praise of a great subdivision, which has found its way unhappily into the National Assembly, must have arisen from a want of examination into facts (p. 484) 小所有分割を無上の善事と信ずるは、實際を考究せざる者の速断より出づ。故に曰く。

Go to districts where the properties are minutely divided, and you will find (at least I have done it universally), great distress, and even misery, and probably very bad agriculture.

Go to others, where such subdivision has not taken place, and you will find a better cultivation, and infinitely less misery. p. 484.

政治の悪く行はるゝ國は概ね人口の過大に苦む國なり、西班牙の如き之なり that country which has more people than it can maintain by industry, who must either starve, or remain a dead weight on the charity of others, is manifestly too populous; and Spain is perhaps the best peopled country in Europe, in proportion to its industry 養ふ可き産業なき過大の人口を有する國は禍なる哉。

Quanto la popolazione proporzionata ai prodotti della natura e de' l' arte è vantaggiosa ad una nazione, altrettanto è nociva una popolazione soverchia.

之を要するにヤング人口論の要旨は

労働に對する需要増加するときは人の増加必ず之に伴ふ。需要減ずるときは人口亦減少す可きなれども、他の事情ありて其働きを妨げ、必要なき人口の存すること屢々之あり、此くの如き國にては貧窮困厄交々到るを免れず

と云ふにありて、大體の著眼に於てマルサスが彼を以て自己と同説を把るものなりと云へるは當れり。然るに此く大體に渉る見解に於て相一致する兩人者が、其貧窮と困厄とを救済す可き方法に就ては甚だ異なる意見を有し、マルサスは人口論第三版の附録の大部分を此點に關するヤングとの討論に充てたり。此論争は單に政策上の一問題たるに止まらず、根柢に於てマルサスとヤングとが著しく異なる思想を有し、之に基いて救済政策を案出したるによるものにして、マルサスは其悲觀論を一貫し、ヤングは飽迄其樂觀を捨てず、かくて理論の上存在する一大懸案を暗示したるものにして決して輕視す可か



らず。然るにマルサス研究者の數甚だ多く、殊に近來社會政策と關連して其人口論を討究するもの頗る増加したるにも拘らず、這箇重大事に關するマルサスの立場を明かにしたるもの殆んど之れなく、殊にヤングとの討論に考及したるものに至つては一も之を見ず、寧ろ奇と云ふ可きなり。

## 二 人口の法制と生存權との衝突

マルサスとヤングとが救濟政策に關して討論せる、其抑も因て起る根本見地の相違とは何ぞや。答へて曰く、人口の法制と生存權の要求との關係に就てマルサスは生存權を全然否認し、ヤングは或度まで是認することは是れなり。

マルサスが提唱したる人口法則を是認すること、今日現在の社會政策の理論を容るること、は果して兩立す可きや否や。是れテオドル・ヘルツカが其の近著 *Das soziale Problem* Berlin 1912 に於て更らに新たに提出し解答を試みたる問題なり。然れどもヘルツカの研究を以てしても未だアルベルト・ランゲが其 *Arbeiterfrage* Duisburg 1895 に於て試みたる所

に加ふる所殆んど之れあるを見ず。ランゲ謂へらく、社會問題の起るは生存競争が生物界を支配する根本原則たるにあり、社會上に於ける生存競争は單に適者生存と云ふ可からず、天は其自然淘汰を完全に行はんためには生存する能はざる適者をも産む、かくて適者相互の間に於て亦た生存競争起るを免れず、之を *Kampf um die bevorzugte Stellung* 『優勢競争』と名く、ランゲは此の競争を説明して *die Keime der Befähigung und Neigung zu einer leitenden Stellung sind in Massen ausgestreut und die grosse Mehrzahl derselben ist von der Natur zur Verkümmernng bestimmt.* (I. A. Soz. Neudrucke. IV. S. 73.) 社會に於ける指導的地位(優勢)に對する適能及傾向は多數の人間の間に散布せられあり、而して其中多數のものは終に此地位に達する能はずして(優勢を占むる能はずして)墮落す可く定められあるなり』と云へり。是れ人類が他の生物と異りて特に支配せらるゝ運命なり、從て社會上劣者ならず無能者ならざるものも、唯だ此指導的地位に就て優勢を得ざるが爲に下層に沈淪し、終に其生存を維持し能はざるに至るもの其數甚だ多し、此れ所謂社會問題、勞働問題を喚起する所以なりと。今假りに諒解を易からしめんが爲に、生物界一般に行はるゝ



を一般的生存競争と名くる時は、人類は一般的生存競争の外特殊生存競争をも爲さざる可からざるものと云ふ可きなり。抑も生存競争自然淘汰の思想はダルウキン之をマルサスの人口論より暗示せられたるものなるは人の普く知る所なり。自然淘汰とは一度生れたる生物の中生存を許されざるもの多數ある事を意味す、自然は淘汰の候補者として到底生存の見込なき多數の生物を産み出す。一國一社會に生れ出づる所の人口は始より其生存を必し能はざるものにして、又縦令生存するも更にランゲの所謂優勢競争に打克たざる可からず。されば社會の多數者を必ず生存せしめんとするは、此自然及社會の大則に逆行するものならずんば非ず。マルサスは最も痛切に此理を道破したり、曰く

*A man who is born into a world already possessed, if he cannot get subsistence from his parents or if the society do not want his labour, has no claim of right to the smallest portion of food, and in fact, has no business to be where he is. At nature's mighty feast there is no vacant cover for him. She tells him to be gone, and will quickly execute her own orders, if he do not work upon the compassion of some of her guests.*

此一句は第二版 第五百三十一頁 のみにありて、第一版にも又第三版以下にも全く之を載せずと雖も、後段(一七頁)西洋學者不詮索の一例を見よ 前後の關係に照して彼は此一句に道破したる思想を捨

てたるにあらず、否彼が人口論全體の立論は必ず此の言明を必要とするものなりと斷言す可し。蓋し此一句はペーン『人間の權利』に對するマルサスの反對論の中にあり。マルサス曰く『ペーンの人間權利論によりて惹起されたる害を除くには、人間眞正の權利の何物なるやを一般に知らしむるより有効なるは無かる可し、然れども之を論究するは今予の爲さんとする所にあらず、唯だ茲に人類が必ず有すと一般に信ぜらるゝも、予の信する所にては人類は之を有せず又た有する能はざる一の權利あり、即ち人が其の勞働によりて生存を購ふを欲せざるとき、猶有すとせらるゝ所謂 Right to subsistence (生存權)是れなり。現時の法律は此の權あるを認め社會を拘束して定規市場に於て職業も食料も得る能はざる者に之を給す可しと命ず、然れども之れ自然の法則を顛倒せんとするに外ならず、其行はれず、助けんとする貧者は却て此種の偽によりて欺かるゝにより最も慘酷なる苦を受くるに至るは當然なり』と。此一句は第二版 五百一頁 にもあり、第三版 八百六十二年刊 第二卷 にもあり、マルサス生時の最終版たる第六版 千八百二十六年刊 にもあり、三百八十二頁 にもあり、マルサス生時の最終版たる第六版 千八百二十六年刊 にもあり、通行本ワルドログ版四百七十六頁にあり、但しアシニューレー編名著拔萃は此の章に及ばず。彼は直ちに之を續論して Abbe Raynal が其



『印度史』第二十卷三 に “Avant toutes les lois sociales l'homme avoit le droit de subsister” (凡ての社會法律の前に於て人は生存權を有す)と云へるを痛撃し其文亦第二以下凡ての版本に收めたり而して右引く所 A man who is born 云々は此兩句の間にあるものとす。さればマルサスは其根本見地よりして全然生存權を否認するものたるや些の疑の容る可きなし。

是れ誠に當然なり。マルサスにして生存權を是認するものならば彼は大なる自家撞著に陥るを免れず。然るに人口問題に關してマルサスと粗ぼ同一説を把るアーサー・ヤングは少くとも給養權 Right to support の形に於て生存權を是認するなり。マルサス豈に黙して已む可けんや。於是乎マルサスは『人口論』第三版の附録に於て言を極めてヤングの説を排撃せり。此の附録は通行本にも又たアシュレー編の名著拔萃本にも收められたれば何人も容易に之を見ることを得可し。予の遺憾とする所はマルサス討論の題目たるヤングの Annals of Agriculture 並に The question of scarcity plainly stated, and remedies considered (published in 1800)

マルサス『人口論』第二 を見る能はざることは是なり。故に  
版五百七十二頁に引く

予は今マルサスの引照を正として受取らざる可からず。マルサス曰く

After having once so clearly understood the principle of population as to express the same and many other sentiment on the subject, equally just and important, it is not a little surprising to find Mr. Young in a pamphlet (前掲) observing, that “the means which would of all others perhaps tend most surely to prevent future scarcities so oppressive to the poor as the present, would be to secure to every country labourer in the Kingdom, that has three children and upwards, half an acre of land for potatoes, and grass enough to feed one or two cows”……“Every one admits the system to be good, but the question is, how to enforce it.” I was by no means aware, that the excellence of the system had been so generally admitted. For myself I strongly protest against being included in the general term of every one, as I should consider the adoption of this system, as the most cruel and fatal blow to the happiness of the lower classes of people in this country, that they had ever received. 第二版五百七十三頁

此の一節は第四卷第十一章『貧民の狀態を改良す可く提議せられたる種々の案に於ける誤謬に就て』の中にあり。三人以上の子を有する農業労働者に馬鈴薯を作り一二頭の牝牛を畜ふ可き草を得せしむる爲めに半エーカーの土地を與ふ可しとのヤングの提案はマルサスの極力反對する所なり此くの如きはヤングの正しく説きたる人口理論と